
26のアナザーサイト/sightA

倉元裕紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

26のアナザーサイト／s i g h t A

【Nコード】

N8107X

【作者名】

倉元裕紀

【あらすじ】

銀髪の吸血鬼がいる。高校生の荒瀬瞬は、一緒に登校していた妹葉月からそんな噂話を聞かされるが、その中のある一言が頭を離れない。そして、その言葉は最近頻発している昏睡事件と関係があった。一方、同級生の義江詩織は、突然昏睡して目覚めなくなってしまった親友のために奔走するが、そこにも銀髪の少女の姿があった。Aは確信、天使、そして始まり。

1

清々しい気分だった。

気持ちがいい。

心も体も重さがないみたい。

軽い。

そう。きつと鳥になったんだ。

ああ気持ちいい。

こんなに幸せでいいのかな、とちよつと不安になる。
なんていうのは嘘で。

これっぽっちも不安なんてない。

ああ気持ちいい。

あんな事があったなんて、嘘みたい。

昨日はあんなに・・・

あんな・・・

あれ？

何があつたんだっけ。

えっと・・・

なんだろう。

まあ、いつか。

こんなにいい気持ちなんだから。

空も青いし。

ここは緑がいっぱいなんだ。

綺麗な花がいっぱい咲いてる。

こんな場所があつたんだ。

知らなかったな。

もっと早く知っておけば良かった。

ここなら毎日でも来られるし。

こんな近くに・・・

近くに。

・・・どこ？

ここって、どこだっけ。

どうやって来たんだっけ。

変なの。

まあ、いいよね。

どこだって。

あ、風だ。

爽やかな春風。

気持ちいい。

どこから吹いてるんだろう。

あっちかな。

ちよっと思ってみよう。

風ってどこから来るのかな、なんて。

そんなに子供じゃないけど。

でも、今はいいよね。

見てみたいな。

近くにはないよね。

もしかしたら、遠いかもしれない。

でも大丈夫。

鳥になったんだから。

とっても軽いから、飛んでいける。

どこにだって・・・

「いいか？」

びっくりした。

いきなりなんだろう。

それより。

誰かいたんだ。

全然気づかなかった。

誰だろう・・・

たぶん、男の人の声だった。
どこにいるんだろう。

「少しいいか？」
まだだ。

急に声を出すのはやめてほしい。
びっくりするんだから。

それにしても・・・

今度ははっきり聞こえた。

結構近くにいるみたい。

どんな人だろう。

男の人なのは分かったけど。
でも。

えっと・・・

やっぱり、見てみないと分からないよね。
緊張する。

落ち着かないと。

息を吐いて・・・

よし。

せーの・・・

「いいか？」

・・・あ。

ど、どうしよう。

返事しないと・・・

何か・・・

あ。

でも、そういえば。
鳥になってたんだ。

じゃあ、返事しても通じないね。
うん。

きつとそう。

・・・ちょっと悪い気もするけど。
仕方ないよね。

そもそも、なんで私なんかに。

私・・・

・・・なんだろう。

ちょっと気持ち悪いな。

気分が悪い。

急に・・・

なんでかな。

「大丈夫か？」

・・・うん。

心配してくれてるんだ。

聞いてたより、優しいんだ。

みんなが言うよりも。

・・・みんな？

みんなって・・・

誰だっけ。

・・・変、なの。

また気分が・・・

「無理しなくていい」

なんでだろ。

初めて会ったはずなのに。

この人の事、知ってる気がする。

そう・・・

やっぱり、ちょっと変わってる。

私、鳥なのに。

鳥に話しかけたりするんだね。

変な人。

「そうじゃない」

・・・ダメだ。

気持ちが悪く、悪い・・・
でも・・・

これ、前にもあったかも・・・
えっと・・・

そう。

これで、じゃないな。

確か・・・

「ここまでだな」

そう。

そして、最後に・・・

えっと。

自分が・・・じゃなくて。

自分を、かな。

自分を・・・なんだっけ。

うーん・・・

ダメだ。

もう、無理。

とにかく、気分が・・・

「自分を・・・」

・・・よく聞こえない。

でも、いいよね。

今、ちよつと。

気分が・・・

だから。

だから、ね・・・

春とはいえ、まだ朝は肌寒い。

荒瀬瞬はアスファルトの坂道を下りながら、ふとその事に気づいた。

今頃気付くなんてどうかしている。朝起きた時も、家を出た時も、今よりもっと寒かったはずなのに。

瞬には昨日からずっと頭の隅で気になっている事があった。それに気を取られすぎて、寒さを忘れられるほどだったらしい。ある程度は仕方ないとはいえ、間が抜けていると言われても文句は言えなかった。

左手の腕時計を見る。6時半。普段ならようやく起きる時間だった。

改めて身体に意識を向けてみると、結構冷えるなど再認識する。そうになると、もう一つ、これも今更だったが、瞬には気になる事があった。

隣を歩く少女に目を向ける。

着ているのは、紺のブレザーに白のブラウス。そして、紺のスカート。

何も間違っていない。それが彼女の通う学校の制服なのだから。

だが、気にはなった。

「どうかした？」

気付くと、いつの間にか少女はこちらの顔を覗き込んでいる。

やや大きくて、見つめると思わず引き込まれそうな、深みのある黒い瞳。

もつとも、目を引くのは瞳だけではない。小さくて整った顔立ち、長い艶やかな髪、そして、ほっそりとして均整のとれたスタイル。こう表現したのは瞬の親友だが、きつとほとんどの人が同じ様な評

価をしているだろうと瞬は確信している。少なくとも、彼女の容姿を悪く言う人物にはお目にかかったことがない。

だが、そんな容姿はさておき、瞬にとってはとても身近で大切な存在だ。

彼女は、荒瀬葉月は、瞬の唯一人の妹なのだから。

「寒くないか？」瞬は妹の服装を見ながら言った。

「あ、うん。まだ寒いね」葉月は笑顔で答える。全く意図が伝わっていない。

「スカート、長くしたらどうだ？」

「あれ・・・長い方が好き？」

「いや、そうじゃない」葉月はたまに妙な事を言い出すが、もちろん瞬は慣れていた。

「じゃあ、なんで？」

「長くしたら、少しは暖かくならないか？」

「なるの？」

「いや・・・」瞬は少し考える。「履いた事がないからはっきりとは言えない」

「ならないと思うよ。だって一番長くしても、これくらいだから」葉月は左手で膝の少し下辺りを示した。

「そうか？」

「うん。なんなら、ここで長くしてみる？」葉月がブレザーに手をかけながら言う。

それを見た瞬は嫌な予感がした。

「いや、いい」

「いいの？」葉月は意外そうな表情だった。

「ああ」

「でも、そう言われてみると少しは暖かくなるかも」

「いや」瞬は首を振る。「たぶん俺が間違っていた」

普段女子がどうやってスカートの丈を調整しているのか知らないが、いくら早朝で誰もいないとはいえ、路上で行うような行為とは

思えない。こうなると分かっていると言ってしまった自分はやはり間が抜けている。今度は家を出る前に言っておこうと、瞬は密かに心に留めた。

葉月はそんな瞬の横顔をしばらく不思議そうに見ていたが、やがて彼の前に回り込んだ。

「ねえ。それよりも」そう言って瞬の目をのぞき込む。「私の話、ちゃんと聞いてた？」

「ああ」上の空だったが、全く聞いてなかった訳ではない。「吸血鬼がどうか・・・」

「そうそう！希美ちゃんが会ったんだって」

希美というのは葉月の同級生である。

「そうか」

「他にも見た人はいっぱいいるんだけど、会ったのは希美ちゃんだけなんだって。すごいでしょ？」

「すごいのか？」

「え？だって、吸血鬼なんて滅多に会えないんじゃない？」

普通は一生会えないだろうと瞬は思ったが、口にはしなかった。

「その人が吸血鬼だって、どうやって確認したんだ？」

「それがね・・・」葉月はふっと笑みを浮かべた。本人は恐怖を演出したかったのかもしれないが、楽しくてたまらないというのが見て取れるほどだったので、完全に失敗していた。そして何より、瞬にはホラー系の話がいまいちピンと来ない。

少し間を作ってから、葉月は囁くように言った。

「その子、人の血を飲んでたんだって」

「そうか」吸血鬼というからにはそうだろう。

「こう・・・ゴクゴクって」

「ゴクゴク？」

「そう。水筒に入ってたんだって」

何か話がおかしいと瞬は思った。

「葉月」

「え、何？」

「その話、間違っていないのか？」

「え？・・・間違っていないと思うけど、どこか変？」

「とりあえず、上手く場面が想像出来ない」

「じゃあ、私の説明が下手？」

「そうじゃない」 瞬はすぐにそう答えたが、どこがまずいのか、具体的に説明しづらかった。

「とりあえず、順を追って説明してくれるか？」

その日、土谷希美は馴染みの雑貨屋で買い物をしてから帰宅するところだった。

その店は閑静な住宅街にある家族経営のお店で、周囲には他の商店等は一切無い場所にある。だから、希美が見つけたのも偶然だったし、結局その日は他の用事があったので立ち寄らなかったのだが、こんな場所に雑貨屋があるという意外性となんとなく良さそうな外観が頭のどこに残っていた。先月の日曜日にそれをふと思いだし、ぶらりと行って見たのが最初だった。

それ以来、希美はその店の虜になった。可愛らしくて暖かみのある店の雰囲気と商品が、希美の趣味にぴったりだったのだ。アジア、ヨーロッパ、アフリカ等、世界のいろいろな国の雑貨が置いてあるので、それを見ているだけでも興味をそそられて、何時間いても飽きなかった。

今、帰り道を歩きながらも、思い返すのはその店の事だった。その雑貨屋の商品は小物が中心なのだが、片隅に少しだけ服が陳列してあって、今日はそれが気になっていた。中央アジアの民族衣装らしいのだが、目を見張るほどの細かい刺繍と淡い赤色がとても綺麗で、思わず見とれるほどだった。

だが、自分が着るにはまだ少し早いだろうと思う。衣装に負けてしまいそうで、着こなす自信がなかった。希美の親友だったらきつと似合うだろう。なんだって着こなしてしまう子なのである。そういえば、彼女はまだ連れてきた事がなかった。今度誘ってみて、出来たら着せてみるのもいい。そう考えていくと、どんどん楽しみが増えていった、希美の顔は自然と綻んだ。

そんな時だった。

後方から白い原付が不自然なほど遅いスピードで近づいている事

に、希美は全く気づいていなかった。

最初に気付いたのは、背中に小さな痛みが走った事だった。

希美は足を止める。突然の事で、何が起きたのかは分からない。分からないが、とりあえず止まってしまうのが普通の人間の反応だった。

原付が希美の横を通り抜けていく。

それをぼんやりと認識しながらも、希美はとりあえず痛んだ箇所を触って確かめてみる。左の腰の上辺り。そこに左の掌を押し当ててみた。

希美は驚いた。

べったりとした感触。そして、触れると僅かだが鋭く痛む。

ゆっくりと左手を目の前に持ってくる。見てみると、思ったより多くはなかった。

だがはつきりと赤い。

血の色だった。

自分が怪我をしているというのはすぐに分かったが、それがどうしてなのかは心当たりがなかった。背中に大怪我をして縫った事があるなんて過去はないから、自然に出血するとは思えない。

誰かに斬られた。

ふと浮かんだその可能性が、思い至ってみると一番あり得そうだった。

だけど、どうしてだろうか。

通り魔？

希美はふと前方を見やる。

さっき見た白い原付はかなり前を走っていた。思ったよりスピードが出ているように見える。特に変わった様子はない。

だが、希美は気づいた。

その運転手の体の陰からわずかに見える、ミルク色。

希美はその色をよく知っていた。買うときにすぐ迷った色。買ってからは毎日見ている色。それは自分が数年前から愛用している

バッグの色。

もちろん今日も持っている。

さっきまでは。

今まで気付かなかった事が信じられなかった。

だが、気付いてみると一瞬で理解できた。そういえば体が軽いと思っていた。それによく聞く手口だろう。後ろから近寄って、肩紐を切って。そうか、その時に背中も・・・

ひったくり。

一言で言えばそれだった。

そこまで考えると、希美は急に頭に血が上った。

ひったくり？

何をふざけたことを・・・

ただで逃がすなんて考えられない。希美がすぐに思ったのがそれだった。女子の物に手を出すなんて卑劣にも程がある。そんな奴は絶対に許せなかった。女子校に通っているからなのか、後輩でも友達でも、そして自分の事でも、とにかく女子の敵は自分の敵だという思いがあった。

そして、こういう時、とにかく行動してしまうのが希美だった。

親からはもう少し落ち着きなさいとよく言われるが、これが自分の性格なのだから仕方ない。

希美の視線は真っ直ぐ前を向いている。かなり遠いが、まだ原付の姿は確認できる。この辺りは袋小路が多いから、相手が馬鹿で迷い込んだりしてくれたら、まだチャンスはある。

絶対後悔させてやる。

「この・・・」

吐き捨てるようにそう言ってから、希美は走り出した。

白い原付は突き当たりのT字路を左に曲がって行った。住宅が多くてブロック塀が多いので、視界があまりいいとは言えない。

希美は走りながら、その先の道を思い浮かべる。この辺りには何度か来ているので容易に思い出せる。曲がった先には、すぐに右に折れる道が一本ある。そちらへ行かれたら見失うかもしれないが、原付が通れるような他の横道はだいたい先にしかないから、曲がって姿が見えなければ即ちそちらへ行っただけという事だった。原付なのだからエンジン音だってする。だが、音ではおおよその方角しか分からないので当てには出来ない。

スニーカーで良かったと思いつつも、とにかく全力で走る。急に越した事はないし、体力には少し自信があった。痛みはほとんどないため、怪我の事はすっかり忘れていた。頭の中にあるのは、ひたたくりに対する敵意と、バッグの中にある、今日買った小物の事だけだった。

ようやくT字路に着くと、希美は弧を描くようにして曲がる。ほとんど減速しなかった。

曲がり道の先が視界に入る。

そこで、希美は驚いた。

驚いたというよりは、理解できなかったと言えきかもしれない。視界に飛び込んできた物を、希美の頭はすぐに処理出来なかった。ただ、とにかく止まらないといけないという事だけは分かった。

あまりに急に止まろうとしたため、希美は転びそうになったものの、なんとか地面に手を着くだけで済んだ。

その姿勢のまま、まじまじと目の前の物体を見つめる。

漆黒の光沢が希美の視界の大部分を埋め尽くしている。

それは車だった。

だが、一般的な車とは少し違った。まず、尋常じゃなく大きい。横幅がバスくらい、長さは分らないが、希美が知っている他のどの乗用車よりも長いのは確実だった。この住宅街の狭い道路を文字通り占有している。対向車はおろか、自転車だって通り抜けられないだろう。そして、仮に通り抜けられたとしても別の問題があった。その車体は、毎日塗り直しているのだろうかと思えるほど光沢があつて、そして一切ムラのない見事な漆黒だった。さらに、これまた一切錆のない金色の装飾が所々に施してある。場所が場所なら悪趣味にしか見えないような彫像もあるが、恐ろしいまでに違和感がなかった。

車の知識がほとんどない希美でも、とりあえず高級車だというのは嫌でも分かった。通り抜けるのはもちろん、指先でちよつと触れるだけでも、何か健康に悪影響が出てしまいそうで、とてもそんな気にはなれない。

謎の中腰の姿勢で固まっていた希美だったが、しばらくしてから、ようやく立ち上がった。

表情はまだ呆氣にとられたままだったが。

とにかく、分からない事だらけだった。その黒い高級車はエンジンがかかっていないが、なんでこんな場所に停めてあるのか。そもそも、こんな狭い道をここまでどうやって来たのだろうか。今現在、道路を完全に封鎖していると言ってもいいその高級車は、直進はともかく、曲がるのは完全に不可能な気がする。というより、この車に適した道路が、果たして日本に存在するのだろうか。この庶民の町並みから言っても、この車は場違いにも程があつた。

たっぷり数分間見つめたが、何一つ分かった事はなかった。もうやめよう。

何か想像もつかない事情があるに違いない。

そう結論したところで、ようやく希美は本来の目的を思い出した。原付。バッグ。ひったくり。

だが、改めて見渡してみても原付の姿はどこにもない。さすがに

逃げられてしまったのだろうと思ったが、よく考えてみると、少し不思議な事があった。

道を占拠しているその高級車は、右への横道がある分岐点に丁度停めてある。交差点を完全に塞いでいる状態なのだ。だから、原付がこの道に來たとしても、真っ直ぐにも右にも、どちらの道にも行くことは出来ない。それなのに原付の姿はどこにもないし、もちろん引き返してきたわけもない。もし來た道を戻ってきたなら、追いかけていた希美が見逃すわけがない。道の両側にはブロック塀があるだけだから、どこかの家に逃げ込んだわけでもない。

どこに消えたのだろう。

この車がついさっきここに停めたばかりなら、その前に原付が通り抜けてしまった場合もありえる。今のところ、希美にはそれしか思いつかなかったが、そんなひったくりに都合のいい話があるだろうか。

そう考えると、希美はこの車の持ち主も怪しいような気がしてきた。

そもそも、停まっているだけで明らかに迷惑だし、下手をすると警察を呼ばれそうでもある。とりあえず、乗っているのはかなりのお金持ちには違いないが、たまたまここに停めたにしろ、それとも何か目的があるにしろ、常識外れなのは間違いなかった。

とにかく、話を聞いてみよう。

車に乗っている人間に原付を見なかったか聞いてみれば、その反応で何か手がかりが掴めるような、そんな気がした。その後で、警察でも何でも呼べばいい。

そう考えていた丁度その時、その車の運転席のドアが開いた。降りてきた人を見て、正直な話、希美は目を奪われた。

最初はヨーロッパの映画俳優かと思った。目鼻立ちがはっきりしていて、役者に相応しい洗練された顔立ちをしている。やや色白だし短い銀髪で、顔の作りから言っても明らかに日本人ではない。そして、なんというか、もの凄く雰囲気があった。手足が長いモデル

みたいな体つきをしていて、かなり長身でもある。希美とは住む世界が違うというのが、ありありと伝わってきた。

そして、タキシードというか、おそらく執事服というやつを着ていた。希美は同じ様な服をテレビドラマで見た事があるが、その時は特になんとも思わなかった。だが、この白人男性が着ている姿は、それとは比べものにならないくらい様になっていたし、十分魅力的だと思った。

その執事は希美を一瞥もしないまま優雅に歩いて行って、後部座席のドアを開けた。

そこから降りてきた少女に、希美はまた釘付けになる。

その少女も執事に負けず劣らずの雰囲気を持っていた。かなり色白で小柄で華奢な、絵に描いたような可憐な少女である。今は無表情なその顔も、やはりどこか海外の女優みたいに、小さくてくつきりと整っている。さらに、執事と同じ銀色の髪は流れるようなストレートロングで、思わず魅入ってしまう程だった。

だが、希美が最も気になったのはそのファッションだった。

白いワンピースの上に白いブラウス。

そして何故か、首から黒い水筒をぶら下げている。

爽やかなファッションだと言えない事もない。しかし、銀髪の上かなり色白な少女がその格好をしていると、とにかくにも、真っ白なのである。ここから見ると、濃い色の瞳と黒い水筒が浮かんでいるように見える。

さらに、正直に言えば、現代のファッションセンスとはかけ離れている。流行遅れというよりは、いっそ新鮮なくらい大昔のファッションに思えた。

執事の手を借りて車を優雅に降りた少女は、何故か希美の方へと歩いてくる。

それだけで希美は少し動揺した。別に何か悪い事をしたわけではないのだが、それでもうろたえてしまった。相手が外人なのもあるが、やはり大金持ちの雰囲気がそうさせるのだろうか。

少女はリムジンの横を慎重な動きで抜ける。ブロック塀の横を通る白人の少女という図式は、十分奇妙な光景だったが、流石と言うべきか上品な物腰だったので、希美はわけもなく感心してしまった。そして、少女はワンピースの裾は気にしても、車を気にする素振りはない。それを見て、希美はこの子がこの高級車の所有者だろうと確信した。お嬢様というやつに違いない。

少女は車の横を抜けると、希美の前まで真っ直ぐ歩いてくる。執事はついてこなかった。

不思議な子だなと希美は思った。華奢で色白だから一見弱々しい感じなのだが、近くで見ると、身体を中心に芯が通っているような印象を受ける。頼もしいとすら思えるような、そんな強さを感じるのだ。そして、それがどこか魅力的で、希美の目を自然と彼女に向けさせる。

絵になる。可愛いとか美人とかそういうのとは別の、芸術品みたいな魅力がある。希美はなんとなくそう思った。

どこか親友に似ている。年齢も自分達とそう変わらないように見える。

いや、それよりも・・・

希美にはもっと近い雰囲気を持つ人物に心当たりがあった。

だが、すぐに否定する。もし認めてしまえば、自分の親友とその人物も似ているという事になるからだ。あんな奴が親友に似ているなんて許し難いことだ。

だが、今はどうでもいいことだ。

どうしてなのかは知らないが、向こうから来てくれたので手間が省けたと言える。日本語が通じるのか、それがダメなら自分のあまり上手くない英語が通じるのか。それは分からないが、とにかく聞くべき事を聞くのがいいだろうと思って、希美はその少女の目を見た。

そこで希美は気づいた。

その少女。白い身体に銀の髪、そして黒い水筒。どこことなくモノ

クロな少女。

彼女の唯一の色。

最初は遠かったし、逆光になっていて分からなかった。いや、黒か茶色だと思いこんでいた。だから、外国人にしては少し珍しいとしか思っていなかった。

だが、そうではなかったのだ。

その少女の瞳。

それは血液が固まって出来たような、暗い紅色をしていた。

希美は自分の心臓の鼓動を聞いた気がした。

いずれにしても、びっくりした事は確かだ。今もその子の瞳から目が離せない。

赤に黒を混ぜたような不吉な色。遠目には黒の瞳に見えたのだが、それがまさか紅色だとは思わなかった。彼女の本当の瞳の色なのだろうか。それともカラーコンタクトだろうか。もしコンタクトだとしたら、はっきり言って変えた方がいいと希美は思う。希美みたいな普通の日本人ならただのファッションで済むが、彼女の様な白人で、しかも十分雰囲気のある子がそれをした場合、変な話、冗談では済まない。誰だって最初に見たらちよっと引くに決まっている。

しかし、驚いた理由はそれだけではない。

一見黒だけど、実は紅。

その色希美は他にも知っていた。それどころか、それは希美にとって特別な色合いなのだ。

それと同じだと思うと希美はますます気になった。食い入るようにその瞳を見つめる。

そこで、目の前の少女が口を開いた。

「怪我してるでしょう？」

意外にもはっきりとした聞き取りやすい声だった。全く弱々しさはない。よく響いて、どこまでも伝わっていきそうな声。本当に女優か歌手みたいだと希美は思った。

前置きも何もなかったので少し戸惑ったが、すぐに希美は返事をした。

「え・・・怪我って」

「背中？」そう言いながらも、少女は背中の方には目もくれず、希美の目をじっと見ている。

「あ、はい」そういえばそうだったと、希美は今更思い出した。

「こっちに来て」

「・・・はい？」思わず聞き返す。あまりに脈絡がないので。話についていけなかった。

「車に救急箱があるから」そう言ってから、少女は振り返る。「簡単にだけ手当出来ると思う。そんなに大きい傷じゃないけど、でも、そのままにしておくのはよくないから」

「いえ。そんなの・・・」

「いいの。困ってる人は、助けないとね」

少女は少しだけこちらを向いてからそう言った。

そのまま歩いて行って、彼女が出てきたドアの前に戻る。こちらから見て右側の後部座席のドアである。反対側には塀があって、どう考えても人が通れるスペースは無い。出入りしようと思ったら、横道があるから何もないそちら側しかないだろう。もしかして、出入りするスペースを作るために交差点に停めているのだろうかとか、希美は今初めてその事に気付いた。

ずっと立って待っていた執事が後部座席のドアを開けると、少女は彼に「あなたは外にいて」とだけ言い残して、車内へ入っていった。

執事は何も答えずにドアを閉めると、希美の方へ近寄って来る。希美の前まで来ると、軽くお辞儀してから、手の平で後部座席の方を示した。やはりというべきか、淀みない優雅な仕草だった。

だが、希美ははつきり言って困っていた。普通に考えても、初対面の人間にいきなり車に乗るように言われて、素直にハイとは言うのはあり得ない。きっとお金持ちのお嬢様の常識にはそんな物はないのだろうとも思ったが、だからと言って、庶民の希美にはそれは無視できない。

しかし、だからといって断ろうにも、目の前の白人執事にその言葉伝えるのは相当な度胸が必要だった。この男性は容姿も仕草も非の打ち所がないが、欠点があるとすれば、それは間違いなく愛想

がないところだった。

そこで、希美は当初の目的を思い出した。

「あの・・・」

「なんででしょう？」執事は表情一つ変えずに答える。上手な日本語だ。硬質な声だった。

「実は、私、ひったくりを追いかけたいところだったんですけど。この道に、白い原付・・・えっと、バイクが来ませんでした？」

「はい」最高に簡潔な答えだった。

希美は拍子抜けするくらいあっさり証言が得られたので、何故か逆に戸惑ったが、それでもすぐに切り替えてこう聞いた。

「あの！そいつ、どっちに行ったか分かりますか？」

「はい。ですが・・・」執事は、目で車を示す。「早く傷の手当てをされた方が。大した傷ではないですが、甘く見てお身体に障らないとも限りません」

「でも、そいつを・・・」

「失礼ですが」希美の言葉を遮って、彼はこう言った。「その傷以外にも何か被害に遭われたのですか？」

「え？あ・・・そ、そうです」向こうから質問されるとは思わなかったもので、希美は多少慌ててしまった。「バッグを・・・あの、肩紐を切られたみたいです」

「かしこまりました」

「・・・はい？」あの少女といいこの執事といい、もう少し脈絡が欲しいと希美は思った。

「私にお任せください」

「いや、何をですか？」

「伝手がありますので、盗られた物を取り返してみせます」
執事は平然とそう言ったが、希美はすぐに意味が飲み込めなかった。

「・・・えっと、すみません。今なんて？」

「伝手がありますので、盗られた物を取り返してみせます」

「いえ、でも、そんな事・・・」

出来るのかと希美は聞こうとしたが、言葉が続かなかった。なんだか聞いたらずいような、やぶ蛇なような、そんな予感がした。

「お気になさらず」執事は希美の心境を知ってか知らずか、あっさりそう言った。聞き直されると困っていたので、希美は正直ホッとした。「それよりも早く手当なさって下さい。当主様もお待ちかねです」

トウシュって何だろうと希美は思った。上手く頭の中で変換できない。まさか、ピッチャーの事ではないだろう。

「トウシュ様って、さっきの女の子の事ですか？」

「はい。左様でございます」

左様なんて言葉も使われるのを初めて聞いた。ふと、まだ生き残ってたんだなと思えて、何故か希美はちよつと感動した。

「あの、ドアは開けててもらってもいいですか？」

希美はおずおずとそう言った。

結局、傷の手当てをしてもらうことになって、リムジンに乗せてもらうことになった。正直、乗るのは不安だったのだが、出血しすぎたためか、急に少し気分が悪くなったからだだった。ここで無理して倒れでもしたら、馬鹿みたいである。少しでも座らせてもらって休む事にした。

白人執事さんにドアを開けてもらって車内を見た時、希美は本当に驚いた。そこは車内というには上質すぎる空間だった。リビングルームだと言っても信じてもらえるかもしれない。少なくともインテリアの総額で言えば、希美の家のリビングを軽く凌駕しているのは間違いないかった。

中央にテーブルがあって、その四方にソファがあって、天井には豪華な照明がついている。他に置いてある物も家具として遜色のない物ばかりである。象牙色に統一してあるのは持ち主の趣味だろうか。真っ黒な外面とは違って、車内は驚くくらい明るい雰囲気だった。

銀髪の少女は黒い木製の箱を持って奥のソファに腰掛けていた。

「どうして？」少女が少し首を傾げる。

「えっと・・・風が気持ちいいから」もちろん嘘だったが、不安だからとは言にくい。

「そう？ならいいけど」

少女は箱を両手で抱えたままこちらへと近づいてくる。希美はドアのすぐ近くのソファに申し訳程度に腰掛けていた。少し不安なのもあるが、どちらかというと高級品のソファに深々と座る度胸がないだけだった。

希美の隣に音もなく上品に腰掛けてから、少女はこう言った。

「じゃあ、背中を見せて」

「あ、はい」希美は車外の方に身体を向けた。

「大した傷じゃないわ」彼女はすぐにそう言った。「ちょっとだけ、服を持ち上げないといけないんだけど、平気？」

「全然平気ですよ。痛みはほとんどないので」

「そうじゃなくて、ドアを閉めなくていい？」

「え、なんでですか？」

「だって、見られたら恥ずかしくない？」

傷は腰の辺りだから、服をめくったとしてもそれほど肌を見せるわけではない。お嬢様だと少し背中を見せるだけでも一大事なのだろうか。それとも、まったく恥ずかしくない希美の方が変なのだろうか。

だが、いずれにしても、開いたドアから見える範囲には誰もいない。

「いえ、どうぞお構いなく」

希美がそう言うのと、背後に座る少女が服の裾を掴むのが分かった。

「じゃあ治療するから。少し痛むかもしれないけど我慢して」

「はい」

我慢できないほど痛むとは思えなかったが、希美は素直に頷いた。少女が希美の服の裾を持ち上げる。全く痛みはなかったが、傷口付近の布地が背中に張り付いているのが分かった。血が固まっているのだろう。そういえば服も切られてしまってもいるわけだから、もう着られないかもしれない。そう考えると、今更ながらショックだった。

傷の部分が完全に露出してから、少女が徐に患部に触れた。思わず、体を仰け反らせる。

「あ、ごめんなさい。痛かった？」傷口から手を離してから少女が聞く。

「あ、いえ・・・」希美は無意識にそう答えていた。

本当に痛みはなかった。
ただ、冷たかったのだ。

氷に触れたのではないかと勘違いする程に、少女の指は冷たかった。

そう認識したとき、希美はまた少し背筋が寒くなった。

「大丈夫？」少女の声が聞こえる。

「あ、はい」そう答えたものの、振り返ることは出来そうもなかった。

「無理してない？」

「いえ・・・本当に何でもありません」

「そう？遠慮しないで」

少女はそれ以上何も聞かなかった。

希美は正直助かったと思ったが、それでも心臓の鼓動が少し早いのが分かった。

銀髪少女は黙々と傷の手当てに勤しんだ。抱えていた黒い箱はどうやら救急箱だったらしい。状況的には当然だったが、希美の知っている救急箱と言えばプラスチックか薄い木目の物くらいである。少女が持っていたのはジュエリーボックスにも見えそうな漆黒の箱だったので、そこにガーゼや包帯を入れているというのは、言葉で理解できても想像するのは難しかった。

片手で服を支えながら作業するのは大変そうだったので、途中からは希美が自分で服を支えた。

時間が過ぎるにつれ、希美は冷静になっていった。座って休んだ事で体調が戻ってきたのもあるのかもしれない。車の中も外も、騒音が全くない静かな場所だったのも良かった。治療が終わる頃には、落ち着いて物事を考える事が出来るようになっていた。

いろいろ妙な点はあるけれど、結局のところ、背後の少女は親切な人に思えた。傷の手当をしてくれたのはもちろん、希美を気遣ってくれているのが言葉から分かる。淡々とした口調だから誤魔化されそうだが、実は凄く優しい人ではないかとさえ思える。

だが、それでも、背中に触れた指の事が頭を離れなかった。体温の低い友達なら希美にだってたくさんいる。だが、それとは比較にならない程の冷たさ。ほとんど氷と言ってもいい体温。

そんな身体の間があるのだろうか。

そう考えてしまうと、不安がまた湧きあがってくる。

「はい。おしまい」

不意にそう言って、少女が軽く背中を叩く。その手はガーゼ越しでもやはり冷たい。

希美は服を支えていた手を離した。

少女は治療道具を箱にしまっているようだ。

お礼を言わなければいけない。希美はそう思ったが、振り返るのに勇気が必要だった。

まず、呼吸を整える。

「服はどうする？」

またも不意を突かれて、希美はうろたえた。

「え？」

「服」

「服って・・・」まだよく分からなかった。

「あなたの服。何か羽織る物とか持ってる？」

希美はようやく会話の趣旨が理解できた。

「あ、いえ。そんなの平気です」

「でも、知らない人が見たら、大怪我してるように見えるかも」

「え・・・」希美はそんな事、思ってもみなかった。「あの、そんなにひどいですか？」

「服はそうかも。傷はもう大丈夫」

一体どんな状態になっているのか、希美は確認したいと一瞬思ったが、すぐに諦めた。見たところでどうにかなるわけではないし、すっかり忘れかけていたが、既にもうバッグもひたくられているのだ。どうにもならないと思う以外、心の持って行きようがなかった。

とはいえ、思い出してみると、ショックはショックだった。思わず溜息を吐きそうになったが、後ろで少女が見ているので、それは心の中だけに留めておいた。

すると、また脈絡もなく、少女の声がした。

「これ、あげる」

その声とはほぼ同時に、肩に柔らかい感触がある。

今度はなんだろうと思いつながら、希美は自分の肩を見てみる。

まず見えたのはライトブルー。それはよく見ると服だった。固そうだが暖かそうな厚手の生地で出来ている。

手繰り寄せて確認してみると、それはブラウスだった。

彼女の言葉を思い返してみても、ようやく状況が飲み込める。

「いえ・・・」

急にくれると言われても困ってしまう。そう伝えようとしたが、少女の声の方が早かった。

「もう入って良いわ」

少女が発した言葉は希美には完全に予想外だった。だが、まるで待っていたようなタイミングで車外から返事があった。

「失礼致します」

そう言って希美のすぐ正面に姿を見せたのは白人執事だった。希美が車内に入ってから姿が見えなかったのだが、もしかしてずっとそこにいたのだろうか。それも気になったが、それ以上に、彼が持っている物に気づいて驚いた。

忘れるはずもないミルク色。

「あ、それ！」希美は思わずそれを指さしてしまった。

「どうか、お確かめ下さい」

そう言って差し出したされたのは、確かに希美のバッグだった。肩紐が切れてしまっている。

希美はそれを受け取ってから執事の方を向いた。今年一番の感動と言ってもいい。一番の感謝と言ってもよかった。とにかく、お礼を言いたい。

「あの・・・」

「どうか、お確かめ下さい」

「いえ、それよりも・・・」

「どうか、お確かめ下さい」

どういうわけか、執事がそう言って譲らないので、とりあえず希美は中身を確かめた。小さなバッグなのですぐに確かめられる。何もなくなっていないようだった。

「よかった・・・」

希美は思わずそう口にしていた。

「では、失礼致します」

執事は希美のその言葉を聞くと、軽く頭を下げてそう言った。そのままどこかへ行こうとするのを見て、希美は慌てて呼び止めた。

「あ、あの！」

「はい」執事は事務的な様子で答える。

「あの、本当にありがとうございます。こんなに・・・」

希美の言葉はそこで止まった。

執事がそこで急に深々と頭を下げたからだだった。どこかの王室に勤めていても通用しそうな、あまりにも洗練された所作。希美の口を塞ぐのには十分な優美さだった。

時間を止められたみたいに固まっている希美を一瞥して、彼はこう言った。

「それは当主様に」

それだけ言い残すと、執事はまたどこかへ行ってしまった。

彼が去っただけでは、希美の時間はすぐには戻らなかったが。しばし、静寂だけが満ちた。

「大丈夫？」

少女のその声で、希美は我に返った。

慌てて振り返る。

希美はこの時、自分でも相当に驚いた。今まで振り返るのに尻込

みしていたのに、今は何の抵抗もなかったからだだった。慌てた事で、変な勢いがついたのが良かったのだろうか。

振り返った先には、少しだけ久しぶりな銀髪の少女の姿。

優しくて冷たい、紅い目の少女。

「あの、本当にありがとうございます」希美はしっかりとそう言うってから、深々と頭を下げた。

「気にしないで」少女は特に表情を変えなかった。

「いろいろしてもらって、すごく感謝してます。何かお礼が出来たらいいんですけど・・・」

そうは言っても、こんな車に乗ってるようなお嬢様に、庶民の希美が出来る事なんか何もなさそうだった。

「本当に気にしないで」

少女はあっさりそう言ったが、突然何度か瞬いた。急に何かを思い出したようだ。

「今、ちょっと時間ある？」

「えっと・・・あ、はい」

「ちょっと、質問してもいい？」

「そんなの、もちろんいいですよ。何ですか？」

「実は、私も探し物をしてるの」

「え・・・何か落とし物ですか？」

「いいえ」

そこで、不意に少女は大きく息を吐いた。

その様子を見て、希美は少し心配になった。少女が疲れているように見えたからである。もしかしたら、体が弱いのだろうか。

すると、彼女は首から下げていた水筒を手にとって蓋を開けた。カップに注いで飲むのではなくて、ストローで飲むタイプだった。

少女は何も言わずストローに口を付ける。

自然と希美はそのストローを見る。何を飲んでるんだろうという好奇心もあった。

紅い。

最初の感想がそれだった。それも、イチゴとかスイカとかトマトの色ではない。それどころか食べ物の色とは思えなかった。もっと暗くて生々しい、縁起の悪そうな色。

この少女の瞳とそっくりな色。

希美は漠然とどこかで見た事があると思った。そして、すぐに思い至る。あれはテレビで心臓外科医の特集をしていた時の映像だった。

輸血する時に使う管の色に、そのストローの色がよく似ている。人間の血液の色。

だが、希美は不思議だった。

全然自分が驚かないのだ。驚けないと言ってもいい。恐ろしいとも何とも思えなかった。いつもなら、そんな想像をするのも恐ろしいくらいなのに、身体は全く普段通りだった。それどころか、そんな事は当たり前とすら思えたのだ。この少女が人の血を飲む生き物なんだと最初から知っていたような、そんな印象。そんなはずはないのだが、だが、そう思えてならなかった。

少女の喉の動きを、なんとなく見つめる。

だが、何とも思わない。

自分は慣れたのだろうか。

ふと希美はこんな事を思った。

今ここにいる自分は、自分だろうか。

いつもの自分はずっと感情が豊かな気がする。些細な事でも、喜んで、怒って、怖がって、子供っぽいかよく言われた気がする。

親からは落ち着きがないとよく言われた気もする。今の自分は本当に自分だろうか。こんなに自分を客観視する事が、そもそもあまりない。

希美は少し気分が悪くなった気がした。

その感覚が懐かしい。

なんとなくだが、どこか遠くの方で動揺している自分がいる気がした。どこか別の場所で、怖がっているのだ。どこかに閉じこめら

れた自分の感情が僅かに漏れ出てきたような、そんな感覚があった。さっきの気持ち悪さが、本来の自分の感情。

それならここにいる自分は誰なのか。

確かに自分。自分の身体。自分の意志で動いている。

だが、どうなったら、どこまでが、自分だろうか。

自分。

その言葉を心の中で繰り返す度に、希美は少しずつ気分が悪くなる。なんだか居ても立ってもいらなくなる。どんどん居心地が悪くなるが、それでも繰り返すのをやめられない。

その時、銀髪の少女がストローから口を離した。

希美はすぐに質問した。何故なのかは自分でもよく分からなかった。

「それ、何ですか？」

「それって？」少女は少し不思議そうだ。

「何を飲んでたんですか？」

「秘密」

少女は即答した。

希美もすぐに次の質問をする。口が勝手に動いているみたいだった。

「私はどこにいるんですか？」

「どういう意味？」

「私に何かしましたか？」

彼女の目つきが変わった気がした。

「何もしてない」

その言葉を発した時の少女を、希美ははっきりと怖いと思った。そこで気付いた。いつの間にか、どこか遠かった感情が元に戻っている。あれほど暴れるようだった心も、この場所みたいに静かだった。

「あれ？・・・すみません、変な事言って」

希美は軽く頭を下げる。背筋が冷たいような気がしたが、逆に身

体は熱いような、妙な感じだった。

「いいの。こちらが悪かったみたいだから」

少女の言葉はやはり希美にはよく分からない。

「え？ そんな事・・・」

「悪気がないわけじゃないんだけど、もう大丈夫だから許してね」
「え？・・・あ、はい」

ややこしい言い方だったが、そもそも希美には何の事なのか理解出来なかったため、許すも許さないも無かった。

「お詫びにお茶でも飲んで行って」

「あ、いえ！ もう帰りますから」

「いいの。聞きたい事もあるし」

「そう言えば、何か探してるんですけど。何ですか？」

「ゆっくり聞きたいから。だから、ゆっくりしてって」

少女はすらすらとそう言った。

希美はどうやら上手く遠慮できるか考えたが、勝算はなさそうだった。自分が目の前の少女を言いくるめている場面が想像できない。そもそも、今までにこういったケースでうまく断れた試しがなかった。自分には才能がないと諦めている分野でもある。

まだしばらく帰れそうになかった。

「それで、どうなった？」

瞬は隣を歩く妹に聞いた。すでに何度も同じ台詞を言っているが、彼女の話は脱線しやすいため、その都度話題を戻す必要があった。

葉月はどこかを見上げながら、記憶を呼び起こしている様子だった。

「えっと・・・そうそう、すごく楽しかったって」

急に適当な言い方になった。どうやら後は話の趣旨に関係ないらしい。

「何か捜し物してたんじゃないのか？」

「そうみたいなんだけど、結局希美ちゃんも知らなかったから手がかかり無しかったみたい。だから、後はほとんど雑談してたんだって。あ・・・そういうえば、その子、象が好きなんだって」

「ゾウ？動物の？」そう言えば、車内のインテリアは象牙色だった。「そうそう。キーホルダーあげたらすごく喜んでたって。それは希美ちゃんの印象だけだね。あんまり表情には出ない子みたい」

「それなら、一応、お礼は出来たんだな」

「うん。だけどそんなに高い物じゃないから、また会って、ちゃんとお礼しないとして。ブラウスもすごく高そうだったから、返さないいいけないし」

「お礼か」瞬は少し想像してみたが、結構難題だった。何でも持っでそうな金持ちに、何をあげたら喜んでもらえるだろうか。

「私の血をどうぞって言うのかな、やっぱり」

葉月が楽しそうにそう言った。瞬が彼女の表情を見ると、普段通りの笑顔だった。どうやら、冗談で言っているわけではないらしい。元々、葉月は冗談をほとんど言わない。

「そういうものなのか？」

「だって、人の血を飲まないと生きていけないんだって」

「そんな事がどうやって分かる？」

「その子がそう言ったって」

「・・・本当か？」そんな会話は無かったはずだった。

「えっとね・・・」葉月は少し上を見上げる。彼女の記憶は基本的に空とか天井とか、どこか高いところにメモしてあるらしい。「希美ちゃんが、何で首から水筒さげてるんですか、何かの習慣ですか、って聞いたんだって。そしたらその子が、これはとっても大事な物で、これがないと生きていけないから肌身離さず持つてるんだって、そう言ったんだって」

「・・・それだけか？」

「うん」

「それだけだと、なんとも言えないと思う」

「そう？でも、他に可能性なんてある？」

「そもそも、人の血だって確かめた訳じゃない」

「でも、そうとしか考えられないでしょ？」葉月は自信ありげに微笑んだ。「仮に、水筒の中身がトマトジュースとかだったら、これがないと生きていけないなんておかしいから」

「トマト依存症なのかもしれない」

「そんな人・・・いないとは言切れないけど」葉月は少し苦笑した。

「もっと現実的には、何かの薬かもしれない。飲みやすくするために、ジュースに混ぜているとか」

「うーん・・・そっか」

葉月はそのまま考えこんでしまった。

瞬にしてみれば、その銀髪少女が吸血鬼であるかそうでないかは、あまり関心がなかった。というよりも、瞬はあまり吸血鬼について知らなかった。ドラキュラの話くらいなら、幼い頃に聞いた記憶があったが、それ以外は全くと言っていい程予備知識がない。瞬は普段テレビも見ないし、マンガもゲームも持っていない。天使や悪魔

ならまだ絵画で見た事があるが、吸血鬼だとその経験もなかった。姿をイメージするのも難しい。

「もし病気だったとしたら、体が冷たいのもそのせいなのかな」不意に葉月はそう言った。少し声のトーンが低い。

「それか、ただの体質かもしれない」

「でも、人間だと思えないくらい冷たかったって」

「そういう人間もいるかもしれない」瞬はすぐにそう答えたものの、変な言葉だなと思った。

「いるの？」葉月は少し目を細める。

「いないとは言えない」

「吸血鬼がいる方がありそうじゃない？」

「・・・そうだな」

瞬は思わずそう呟いていた。

急に考えてみたくなって、瞬は黙り込む。

葉月の話を聞いて気になったのは、その少女が、自分の事をあまりに知らないように思える事だった。あまりに自分の身体に対して注意が向いていない。紅い眼を見たら、或いは冷たい指で触れられたら、他人がどんな反応をするか、ずっと自分の身体と付き合っている本人は嫌というほど理解しているはずだ。

だが、実際にはまるで無頓着に思える。瞳の事も体温の事も、隠そうとしているところか、最初に希美に触れた時には、傷の痛みで反応したと自分で勘違いしていたくらいだった。

仮に幼い子供だったなら、そういう場合もある。自分の容姿がどれほど特異なのか分からない頃なら、気付かないうちに他人を驚かせる場合だってあるだろう。

だが、それはせいぜい小学校に入るまでだろう。自分の身体とは毎日付き合っているのだから、いつまでも知らないままではいられないものだ。話の中では、その少女は人に気を遣えるくらい大人である。その事が、一層不自然さに拍車をかけていた。

一見、優しくて思いやりのある大人びた少女。

だが、実際には、銀髪で紅い眼をしていて、飛び抜けて冷たい手をしているのに、その事にまるで気づいていないような、ある意味で無垢な少女。

二面性。

そう言えない事もない。

だが、矛盾が過ぎる。それが、瞬の率直な感想だった。

こんな事が両立するだろうか。だが、どう仮定したら矛盾がなくなるだろうか。

難しいと瞬は思った。

吸血鬼の方があり得そう。葉月が言ったその言葉を思い出す。

そうかもしれない。

ふと気付くと、葉月がこちらの顔を楽しそうに見ている。

「・・・どうした？」

「やっぱり気になる？」

「何が？」

「だって・・・」葉月はますます楽しそうにこう言った。「すごく美人だったって。しかも銀髪の女の子。会ってみたくない？」

「会ってみたらいい」

「そうじゃなくて、お兄ちゃんが」

「俺か・・・」瞬は少し考えて言った。「もっと喜びそうな奴に教えてやったらいい」

「うーん」葉月も少し考える。「でも、伊奈先輩だったらもう知ってそうだけど」

「そうかもしれない」曖昧に答えたが、恐らく知っているだろうという確信はあった。

「もう声かけてたりして」

「ありそうだな」

「お茶と一緒に飲んでたりするかも」

「ないとは言えない」

「それで、よかったら俺の血でもどうぞって」

「・・・そこまでサービスするのか？」

「してそうじゃない？」

葉月に聞かれて、瞬は考えた。

ほんの数秒だったが。

「そうだな。してそうだ」

瞬があっさりそう言うのと、葉月は笑顔で言った。

「伊奈先輩に、頑張り過ぎないで下さいって伝えておいてね」

その後も、しばらく吸血鬼の話が続いた。

葉月はどこからか一般的な吸血鬼の情報を仕入れてきていたらしく、やたらと詳しかった。当然ながら、瞬は初めて聞く話ばかりである。ヴァンパイアの事などあえて調べようとは思わないし、何か話を聞いていたところで覚えようともしなかっただろう。それでも世間では多くの逸話があるようで、そこそこ市民権のある存在のようだった。

「それでね。血を吸われると、その人も吸血鬼になっちゃうんだって」

葉月の解説が続いていた。瞬はそれも知らなかった。

「それも常識か？」

「うん。たぶん、知らなかった人は日本中の高校生でも1人だけかも」

それは大袈裟だろう、と言いたかったが、葉月が冗談を言わない事はよく知っていた。あながち誇張ではないのかもしれない。

「それを知ってて、よくお茶なんか飲んだな」

「希美ちゃん？ いい人だったし、大丈夫だと思ったんだって」

「そういうのは、危ない」

「うん。家に帰って話したらすぐ怒られたんだって」

葉月は自分の事みたいに苦笑する。

瞬はそれを見て小さく息を吐いた。

「それでも、絶対また会ってお礼するんだって言ってたよ」

「電話番号とか聞かなかったのか？」

「それが、携帯持っていないんだって」

最近ではちょっと珍しいかもしれない。

「家の電話番号は覚えてないんだって。一緒にいた執事さんが携帯

持ってるらしいんだけど、どこか行っちゃってて、結局帰って来なかったみたい」

「名前は？」

「それが・・・名前も聞けなかったんだって」

瞬には少し意外だった。

「聞き損ねたのか？」

「ううん。なんていうか、教えてくれなかったって」

それはちよつとどころではなく、かなり珍しい。

「何か理由を言ってたか？」

葉月は首を振る。

「何にも。はぐらかされたって、希美ちゃんは言ってたけど。忘れちゃったとか言われたって」

「・・・そうか」それだと再会は難しいかもしれない。

「今、家を探してるんだけど、手がかりはほとんどないって。その女の子を見た人は結構いるんだけどね」

「そういえばそんな事も言ってたな」

「うん。でも、場所もバラバラだし、歩いてたり車に乗ってたりで、どの辺りに住んでるのか見当もつかないみたい。とりあえず、超大型の高級車が置きそうな所に絞って調べてるって」

超大型という区分があるのか、瞬は疑問だったが、そこは敢えて聞かない事にした。よほど大きい印象があったからそう呼んでいるだけだろう。いずれにしても、まるで探偵みたいである。

「あと、サイトウさんもまだ見つからないって」

「サイトウ？」

「あ、言ってなかったっけ？」

「聞いてないと思う」まだ話題には無かったはずだ。

「その女の子が探してるのが、サイトウさんなんだって。探すの大変みたいだから、いろいろしてもらったお礼に手伝ってあげるんだって、希美ちゃんが言ってた」

「そうか」瞬には、少し心に引っかかる物があった。「そのサイト

ウさんっていうのは、他に手がかりは無いのか？」

「えっとね」葉月はまた大空のメモを読む。「サイトウAさんを探してるんだって。Aってたぶんイニシャルだから、アイさんとかアキラさんとかだと思うんだけど。でも、この辺りには、そういうサイトウさんはいないみたいで・・・」

後半部分は、瞬の耳には入らなかった。

サイトウA。

おそらくそれは、聞いた人間が、つまり希美が勘違いしたのだろう。

「本当にサイトウだったか？」

葉月はまだ何か言っていたが、瞬はそれを遮って聞いた。

「え？えっとね、その子、日本語が上手だったんだけど、サイトウさんだけちょっと訛って覚えてみたい。だから、希美ちゃんが聞いた時には・・・」

「サイトA」

瞬は呟くように言った。

「え？あ、うん。でも、サイトさんなんて名前の人、いたらすぐに分かるでしょ？だから、きっとサイトウさんの事じゃないかなって・・・」

瞬は葉月の言葉をほとんど聞いていなかった。

サイトA。

それが気になるのも当然の事だった。

なぜなら、朝からずっとその言葉の意味を考えていたのだから。

瞬の脳裏にあの光景が甦る。

古びた舞台。

客席。

血塗れで倒れている女性。

笑う男。

その男が最後に言った言葉だった。

その後、あの黒い・・・

「どうかした？」

瞬は我に返った。

葉月が心配そうな顔をしている。

「いや・・・なんでもない」

そう言ったものの、自分でも少し呆然としているのが自覚できた。葉月にもそれは分かったらしい。急に不満そうな表情になった。

「何か隠してるでしょう？」

いつもストレートに言うのが、彼女のスタイルだった。

そして、じつと相手の目を見るのだ。その瞳の力で圧倒するのである。一切の小細工はない。それだけで十分なのだからそんな必要はないのだ。

だが、さすがに毎日顔を付き合わせているのだから、瞬にも耐性が出来ている。それに、例えそんな物が出来ていなくても、本当の事を話すわけにはいかなかった。

誤魔化すしかない。だが、全くのデタラメを言う自信はなかった。

「そのサイトウさん、もしかしたら見つかるかもしれない」

「え、本当？」 葉月は意外そうだった。

「ああ。可能性だけだな」

「ふーん・・・それだけ？」

「今のところは」

なんとか動揺せずに言えたはずだった。瞬にしてみれば、最高の演技に思えたくらいである。

葉月は視線を外さないまま、何か考えているようだった。

瞬もそのブラックホールみたいな瞳を見つめていたが、どうにも居心地が悪かった。こうしていると、自分の嘘なんかは付け焼き刃のように思えて、百戦錬磨の彼女にはあつという間に見破られそうな気がしてくる。だがこうなった以上、目を逸らすわけにもいかない。勝算が薄いのに退けない。まさに負け戦というやつだった。

「嘘でしょ」

それから数秒後、葉月はあっさりと断言した。

「そんなわけない」

瞬は即答こそしてみせたが、それはほとんど悪足掻きだった。どうやったら隠し通せるのか、見当もつかない。

「ふーん・・・そう」

気まずい沈黙があった。

葉月は黙って前を向いてしまう。機嫌を損ねたのは間違いなかった。

だが、それでもいいと瞬は思う。確かに嘘をついたのだから、嘘をつかれた相手がそれに気づいて嫌な思いをするのは当然だった。例え正当な理由があったとしても、嘘は嘘なのだから。

それでも、瞬は葉月の兄なのである。例え嫌われると分かっている、彼女に災いが降りかかるのは避けないといけない。それが危険な事なら、尚更だった。

嘘をついたことは後で謝るしかない。それで許してもらえなんと言うつもりはないが、一生嫌われたとしてもそれでいい。それくらい覚悟がなければ、嘘なんかつかない。

ただそれだけの事だった。

お互い黙ったまま並んで歩く。最近では珍しい状況だった。

やがて、葉月の通う中学校が見えてくる。この付近では唯一の子中学校である。

まだ人影はほとんどない。

「ここでもいいから」

正門まで後少しという所で、葉月が言った。

「そうか」

「帰りは友達と一緒にだから・・・大丈夫」

「そうか。だが、よく気をつけた方がいい」

「もう・・・みんな心配性」

葉月はそう言って、ふっと微笑んだ。

瞬はそれを見て驚かされた。

いつもの彼女の、瞬が見てきた葉月の、太陽みtainな笑顔ではな

かった。

明るい中にも少し陰を含むような、そんな月みたいな笑みだった。誰かに似ているような気がしないでもなかった。

いつの間にか、こんな表情を覚えてたらしい。

「じゃあね」

「・・・ああ」

葉月は振り向いて、颯爽と歩いて行く。

その後ろ姿を見ながら、瞬は、葉月が中学に入学した頃の事を思い出した。

どういった心境だったのかは知らないが、葉月がある時突然、綺麗に歩けるようになりたいと言いだした。こういった突拍子もない事を脈絡もなく言い出すのは、彼女にはよくある事だった。そして、思い込んだら熱中して、あっという間に拾得するのもまた彼女だった。

ただ、綺麗に歩くというのはなかなか難題だったらしい。或いは、なかなか理想の歩き方を見つけられなかったのかもしれない。言い出した最初の頃は、傍から見ても不自然な歩き方をしていた。その事で、よく友達にからかわれたようでもあった。

それでも、いつの間にか自然に歩くようになった。

葉月は今年が中学最後の年になる。本当に、知らないうちに大人になっていくらしい。

朝日が彼女の長い髪を照らす。

それを見て、急に胸に痛みが走った。痛んだのは、心臓のすぐ近く。昨日から、こうやってたまに痛む事があった。

瞬はまたあの光景を思い出す。

それは昨日の夕方の事だった。いつもの学校からの帰り道。そこは確かにいつもと同じだったが、少し変な感じがすると思ったのが最初だった。

そこから先を言葉にするのは難しい。とにかく、いつの間にか知らない場所について、特異な光景を見た。そして、自分の意識はあっ

という間に途切れてしまった。

ただ、男の言葉と生々しい感触だけが胸に残った。
結局、何も分らない。

だがもちろん、手がかりはある。

サイトA。

どういう意味なのか、瞬には全く心当たりがない。だから、誰かに聞か、想像してみるしかない。それでずっと考えていたのだ。

あの男も、そして銀髪の少女も探しているサイトA。

それはどういうものだろうか。

葉月の髪が春の朝の冷たい風を受ける。

その黒髪ははっきりと紅く光っていた。

扉を開けて覗いてみると、更衣室の中は薄暗かった。

それでも、物を探すのに困るほどではない。自分1人しかいないのだから、わざわざ照明をつけるのももったいない。そのままロッカーまで歩いていく。

中のスポーツバッグからタオルを出して汗を拭う。そして、携帯を出して時間を確認した。

7時5分前。そろそろだった。

「あれ、詩織か？」

急に入り口から声をかけられて、詩織は携帯を落としそうになった。

「なんだ？　こそこそと」声の主は、そう言いながら詩織に近づいてくる。

「別にこそこそなんて・・・」

「あ、もしかして、男か？」

「あのねえ・・・」詩織は少しむっとする。

「なんだ、違うのか」

「当たり前でしょ。そういう藍こそ、こんな所で何やってるの？」

「本当か？」藍は詩織の質問を無視して、からかうように言った。

「何か隠してるっていうのが見え見えだぞ。義江君」

「そっちも鎌を掛けてるっていうのが見え見えだけど？逢坂さん」

「なんだ・・・つまらん」藍は本当につまらなそうな表情だった。

「それで？何か用事？」

「あ、そうだ。亜由美先生知らないか？車はあるから、校内にはいると思うんだが」

「亜由美先生？えっと・・・、あれ？保健室にいるって言ってたけど。いなかった？」

「そうか。ならいいんだ」藍の返事はかなりあっさりしていた。

「ならいいって・・・もしかして、まだ行っていないわけ？」

「ああ。これから行ってくる」

「なんでそこに行っていないのよ」詩織は呆れた。「普通最初に行くでしょ。そこで働いてるんだから・・・だいたい車もそこにあっただんじゃないの？」

「たまには外す事もある。まだまだ修行不足みたいだな」

そう言って笑う藍を見て、詩織は疲労感が増した気がした。

逢坂藍は詩織と同じ高校2年生である。口調は男性的だが、見た目には、柔らかい印象の女の子だ。束ねた長い黒髪と比較的柔和な顔は、普通にしていれば、彼女を大和撫子に見せるかもしれない。だが、藍はいつも白衣姿で、両手をポケットに入れて無然として歩いているため、その印象が発揮される事はほとんどない。

その彼女は、心理テストとか精神分析といった類の物にご執心だった。詩織が藍と知り合ったのは、この高校に入学してすぐの頃だったが、既にその時には、初見の詩織の嘘をあっさり見破る事が出来るくらいの、ある意味で特技のレベルになっていた。授業も心理学とか精神医学の類の物ばかり選択しているようで、まだまだスキルアップに余念がないようだ。

そんな藍だったが、さすがに車を見ただけでは心理学は役に立たなかったのか、珍しく相手の行動を読み間違えたりしい。だが、本人はそれほど残念そうではなかった。比較的頻繁に会う間柄とはいえ、詩織はまだ、藍の事がよく理解出来ているとは言いがたい。今も彼女が何を考えているのか見当もつかないし、正直興味もなかった。他にも性格的に理解出来ない所は多いが、出会ったときから馬が合うというか、不思議と相性は良い。

「それで、こんな所で何やってるんだ？」藍が聞いた。

「あ、うん。ちょっとね」

「なんだ？人様に言えないような事か？」

「あのねえ・・・人聞きが悪い事を言わない」

「だが、まだ朝練の途中だろう？それをさぼっている時点で、詩織にしてみれば、結構イレギュラーな行動だ」

「私だって、練習さぼるくらいするの。だいたい自由参加なんだから、さぼってるとは言わないでしょ」

「その自由参加の朝練に、好き好んで毎日の様に出ているのは、どこの誰だろうな？義江君」

「別に、どうせ毎朝走ってるんだから、どこで運動しようが勝手にして・・・」

詩織はふと気づいて時間を確認する。そろそろ7時である。

「あ、ごめん。ちよっと、これから電話するから・・・」

「電話？お兄さんにモーニングコールでも・・・あ」

藍は勘づいたようだった。特別、秘密にするような事でもないのだが、詩織にしてみれば、なんとなく言いづらい事だった。

「いや、悪かった。実は、亜由美先生にもそれが聞きたくてな」

「え？亜由美先生、何か関係あるの？」

「いや、直接は関係ないんだけどな。ただ、あの先生、昔はちよっと名の知れた研究者だったらしい。それで・・・」

そこで、藍は顔の前で軽く右手を振った。意味はよくわからなかったが、話はそこで終わりらしい。

「あんまり遅くなると悪いな。じゃあ、千村さんによろしく」

「あ・・・うん」

藍は白衣を翻して、更衣室を出ていった。

千村さんというのが、まさに今から電話しようとしている相手だった。彼女も詩織の同級生であり、そして、藍と同じように親しくしている友人だ。高校入学以来の付き合いというのは同じだが、藍とは違って少し控えめ過ぎる感はあるが、親しみやすい常識人である。平日は毎日顔を合わせているし、昼も一緒だし、電話もメールもする。休みの日も連れだっている事が多い。まだ1年そこそこの関係とはいえ、藍よりもずっと付き合いの深い、親友と言える存在だ。

そんな親友に昨日ちょっとした事件があった。
今日起きてから、ずっと親友の事で頭が一杯だった。もっと早く電話したいとも思ったが、あまりに早朝だと迷惑になるし、彼女はそんな時間に起きて来ない。朝練で体を動かして気を紛らわせるしかなかった。待ちに待って、ようやくいつもの時間になった所だった。

詩織は慎重な手つきで携帯を操作する。

コールが数回鳴る。

まだ出るはずもない。それでも、いつもと違って緊張した。

10回目のコール。

もうそろそろかもしれない。

16回目のコールの途中で、電話が繋がった。

「・・・うん」

いつもと同じ、風が吹いたら消えそうなくらい、か細い声だった。

「多恵？起きた？」

「・・・うん」

「そう。とりあえず、落ち着いて」

「・・・うん」

「あと・・・やっぱり、まだいいか。とにかく、横になったままで、でも二度寝しない事。慌てなくても時間はまだあるから」

多恵の返事はなかった。だが、しばらくして、電話越しに、何か動く音が聞こえた。

「あれ・・・詩織ちゃん？」

最初よりも、だいぶ音量が増していた。

「そうそう。気分はどう？」

「うん・・・平気」

「そう。まあでも、油断しない事ね」

「そっか・・・詩織ちゃん、わざわざごめんね」

「いいの。初めての事じゃないし。それに、やっぱり心配だからね」
「心配？あ、そっか・・・」

多恵の声が、急に小さくなった。

「ちょっと？大丈夫？」

返事がなかった。

代わりに、妙な声がする。電話口から遠いのか、聞き取りにくかった。

「多恵？どうしたの？」

しばらくして、急に多恵の息づかいが聞こえるようになった。彼女の声もはっきり聞こえるようになる。

その声に驚く。

多恵は苦しそうな呻き声をあげていた。

詩織は彼女がそんな声を出すのを初めて聞いた。

「多恵？ちょっと・・・どうしたの！？」

電話口に向かって叫びながら、詩織はどうしたらいいか考えていた。急病だろうか。

救急車？それとも、家の電話？まだこの時間なら、誰かいるはずだ。

だが、自分の携帯は今使用中だった。それを認識して、詩織は意味もなく慌てた。近くに他の電話なんてあっただろうか。

「詩織ちゃん・・・」

急に声が聞こえて詩織ははっとなる。苦しそうだが、思ったよりはっきりした声だった。

「多恵！大丈夫！？」

「うん・・・あの、ね」

どう聞いても、苦しそうだった。

「大丈夫に聞こえないから！どこか苦しいの！？」

「あの、伝えてくれる？」

「伝えるって・・・何言ってるの？」詩織の声が少し小さくなる。

「きっと、Lだって」

意味が分からない。

「Lって・・・ちょっと！どういう意味？」

「それで、たぶん」

「たぶんって・・・」何の事かさっぱり分からなかった。妙な胸騒ぎがする。そればかりが気になって仕方がなかった。

「お願い、ね」

「そんな事より・・・とにかく、救急車呼ぶから!」

「私は、平気」

詩織は驚いた。相変わらず苦しそうながらも、その多恵の声は落ち着きがあった。状況が状況なら、優しい声に聞こえたかもしれない。

「大丈夫、ありがとね」

「多恵?ほんとに・・・」

「だから、お願いね」

「お願いって、伝言の事?誰に言えばいいの?」

「銀の・・・」

多恵の声は途中で切れてしまった。

「多恵?多恵ってば!」

「いつも、ごめんね」

突然、多恵はそう言った。

詩織はそれを聞いた瞬間、時間が止まったように感じた。

「じゃあね」

多恵は最後にそう言った。

「多恵!」?

その後も詩織は何度か呼びかけたが、今度は返事は返ってこなかった。

「どうしよう・・・」

繋がったままの携帯を持って、詩織は考える。だが、どうにもまとまらなかった。

慌てているのが自分でも分かる。だけど、どうしようもなかった。とにかく、行ってみるしかない。

制服に着替えている暇はない。そもそも、走っていくのだから、

そんな必要はない。

詩織はそのまま更衣室を飛び出した。
廊下を抜けて外に出る。

「あれ、詩織か？」

聞き慣れた声がして、詩織は立ち止まった。

「どうした？血相変えて」

悠長に挨拶している場合ではない。

適当に誤魔化して立ち去ろう。そう思って駆け出そうとしたが、ふと気づいた。

そうだ、その方が断然速い。

「亜由美さん、車貸して下さい」

「何？どこか・・・」

話している時間も惜しかった。

詩織は黙って彼女の腕を掴む。

「おい！ちょっと・・・」

「いいから！とにかく非常時なんです！」

「非常時なら尚更だ」

詩織の頭に軽い衝撃がある。見れば、先生の右手が拳がっていた。
どうやらそれで軽く叩かれたらしい。

それで、少しだけだが落ち着いた気がした。

「とにかく落ち着け。お前が慌ててどうする？」

「えっと・・・」その通りだった。自分が慌てていたら、何にもならない。「多恵と電話してたんです。だけど、急に苦しそうになって、それで・・・」

「誰か、家の人は？」

「いえ・・・それは、まだ」

「じゃあ、家の人に電話。その間に車持ってくるから、そこで待ってろ」

「あの、救急車は・・・」

「私がする」

そう言った時には、先生はもう駆け出していた。

詩織はその後ろ姿を呆然と見ていたが、すぐに気を持ち直す。そうだ。自分がしっかりしなければ。

握っていた携帯を見る。まだ、多恵の携帯に繋がったままだった。そのまま耳に当ててみる。

僅かにだが、多恵の息づかいが聞こえてきた。

まだ大丈夫。

意を決して、電話を切った。

次に、多恵の自宅の番号を探す。

すぐに見つかって、そのまま発信する。

聞き慣れたコール音が聞こえてくる。

まだ大丈夫。

誰か出るのを待ちながら、詩織は何度も心の中でそう唱えていた。

B

「先生」

その声にはつとなる。

すぐ隣に目を向けると、まだ幼い女の子の顔がある。彼女は虚ろな表情で目を擦っている。まだ眠そうだった。

それも当然だった。自分が目覚めた時には、まだ彼女は夢の中にいたのだから。

「おはよう」そう言って微笑みかける。

「おはよう。先生」

眠たいながらもちゃんと挨拶を返すところが微笑ましい。こういった素直さに触れるのは、それだけで自分も心が洗われるようだった。

こういう時に自分の仕事を楽しいとも思うし、また心苦しいとも思う瞬間だった。

「気分はどう？」

「うん・・・ちょっと眠い」

少しだけ笑う。

「もう少し寝ててもいいのよ」

「先生は？」

「まだ寝てるなら、一緒にいてあげる」

「じゃあ、ちょっとだけ」少女は少しはにかむ。

それに笑みを返して、優しく彼女の頭に触れた。

この場所は小高い丘の上にある。自分の仕事の効率を考えた時に、なるべく静かな事と光が少ない事が重要だった。だから、なるべく人工の明かりが少ない場所を選んだのだが、わざわざこんな高地なのは患者の為でもある。治療の為とはいえ、真っ暗な病院に閉じこめるのは可哀想だし、どうせなら行楽気分になって貰った方がリラ

ックス出来ていいと思ったからだった。

だから、朝は鳥の声がするだけ。ひんやりとした空気の、静かな場所だった。

「ねえ、先生」横になった少女が布団の中から言った。

「何？」

「先生ってえ……」そこで彼女はまた笑った。

「なーに？」こちらもしおどけて言った。

「先生って、好きな人、いる？」

「どうして？」笑顔のまま聞き返す。子供のこういう質問には慣れていた。

「えっとね……なんとなく」楽しくてたまらないといった様子だった。

「いないの。いい人がいたら、教えてね」

「じゃあ……それで悩んでるの？」

その質問には慣れていなかった。

「悩んでるって……先生が？」

「うん」

「どうして？」

「うーん……なんとなく」

悩んでいる事が全くないわけではない。だから、恥ずかしい話だが、それが患者である彼女に伝わってしまったとしても、あり得ない話ではない。

だが、もう1つの可能性があった。

「それ、本当に先生だった？」

「うーん」少女は少し考える。「わかんない」

「どんな人？」

「えっとね……髪の毛の長い人」

「先生くらい？」

「うん」

「色も？」

「うん」

「だったら、女の人よね？」

「うん・・・あ、でも」少女は急に思い出したように言った。「男の人と話してた」

「それはどんな人？」

「わかんない」

「見えなかった？」

「うん」

「でも男の人ってことは、声を聞いたのよね？」こういった予測はお手の物だった。自分は専門家なのだから、当然である。

「うん」

「何話してたか、分かる？」

しばらく考えた後、彼女は首を横に振った。

彼女くらいの子供だと、何か聞いても理解できない場合が多い。

だから、それは仕方ない事だった。

だが、ほぼ間違いない事がある。

彼女は他人の夢を見ていたのだ。

人と同じ夢を見る事が出来る。夢を共有出来る。

それがこの幼い彼女の能力。大昔からある、特殊な能力。

そして、それは自分の能力でもあった。

この能力を使って仕事をしているのだから。

だが、今回は失敗したらしい。なんとなく、そういう感触はあったのだが。

つまり、まだ仕事は終わっていない。

「ねえ」

「何？」女の子が聞く。

「そろそろ起きましようか」

「うーん・・・」まだ布団から出たくないようだ。

「お腹空かない？」

「うーん・・・ちよっとだけ」

「先生もお腹空いちゃった。一緒に食べに行かない？」

「・・・うん」

「朝ご飯食べたら、何がしたい？」

「えっと・・・でも、帰らないと」

「大丈夫」なるべく優しく言った。「またいつでも泊まりに来て」

「本当？」

「ええ」

少女は顔を綻ばせる。それを見て心が和んだが、やはり申し訳ない部分が多かった。この子は明るく振る舞ってくれているが、やはりどこかで、家族と離れて寝るのは不安だと思っているに違いない。

ごめんね。私が失敗しなければ、もう済んでいたのに。

心のなかでそう謝ってから、精一杯の笑みを見せた。

「詩織、聞いてたか？」

その声は、丸椅子に座っていた詩織の耳に届いていたが、なんだか、あまり重要ではないように思えて、返事をする気になれなかった。言ってみれば、薄っぺらい言葉だ。BGMみたいな物とも言える。BGMに返事をする人間なんてどこにもいない。

そう勝手に納得していると、詩織の頭を鈍い痛みが襲った。思わず頭を押さえてうずくまる。

「いったあ・・・」

「生きてたか？生きてるなら、返事くらいしろ」

「亜由美さん、何で・・・」

詩織は顔をあげて、目の前に立つ女性の右手に握られた物を見る。掌サイズで、錆びた赤銅色の、牛だった。

「・・・なんですか？それ」

「文鎮」

「文鎮・・・なんでそんな物がここに」

「ペーパーウェイトとも言う。保健室でも、あったら役に立つ」

そう言って彼女は、文鎮をデスクの上に置いた。

詩織はそれをしげしげと見つめる。机の上よりも彼女の手の中にある事が多いのかもしれない。そう詩織は直感した。そう、なんとかに金棒というやつだ。

「それと、学校では先生と呼びなさい」

「え？あ・・・それは失礼しました、山岡亜由美先生」

そう皮肉を込めて言うのと、ずっと彼女の目に力がこもるのが分かった。昔はそれほど怖くなかったのに、最近は何故かこの眼力に弱くなってしまった詩織である。これが立場の力という物なのか。それとも、昔の自分は気づかないくらい鈍感だったのか。

山岡亜由美先生はこの高校の校医の1人だ。多少特殊なこの高校

では、保健室の先生と呼ばれる人が、彼女を含めて4人いる。その中で詩織と最も面識があるのが彼女だった。

髪を多少明るく染めているものの、お洒落と言ったらそれくらいのもので、化粧もほとんどしないし、アクセサリーもつけない。そのせいで、多少鋭い目をしている以外は、あまり特徴のない容姿をしている。ただ、それは多少ひいき目に見た場合の評価であり、世間的には、なんとなく怖そうというのが大半の評価だった。実際、口調も振る舞いも強めな彼女は、暖かみがあるタイプとは言い難い。校医よりも、体育教師の方が似合っているのかもしれない。

そんな先生だが、詩織にとってはただの校医というだけではない。実は詩織は幼い頃から彼女と面識がある。それどころか、ほとんど親戚付き合いをしていると言ってもいい。それは詩織の母親と亜由美先生が姉妹の様に仲のいい親友だかららしい。この土地に引越してくる前は、長い休みの度に互いの家に泊まりに行くような関係だった。

だから、今でも詩織は思わず亜由美さんと呼んでしまう事があった。子供の頃はそう言ってよく甘えていた。その時は、困ったような顔をしながらも詩織の頭をなでてくれた。言わばもう1人の母親の様な物で、本物の母親が海外赴任中の今は母親代わりとも言える人だ。

さすがに学校では先生を付けて呼ぶ事になっているが、幼い頃からの習慣だから簡単には切り替えられない。もともと、この先生の方も、何故か学生達に自分の事を名字ではなく名前で呼ばせているので、一体どういう関係が理想なのかはつきりしないところだった。「とにかく、少しは落ち着いたか？」

亜由美先生が少し抑えめのトーンで聞いた。思いやりからなのか、それとも呆れているのか、両者がない交ぜになったような聞き方だった。

「あ・・・はい」

「心配なのはわかる。だけど、それで詩織がふらふらして事故にで

もあつたらどうする」

「・・・そうですね」

「あの子の事は、医者に任せておけば問題ない。大丈夫だ。私が保証する」

「・・・はい」

「だから、しっかりしろ。今のままだと、詩織の方が心配だ」
詩織は何も言えなかった。

その時には我慢するのがやっとだったから。

「全く・・・」

亜由美先生はそう言って立ち上がり、椅子に座っている詩織の前に立った。

そして、そっと詩織を抱きしめる。

背中をさすってくれる手は、紛れもなく優しくかった。

それで急に涙が溢れた。

「ごめん、なさい・・・」

なんとかそれだけ言った。

後は何も言えそうになかった。

「大丈夫だと言ってるのに・・・困った子だな」

それは詩織にも分かっていた。

誰もがただ眠っているだけだと言った。だからきつとそうだ。実際、病院でそう言われた時に詩織は安堵した。何か重病だったらどうしよう。その事ばかり考えていたから、命に関わるわけじゃないと言われて、肩の荷が下りた気分だった。

だが、全部下りたわけではなかった。

どうしても悪い事ばかり考えてしまうのだ。

もし、このまま目覚めなかったら。

もし、私があの時、何か出来ていたら。

もし、もし、と考えてしまう。

無駄なのに、そんな事を考えてしまう。大丈夫だと励ましてくれているのに、それすらも、もしかしたらと考えてしまう。もし、私

の為だけの嘘だったらと思ってしまう。

そんな事を考えても、仕方がないのに。

そう、仕方がない事だ。

そう思うと、何故かまた涙が溢れた。

保健室には他に誰もいない。

静かだった。

部屋の外も静かだった。

詩織の嗚咽だけがよく聞こえる。

そういえば最近泣いてなかったと、詩織はふとそんな事を思い出した。最後に泣いたのはいつだっただろうか。格好悪いから、人前で泣いたりはしない。高校に進学してこの土地に来てからは、まだ一度もない気がする。

確か・・・

「・・・詩織はやっぱりあいつの娘だな」

不意に先生がそう呟いた。どこか諦めたような、そんな声だった。「私を困らせるばかりの・・・仕方がない親子だ」

達観したようなその声が可笑しくて、詩織は少し笑ってしまった。詩織の母親は、正直言っただけかなり間が抜けている。いい歳なのにふわふわしていて、娘の自分の方がしっかりしているくらいだった。だから、きっと学生の頃は、親友の亜由美さんにも世話を焼かせていたに違いないと、ずっと思っていたのだ。

やっぱりそうだった。本当にダメな母親である。

でも、詩織の口元は綻んだままだった。

どういうわけか、少し元気が出た。

もう大丈夫だ。

不安が全部消えたわけではないし、多恵が心配なものも変わらない。今の言葉を聞いたからといって、何か状況が良くなったわけでもない。

でも、これでもうしばらくは泣いたりしない。

やっぱり保健室の先生だったんだなと思ってから、これはさすが

に失礼だろうと気付く。その事も何故か可笑しく思えて、詩織はまた密かに微笑んだ。

亜由美先生は何も言わずに詩織の背中を撫でてくれている。

あの頃と全然変わらない。

それが懐かしくて、詩織はもう少しだけ泣いたふりをしている事にした。

もう平気。だけど、もう少しだけ。

保健室の2人は本当の親子の様だった。

結局、その日は授業に全く出なかった。

朝練の途中で多恵の家に行って、そのまま事情を説明したり付き添ったりしていたら、また学校に戻る頃には既に午後の授業は始まっていた。その後は、心配した亜由美先生に保健室に押し込められていたので、一応ちゃんとした事情があると言えないこともない。それでも、詩織自身が体調不良だったというわけではないから、少し後ろめたいところがあった。

放課後には部活もあるが、授業に出ていない手前、参加するわけにはいかない。

詩織は帰宅する事にした。

多恵の様子が心配でもある。先ほど確認してみたら、既に病院から自宅に戻っているらしい。まだ眠ったままだそうだが、検査してもやはり異常はなかったようだ。すぐには病室を用意出来ないらしく、入院は準備が出来てからにするらしい。

亜由美先生に挨拶してから、保健室を出る。部室に置いたままだった荷物は既に回収済みだった。そのまま、いつもは通らない道を使って校外へと出る。

幸い、知った顔には出会わなかった。

その後は大通りを堂々と歩く。多恵の家は、学校から歩いて15分程の距離だった。詩織の家よりもずっと学校に近い。何度も行った事があるので場所は覚えていた。赤茶色で比較的新しめの、いい雰囲気のある6階建てのマンションだ。

多恵はそこに両親と家族3人で住んでいる。住んでいる建物に相応しい、仲のいい家族だ。泊まりに行った事もあるので、家族ともすっかり顔なじみだった。

それなのに、まず、昨日突然多恵のお母さんが倒れてしまった。買い物から帰る途中だったらしい。全く前兆等はなかったようで、

多恵は電話越しでも分かるくらいに動揺していた。

そして、今度は多恵である。

同じ家に住む人間が2人、続けて倒れてしまった事になる。そして、2人とも倒れた原因が不明。検査しても異常がなく、それなのに眠ったままというのも一緒だった。

さらに、その2人だけではない。

このところ、似たような急病者が頻発しているという噂が広まっているのだ。詩織の知り合いでは多恵達2人だけだが、この近辺だけでも既に10人弱ほど、同じ様な昏睡者がいるらしい。

そして、その人達はまだ誰も目覚めていないらしい。

その事がなんとなく不気味で、詩織を一層不安にさせる。

だが、詩織が気にしても仕方のない事だ。亜由美さんの言うとおり、倒れた原因については医者信じろしかない。詩織には友達として他にすべき事がある。多恵の家で動けるのは父親1人だけになってしまいうので、今日は親戚の人が来てくれるらしい。しかし、それでも大変には違いない。行けば何か手伝える事があるかも知れない。せめてお見舞いだけはしておきたかった。

親友の為に、ここでしつかりしないといけない。

そこで、詩織は今朝の電話を思い出した。

L。

今考えてみても、意味はまるで分からなかった。

Lと言われてすぐに思いつくのは、洋服とかファーストフードのサイズのLくらいの物だが、それを伝えるとはどういう意味だろう。苦しさのあまり、妙な事を口走ってしまったのだろうか。

それに、本当に伝えて欲しいのだとしても、伝えるべき相手が分からないというのがお手上げだった。多恵は何か言いかけていたが、途中で途切れてしまった。聞きとれたのは、銀の、という部分だけである。

銀と言われて詩織が思いつく人物。

1人いないわけではない。いないわけではないが、多恵と接点が

全くない。恐らく話した事もないはずだから、伝言を頼む相手としては考えにくい。

でも、他に誰かいただろうか。

「詩織先輩！」

自分を呼ぶ声がして、詩織は立ち止まった。

知った声だった。

周囲を見渡してみると、今歩いている大通りの脇道の奥、何かの町工場らしい建物の前に、少女が立っているのが目に留まる。

建物の陰になっていて、顔はよく見えない。だけど、細身のシルエットは確かに彼女の物だ。何より、僅かに彼女の髪にかかった日光が激しく自己主張している。

まるでルビーを通したような紅い光。

間違いなく彼女だ。

詩織の後輩であり、そして、この近辺ではちょっとした有名人。

彼女の名前は荒瀬葉月だった。

「葉月ちゃん、ここに何の用？溶接の資格にでも挑戦するの？」

詩織は葉月が立っている所に行くなり、そう聞いた。

葉月の目の前にある建物は、一目見ただけでは何の工場かよく分からなかった。看板らしき物もない。ただ、大きい機械がいくつか動いていて、そこから物凄い火花が出ている。何か作っているらしいという事だけは確かだった。

中では作業着姿の男性が数人働いている。忙しそうだった。

「なんでですか？」葉月はきょんととして聞き返した。

「いや、ちょっとだけ、もしかしたらって思ったんだけど。何か、ここに用事？」

「ちよつと道を聞いてみたんですけど。でも、手がかり無しでした」
「へえ・・・どこへ行きたいの？」

「えっと」葉月は鞆から1枚の名刺を取り出して、詩織に見せる。

「ここなんですけど・・・」

詩織はその名刺を上げしげと見つめる。

戸部探偵事務所。調査員。三枝松 渚。

そこには大きくそう書いてあった。

詩織はたっぷり間を置いてから、葉月に視線を戻してこう聞いた。

「・・・彼氏が浮気でもしてるの？」

「え、なんでですか？」

「じゃあ、生き別れの兄弟がいるとか？」

「・・・いるんですか？」

「違うの？」

「彼氏も生き別れの兄弟もいないと思いますよ。あ、普通の兄はいますけど・・・」

「それは知ってる」詩織はそう言ってから、腕を組んだ。「じゃあ、なんでこんな所に用があるの？この・・・ミエマツさん？この人、

知り合い？」

「いえ、そういうわけじゃ・・・」

葉月はそう言って、目を逸らした。

詩織にはそれが意外だった。この後輩はいつも真っ直ぐこちらの目を見て話す。少しでも、こういう風に視線をさまよわせる事はほとんどない。

何か怪しい。

詩織の勘がそう言っていた。

よく考えれば、女子中学生が1人で探偵事務所に行くという状況が、既に十分怪しい。何か変な事に巻き込まれているのかもしれない。この後輩はしっかりしているようで、どこかふわふわとした抜けている所がある。そして、人を疑う事を知らない。よく考えたら、そういうところは詩織の母親に似ている。そうなると、何か大事件を起こしていたとしても不思議ではない。

「葉月ちゃん、何か隠してるでしょ？」

「いえ・・・別に」

葉月は詩織と目を合わせようとしない。こういう葉月の反応を見るのは初めてだった。いつもの彼女とは正反対である。

だが、やはり慣れていないのだろう。詩織の言葉に視線がうろろするし、身体もどことなく挙動不審になる。はっきり言って、これ以上ないくらいに怪しい。嘘をつく技術が育っていないようだった。

ここまでバレバレな嘘も珍しいなと内心思いながらも、葉月が何を隠しているのか気になって仕方がなかった。

「ねえ・・・本当に何を隠してるの？」

「いえ、本当に何も」

「嘘。だって、目も合わせてくれないし、受け答えも曖昧だし、なんだかそわそわしてるし」

「そ、そうですか？」挙動がますますおかしくなる。

「それで隠せると思ってるわけ？」

「は、はい・・・あ、いえ」葉月は慌てて言い直したが、既に遅い。「その返事も変。いつもはもっとはつきり喋るし、それに、返事も遅いし。嘘つくのに慣れてないから、混乱してるせいじゃない?」

「そ、そうですね・・・あれ?」

葉月は混乱しすぎて、自分でもよく分からなくなっているようだった。

面倒臭くなってきた、詩織は葉月の両肩を掴んで顔を近づける。いわゆる、強硬手段である。

「いいわ・・・じゃあ、喋らなくてもいいから、私が一緒に行ってあげる。何も隠してないなら、問題ないはずよね」

「いえ、えっと・・・」

「逃げようとしたって無駄だから。行くところが分かってるんだから、先に行って待ってればいいだけだものね?」

「あ、あの・・・」

「とにかく! 話せないって言うなら、ついていくだけだから。後輩が何か危ない事に巻き込まれてるのに、黙って・・・」

「あの!」

葉月が急に大きい声を出した。

詩織は少し驚いたが、相手の肩から手は離さなかった。

よくよく見ると、少し思い詰めたような、そんな表情だった。

「な、何?」

「あの、誰にも言わないでもらえますか?」

「え、あ、うん。わかった」

「特に、お兄ちゃんとか、家の人には・・・」

お兄ちゃん。

急にそう呼んだ事にまず驚いた。だが、中学生ならそれほど珍しい事ではないだろう。詩織にも歳の離れた兄がいるが、昔はそう呼んでいた。今では恥ずかしくてそんな風に呼べないが。

それよりも、彼女が家族に隠したいという秘密とは何だろうか。

詩織はそれとなく周囲を観察した。近くを歩く人物はいない。町

工場の人達がこちらを注目している様子もない。機械の音で、こちらの声は聞こえないのかもしれない。

それでも、こんな所でする話ではないだろう。

「ここだとなんだし、場所を変えましょう」

詩織はそう提案した。

だが、葉月は意外そうな表情をした。

「え、どうしてですか？」

「だって・・・人に聞かれたらまずい話なんじゃないの？」

「あ、いえ。そんな事ないですよ」

詩織は虚を突かれた。

「少し恥ずかしいですけど、でも、特に・・・」

「いや、普通、恥ずかしい話は聞かれたらまずい話でしょ？」

「でも、結局、私を心配してくれているからなので・・・」

「・・・心配？」何か違和感があった。

「あ、はい。その、最近多いじゃないですか。急に路上で・・・」

「ちょっと待って」

「あ、はい」葉月はこちらを見る。完全に普段通りだった。

「その・・・そう。さっきの名刺は？あれは何なの？」

「あ、そうですね・・・」

葉月はなんだか言いにくそうだった。

詩織はそれを見て、そこに何かあると確信する。結局、その名刺の人物が、何か事件の鍵を握っているはずだ。今までの葉月の話は、あまり要領を得ないが、それさえ聞けば、話の筋が見えてくるに違いない。

しばらくの逡巡の後、葉月が口を開いた。

「実は、この人が吸血鬼らしいんです」

詩織は目が点になった。

荒瀬瞬が通う高校は、私立大学の付属校である。

だが、普通の意味の付属校とは多少意味が違うかもしれない。もしかしたら、寄生していると言った方がいいのかもしれない。

どういう事かと言うと、まず、瞬の高校には校舎がない。

噂で聞いた話だが、昔は高校にも校舎がちゃんとあったらしい。だが、それが大火事だか地震だかで使えなくなってしまったらしい。その時、臨時の代用として、隣接していた大学の設備で授業をした。それでも全く問題ないくらい大学の敷地が広がったというのもあるらしい。

そして何故か、そのまま高校の校舎は建て直されなかった。

建て直したいが予算がないという説と、そもそも建てる気がないという説があるようだ。今、かつての高校敷地に残っているのは、古ぼけた狭い講堂だけである。

だから、今現在も瞬達高校生は大学の設備で授業を受けている。さっきは寄生といったが、分かり易く言うなら、間借りしているという事なのかもしれない。

その結果なのかは不明だが、瞬の高校では、普通はある物がないという事が多々あった。クラスというのは一応あるが、集まるのはせいぜい月に1度だけ。だから、瞬は同じクラスの人間を全員覚えていない。そして、当然だが自分の教室という物はない。毎日使うわけではないから、わざわざ用意しなくていいという事らしい。ある意味では、合理的なのかもしれない。

授業もそれぞれが選択したものを受ける。いわゆる単位制である。だから、瞬の学校でクラスメイトというと、なんとなく授業が同じ事が多い人間の事だった。瞬もそういう意味のクラスメイトならよく覚えている。

大学のシステムを先取りしていると、言えないこともないかもし

れない。さらに、実験等の設備が充実しているのはもちろん、大学の先生や先輩との接点が多いため、進学や就職を考える時にアドバースを聞きにいけるといいう利点があった。それ以外にも、直接大学の講義や研修に参加出来る事もある。だが、最大の利点は、大学に入る前から大学生活に慣れる事が出来るという事かもしれない。もちろん、いい事ばかりではない。それでも、瞬はこの高校やりに方に特に不満はなかった。たまに、次の授業の教室まで数百メートルも歩かなければならない事があったり、大学の雑用を手伝う事があったりするが、それくらい普通はあるだろうと思っている。

だが、この男はそう思っていないらしい。

「なんで一カ所に作るんだよ。分けて作れば済む話だろ？」

そう言いながら瞬の横を歩いているのは、伊奈祐介という瞬の同級生だ。髪がやや明るくて、制服を少しラフに着ている。だが、それに反して、どことなく誠実で優しい雰囲気を持っている男子学生だった。本人は遊び人のイメージを確立したいのかもしれないが、あと一步の所でありきれない。そういう印象である。

それでも、頭もいいし、運動もできるし、人当たりもいい。友達も多いし、そしておそらく異性からも人気のある男だった。暇さえあれば女性と話しているという、多少変わった習性があるが、それを差し引いても、瞬よりもずっと社交性も協調性もある人物だと言える。

そんな祐介だが、こういうわけか瞬と仲が良かった。同じ授業を受けた後は、こうやって会話しながら歩く事が多い。会話の話題はほとんどが祐介の提供だった。

「まとめて作るから、こういう非効率な事が起きるんだよ。だいたい、広いからって別に何の利点もないだろ？遊園地じゃないんだからさ」

「広い方が喜ばれることが多いと思う」瞬は感想をそのまま口にする。

「家とかマンションとか公園とかならそうだけだな。学校が広いっ

て自慢になるか？そりゃ、多少は広さがないとダメだけど、別に広さ競ってるわけじゃないだろ。ここが田舎ですって言うてるようなもんだ。そういうイメージ戦略だったら、知らないけどさ」

「学長が大金持ちだ、というのとはよく聞くな」

「じゃあ、田舎の大金持ちが学長か。大失敗だな。イメージ最悪だ」
祐介は可笑しそうにそう言った。内容だけなら恨み事を言っているように聞こえるが、彼の口調は穏やかである。恐らく、本気ではないのだろう。いわば冗談、もっと言えば、彼なりに場を明るくしようというサービス行為だった。

「そんなにイメージ悪いか？」瞬にはよく分からない。

「まあ、俺の偏見だけどな。だけど、金持ちってというのは何か悪いイメージないか？」

「金持ちの知り合いは・・・いない事もないが、どうだろうな」

「どうも、俺はだめだな。あと、代議士とか弁護士とか、先生って呼ばれてる奴もな」

「じゃあ、ここは結構居心地が悪いんだな。先生の巣窟と言ってもいい」

「いやいや、教員はいいだろ。本当に先生なんだから。教師でもないのに先生って呼ばれてる奴が・・・気分が悪いっていうかさ」

「それでも、結構いそうだな」

「そうか？」

「例えば、医者とか」

「ああ・・・でも、本当に先生の人もあるだろ。大学病院とかだと」

「税理士とか司法書士とか」

「それは、先生って呼ぶか？」

「何とかアナリストとかアドバイザーとか」

「いや・・・呼ばないんじゃないか？」

「お世話になったら、恐らく先生だ」

「なんだよ、それ」祐介は笑った。「古めかしいな」

「だが、きっとそういう意味だろ」

「じゃあ、あれか。きつと、そういうギャップがあるんだな」
「ギャップ？」瞬は聞き返す。

「つまり、世話になった人が、そういう意味で、弁護士の事を先生
って呼ぶわけだ。でも、俺はそいつに世話になってないから、何で
先生？って思う。そのギャップに、ついていけないわけだな」

「ああ・・・そうかもな」

「あれ、お前は違ったか？」

「違うというか、他にもある」

「他？例えば？」

「例えば・・・相手をおだてようと思って、先生と呼んでいる、と
か」

「うわ・・・元も子もないな」

「そうか？」

「なんか、こう・・・高級料亭で、オッサンがにやにやしながら酒
を飲んでるのが目に浮かぶ」

「それこそ、偏見だ」

「まあ、いいか。他には？」

「そういうあだ名とか」

「あだ名って・・・」祐介は苦笑する。「子供の遊びかよ」

「大人でもやるだろ」

「そうか？」

「陰口とも言う」

「ああ・・・本当に元も子もないな」

祐介は肩をすくめてそう言った。

日が傾いてきて、やや冷たい空気が感じられるようになっていた。
瞬も祐介も、今日はもう授業がない。何も予定のない瞬は、後は帰
宅するだけだ。祐介は部活に所属しているはずだか、ほとんど行っ
てないようだった。いつも自由に過ごしているようだ。

「そういや、瞬。お前、他に妹とかいるか？」

不意に思い出したように口を開いた祐介は、意味の分からない質

問をした。

「・・・葉月の事か？」もしそうだったら、記憶障害かもしれないと瞬は思った。

だが、祐介はあっさりとこう言った。

「葉月ちゃんの事なら誰だって知ってるだろ。それを忘れてたとしたら結構重病だ。そうじゃなくて、それ以外に海外留学してる妹とかいるのか？」

「いるわけない。急になんだ？」

「だよな。じゃあ、海外に親戚とかいるか？お前と同じ年か、少し年下くらいの女の子」

瞬が少し考えてみると、すぐに思い至る。

「それならいる。そういえば、お前は会った事ないな」

「あ、じゃあ、その子が今、日本に来てるのか？」

「いや・・・そんな話、聞いてないな」

「あれ？その子、銀色の髪してないか？」

銀色の髪という言葉に、瞬は今朝の話を思い出す。

「・・・もしかして、吸血鬼がどうか、そういう話か？」

「吸血鬼？今時そんな話あるか？」

祐介が知らないのが、瞬には少し意外だった。

「・・・いや、なんでもない」

「いいのか？まあ、とにかく、銀髪の女の子、知り合いにもいないか？」

「いない。なんでそんな話になる？」

「いや・・・実は、昨日声かけたんだよ。その子に」

瞬は祐介の顔を見た。

「・・・どうした？急に」

「祐介」

「何だよ」

「お茶は飲んだか？」

「お茶？その子と一緒にって意味か？」

「ああ」

「なんだ？お前」祐介はにやりと笑う。「興味あるのか？珍しいな」瞬はそれには答えず、こう告げた。

「頑張り過ぎないで下さい、だそうだ」

「は？」

「葉月がお前に」

「葉月ちゃんが？」祐介は訳が分からないという顔をする。「・・・何で？」

「心配だったんじゃないか？」

「いや・・・だから何で？」

「俺もよく知らない」予想くらいは出来るが、吸血鬼の説明をする気にはなれなかった。

しばらく間があつてから、祐介は困つたように頬を掻いた。

「・・・それで、何の話だった？」

「銀髪の女の子がどうか」

祐介は急に嬉しそうな顔になる。

「そうそう。その子に昨日声をかけたんだよ」

「ああ」

「まあ、なんだ。綺麗な子でさ。顔も外人というよりはハーフって感じで・・・」

「いや、いい。その辺りは省略してくれ」瞬はすぐにそう言った。

「ここが大事なんだよ」

「とりあえず、美人なのは分かった。それで問題ないだろ」

「美人にもいろいろあるだろ」

「いろいろありすぎる。それを何十分も聞かされる身にもなってくれ」

「いや、そうじゃない。とにかく聞けって」

そう言った祐介の顔は、いつもの様に嬉しそうだった。だが、嬉しくてたまらないという程ではないかもしれない。その微妙な違いのお陰で、少しくらいなら付き合ってやろうという思いやりをほん

の少しだけだが持つことが出来た。冷たいようだが、あまり許容し過ぎると大変な目に遭うので油断は出来ない。

瞬は沈黙したまま前を向く。それで了承を示したと十分伝わる間柄だ。

それを見て祐介は話を再開した。

「綺麗な子だったけどさ。俺、英語は苦手だから、無理かなと思ってたんだ。だけど、顔を見たら、ちょっと東洋系というかハーフっぽかったから、いけるかもしれないと思って声かけてみたんだ。日本語で」

「チャレンジャーだな」そうは言ったものの、瞬は内心呆れていた。「まあな。そしたら、その子、日本語上手でさ。それに、気さくで愛想もあって、すごく話しやすい子だったな。だけど、携帯のアドレスまでは教えてくれなくてさ。まあ、仕方ないけどさ」

祐介は、苦笑しているのか照れているのか、よく分からない表情をした。

しばらく沈黙があった。

「・・・それで？」瞬が聞く。

「え?・・・そういや、なんの話だっけ?」

「あのな。その子が何か関係あるのか?」

「関係?・・・あ、そうか。いや、その子と話してるときにさ、ふと思ったんだ。なんか絵になるっていうか、こう、粹にハマるっていうか、そういう感じがしたんだ」

「美人なのはよく分かった」

「まあ、聞けて。で、誰かに似てるなって思ったんだ。こういう子が他にもいるなって。それで、最初は葉月ちゃんかと思ったんだ。歳もたぶん同じくらいだな。だけど、なんかこう、しっくりこないんだよな。でも、他の子でもないし。他に誰がいたっけなと考えてて、さっき、ふと気づいたのが・・・」

祐介は、面白そうに瞬の顔を見た。

瞬は嫌な予感がした。

「・・・おい」

「なんだ？」

「分かっていると思うが、性別が違う」

「そりゃそうだ。だから、さっきも言っただろ？ 雰囲気だよ」

「雰囲気？」

「ああ。なんていうか・・・文系じゃないから、上手く言えないけどな。まあ、簡単に言うとお前の容姿は独特なんだよ」

「それは・・・」

「いや、そういう意味じゃない。そうだな・・・オーラとか言ってもお前は分からないよな」

「オーラ？ オーロラじゃなくて？」

「さすがにベタだな。じゃあ、ほら、あの演劇部の・・・」

その時、何かが地面に落ちた音がした。

重量感のある、でも金属ではない、ドサツという音。それだけなら、音のした方をちょっと見れば済むような事である。

だが、その音の位置が問題だった。

2人のすぐ背後。

それが地面に落ちたときの振動が伝わってくるような距離だった。瞬と祐介は静止した。

視線を一瞬交わす。

そして、同時に振り返った。

まず目に飛び込んできたのは薄いグレイ。

それはスーツだった。

だが、問題はそのスーツを着ている人物だった。やや顔にしわの多い、だが体つきのがっしりした、おそらく50代くらいの男性。

その男性は目を瞑って仰向けに倒れたまま動かなかった。

「なんで・・・？」

祐介は妙なアクセントでそう呟いた。

瞬も同感だった。だが、そんな事は後回しである。

祐介よりも一瞬早く、瞬はその男性に駆け寄った。

たどり着いてみると、そこはマンションの一室だった。

多恵のマンションとは違って、古くてあまり綺麗とは言えない建物だった。ところどころ、床や壁が剥げていたりして、ここ数年、メンテナンズしていないのがよく分かる。廊下も狭くて、太った人だとすれ違うのが大変そうだった。

そのマンションの4階、ある一室の玄関の前に、詩織と葉月はいた。

表札のような物は何もない。

重そうな金属製の扉を見ながら、詩織はここまで来た事を少し後悔し始めていた。吸血鬼かもしれない銀髪少女がいるという話に踊らされてこんな所まで来たという現在の状況は、控えめに言っても、結構間が抜けている。なんとか葉月を説得して帰らせて、早く多恵の所に行けば良かったと思うが、行きがかり上仕方がなかった。

「ここみたいね」

詩織はドライに言った。早く終わらせようということしか、今は頭にない。

「そうですね」

葉月の声もわりと淡泊だった。彼女の場合、この程度の状況では緊張しないのかもしれない。詩織は彼女が緊張しているのを見たことがないし、そんな場面を想像する事も出来なかった。

その葉月の手には、例の名刺が握られている。

詩織はそれを見ながら言った。

「そもそも、その情報は確かなの？」

「はい。見た人はたくさんいるので」

「でも、こんな所にそんなお金持ちがいる？」

「・・・ですよね」

葉月は不思議でたまらないという表情をした。

不思議なのはこっちの方だと、内心詩織は思ったが、それを口にするのは控えた。代わりに小さく溜息をつく。言いたいことは山ほどあったが、ここまで来た以上、今やるべき事はとにかくはつきりさせる事だった。でないとここまで来た意味がない。途中で帰ったのでは、この後輩はまた1人で探しにくるかもしれない。

「じゃあ、いくわ」

詩織のその言葉に、葉月は黙って頷いた。

ただ、好奇心からか、その表情はすごく楽しそうだ。

後輩のそんな様子に心中で溜息を吐きながらも、詩織はインターフォンを押した。

無邪気な後輩はいざ知らず、詩織は少し緊張する。

最初から、部屋の中はまるで物音がしない。

しばらく待っても、何も反応がなかった。

誰もいないのだろうか。

詩織がそう思った時だった。

「どちら様ですか？」

突然、インターフォンから女性の声が響いた。

気を緩めたところだったので、詩織は慌てた。

「ここは戸部探偵事務所ですか？」

そんな詩織に構わず、葉月が淀みない口調でそう言った。本当に緊張してないんだなと実感して、詩織は少し感心した。

「少々お待ち下さい」

部屋の中の女性がいきなりそう言うのと、インターフォンは切れてしまった。

詩織と葉月は目を合わせる。

事前に何も連絡していなかったので、門前払いの可能性もあった。そもそも、正式に探偵の仕事を依頼しに来たわけではないから、相手にしてみれば仕事の邪魔以外の何者でもない。

だから、話を聞いてもらえただけでも幸運だった。詩織は拍子抜けしたほどである。

「今の人が、渚さんですかね？」

葉月がそう言った。

そんな事まで詩織は考えていなかった。女性の声だったのは確かだが、かなり若い声だった。声だけなら、詩織や葉月と同じ年だとしても不思議ではない。

すぐに玄関扉の向こうで物音がする。

数秒後、扉が開いた。

正直なところ、詩織は目を疑った。

出てきたのは本当に女の子に見えた。細いフレームの眼鏡をかけて黒のスーツを着ているが、背格好は葉月と同じくらいだし、化粧をほとんどしていないように見える。学生の制服を着ていたら、違和感なく女子高生に見えるだろう。それくらい若い印象で、しかも目鼻立ちのはっきりした、ハーフっぽい雰囲気綺麗な女性だった。だが何より、高い位置でまとめて垂らしてある長い髪が目を引き

癖のない真っ直ぐの髪は、まるで織物に使う糸みたいに、綺麗な銀色だった。

本当に芸術品みたいだと詩織は思った。

「申し訳ないんですけど、所長は今留守にしてるんです」

銀髪の女性は申し訳なさそうな表情ながらも、はっきりとした口調でそう言った。詩織はその様子を見て、どこか大人っぽいと感じた。幼く見えるが、やはり学生ではないのかもしれない。

葉月が物怖じせずに聞いた。

「あの、あなたが渚さんですか？」

渚と呼ばれた女性は、葉月をまじまじと見つめる。いきなりそんな事を聞かれたら、誰だってそんな反応をするだろうと詩織は思った。その上、ただでさえ、葉月の容姿は人目を引く。

だが、思いの外すぐに渚は口を開いた。

「そうですけど・・・初めましてですよね？」

「はい。私は荒瀬葉月って言います。あの、ちょっと渚さんにお尋

ねしたい事が・・・」

「ちょっと待って」

詩織は会話を止めた。

このままここで吸血鬼云々の話になっては困ると思ったからだ。葉月はどこでも恥ずかしげもなく話すだろうが、出来れば誰にも聞かれたくはない。

「あの、出来たら、もう少し落ち着いたところで・・・」

「何かの依頼ですか？」渚が聞いた。

ついに聞かれてしまったと、詩織は思った。

「いえ、そうじゃないんですけど」

しどろもどろな返事だった。残念なくらい動揺が声に出ている。

だが、意外にも渚は微笑んだ。

「それなら、私でも大丈夫ですね」

「え？」詩織は驚く。

「所長がいないと、依頼は受けられないんです」

そう言うのと、渚はドアを大きく開けて部屋の中を示した。普通の单身者向けマンションのようだった。通路の横に調理台があり、突き当たりのドアの向こうに一部屋見える。シンプルな木目のイスとテーブルがある、洋風の部屋の様だ。

「この部屋でいいですか？他が良かったら、近くの喫茶店とかでもいいですけど」

「えっと・・・」

詩織はそう言って葉月を見る。葉月はそれに気づくにつこり微笑んだ。こちらもつられて笑ってしまうような、無邪気な笑顔だ。事実、詩織も微笑んでしまったが、この後輩はちゃんと考えているのだろうか？と内心詩織は不安だった。

ふと思いついて、詩織は渚の足下を見る。ハイヒールではなく、底の浅い黒の革靴だが紐で結ぶタイプだった。動きやすそうだし、少しオシャレな気がして、詩織は良いセンスだと思った。

それ以外に玄関に靴は無い。

それなら大丈夫だろうか。

渚の顔に視線を戻すと、彼女も自分の足下に視線を落としているのに気付いて、詩織は動揺した。詩織の視線の先を、つまり思考を読んでいるような、そんな感じがしたからである。そう思案していると、彼女の視線も詩織に戻ってくる。見つめ合う形になって詩織は緊張したが、相手は動揺する様子もなく、気を抜くようにあっさりと微笑んだ。

本当に自分が落ち着いていくのを感じて、詩織は驚くと同時に、凄いなとも思った。

相手の心情をすぐに理解して、上手にコントロールしているみたいだった。

「遠慮なくどうぞ」

銀髪の女性はそう言って、また同じ様に優しく微笑んだ。

男性が倒れていた現場には、数人残っているだけだった。

ここは元々人通りの少ない道だから、それに比例してか、野次馬も少なかった。いくら大学構内で事件らしいと言っても、わざわざ見に来るほど暇ではないという事なのかもしれない。それに、本人はとくに病院に運ばれたし、警察は2人だけやってきて、少し質問しただけで引き上げてしまったし、もはや、いつもと違うところはほとんど残っていないかった。

路上に倒れていた男性は呼吸も脈拍も正常だった。瞬も祐介もそれを確かめたし、何より、駆けつけた救急隊員がそう言っていた。見たところ、ただ眠っているだけの状態。だが、恐らく検査しても何も異常はないだろうと瞬は思った。そして、そのまま目覚めないそんなケースがこのところ何度かあった。瞬の目の前ではこれで2例目だ。

だが、今回は少し状況が違った。

瞬はその現場から少し離れて、立ったまま考え事をしていた。

もちろんその内容は、今遭遇したばかりの事件について。だが、事件そのものというよりは、その中のちょっとした謎についてだった。

謎というには大袈裟かもしれないが、無視出来るほど些細な事でもなかった。

いつの間にかいなくなっていた祐介が、歩いてこちらに近づいてくる。

「何か思いついたか？」

祐介は足を止めるなりそう聞いた。

瞬は即答する。

「2人とも気付かなかった。それしかない」

祐介はその返答を予測していたのか、すぐにこう言った。

「残ってた野次馬にいろいろ聞いてきたんだけどさ」

「ああ」どうやら聞き込みをしていたらしい。

「あの人は理学部の先生で、ほら、その・・・」祐介は現場のすぐ横の建物を示す。「あの4階に研究室があるらしい。ただ、ついさっきまで別の場所で講義してたのは分かってるけど、研究室にはまだ帰ってきてなかったらしい」

「・・・そんな事、なんで分かった？」

「その助手の人がいたんだよ。何の騒ぎかって見に来たらしい。その人はさ・・・」

瞬はすぐに言った。

「いや、いい」

「なんだよ。急に」

「美人なのは分かった」

「美人なのはもちろんとして、理学部の女性は貴重なんだよ」

「貴重なのも分かった」

「本当に分かってるか？工学部じゃなくて、あえて理学部っていう人は・・・」

「分かった」

瞬がいきなりそう断言すると、祐介が不思議そうに聞いた。

「どうした？」

「今度聞くからつけといてくれ」

祐介は笑った。

「居酒屋みたいに？まあ、いいか・・・えっと、何の話だっけ？」

「その先生がどうした？」

その質問に、祐介は少しだけ真面目な表情になる。

「その先生はさ、基本厳しいけど面倒見がいいし、結構評判がいいんだってさ。後・・・っていうか、こっちは文句言わないんだな」

「男は数秒で終わる」

「そうか？ああ・・・でも、確かにもう言うことないな」

祐介は苦笑した。

「それで？」

瞬が先を促す。

「そうそう。その先生、ちょっと前に事故か何かで足を痛めたらしい。それで、歩けるには歩けるんだけど・・・」祐介はそこで左手を軽く挙げた。彼がたまにする、特に意味のないポーズである。「出歩く時は必ず杖を持ち歩いてたらしい。登山用みたいなステッキだつてさ」

瞬は倒れていた男性を思い出してみるが、周りにそんな物は落ちてなかった。瞬と祐介が最初に駆けつけたのだから、もし後ろを歩いていて倒れたのならそこに落ちているはずだった。

誰かが持ち去ったのだろうか。だが、倒れた音がしてすぐに振り向いたから、そんな暇は無かった気がする。

もつといえ、杖についていた人が背後にいたら気付くような気がする。

「杖をついてたら、さすがに気付いたと思わないか？」

祐介も同じ事を考えていたらしい。瞬は少し考えてから、こう聞いた。

「杖が無くて、歩けるには歩けるんだろ？」

「そうらしい。だけど、ちょっと不自然な感じになるからわざわざ杖を買ったんだつてさ。どちらにしろ、そういう奴がいたら普通気付くだろ？」

「気付かなかったんだろうな。不自然でも無いとは言えない」

「だけどな。それだけじゃない」

祐介はそう言って腕を組む。

「俺達の後ろを歩いてたって子にも聞いてみたんだよ。あの先生が俺達の後ろにいるのを見たかって。そしたら、なんて言ったと思う？」

瞬は何も答えない。

「いなかったつてさ。俺達の後ろには誰も」

「だけど、倒れたのは見たんだろ？」

瞬は口を挟んだ。あれは確かに夢でも幻でもなく現実だ。

「それも聞いたんだけどな・・・なんていうか、ちょっと違うところ見てたら、そこに倒れていたんだってさ」

よく分からない話だった。

「・・・どういう意味だ？」

「俺に聞かれてもな。気付いたら倒れてたってそう言うんだよ。なんだそりゃって、口では言わなかったけど、顔には出てたかもな」

「もっと聞かなかったのか？」

「聞いたけどさ。他には説明出来ないって、ただそれだけ。自分でもよく分からないっていうか、そういう感じでさ。あんまり問いつめたら泣きそうだったんで止めといた」

「・・・女の子なのか？」

その質問に祐介は意外そうな顔をする。

「当たり前だろ。どうして男に話聞かないといけないんだよ。なんでそんな事聞くんのだ？」

「いや、お前にしては話が簡潔だったのに驚いた」

祐介はにやりと笑う。

「大丈夫だ。ちゃんとつけてある」

どうやら、知らないうちに溜まっていくシステムらしい。後が怖いなと瞬は思った。

「最初は冗談かと思ったけどさ。でもあれは違うな。そういうタイプの子じゃなかった。怖い話が駄目だから、必死で冷静になろうとしてるっていうか・・・まあ、ちゃんとフォローしといたけど、ちょっと心配だな」

「そんな事、よく分かるな」

「当たり前だろ。お前とは経験値が違う」

祐介は笑わなかった。本当に心配しているのだろう。彼が遊び人になりきれないのは、こういうところだった。

瞬が黙っていると、しばらくして祐介が口を開いた。

「他にも聞いてみたけど、だいたい一緒だな。他は携帯見てたって

子が多いから当てにならないけどな。ただ言えるのは、誰もあの先生が歩いてるのを見てないって事。それから、杖を持って逃げるような奴もな」

そこまで言って、祐介はその男性が倒れていた場所に視線を移した。

瞬もなんとなくそちらを見る。

車1台が通れる程度の幅しかないアスファルトの道路。左手には4階建ての建物があり窓がいくつか並んでいる。祐介が仕入れてきた情報によれば、理学部の建物らしい。壁際には低い木が植えられていて雑草が少し生えているが、もちろん、人が隠れられる場所はない。右手には駐輪場になっている。屋根も何もないスペースで、何も遮蔽になるような物は無い。

端的に言えば、隠れる場所は全く無い。

高い所から落ちてきたにしては怪我が全くないのがおかしいし、もちろん地面は固い。杖をついていたとしたら、音が響いたはずだった。

その場所に倒れていた男性。

彼は何も無い場所から出現したとしか思えなかった。

もし彼が宇宙人だったら、それで解決したかもしれないなと瞬は思った。実際には何も解決していないのだが、多くの人は納得したかもしれない。それなら何が起きても不思議ではないと。思えば、それ自体が結構不思議なメカニズムだ。

だが、彼はここの教員で、普通の人間だ。

瞬は現場の左手に建つ建物を眺めた。何の変哲もない、コンクリートの建物である。

彼の研究室がそこにあると祐介は言っていた。

瞬の視線が動くのを見て祐介が尋ねた。

「どうかしたか？」

「・・・あの建物は理学部だったよな？」

「来たことないか？あ、そうか・・・お前はあんまり縁がないかも

な」

瞬は祐介を見た。

「お前は中に入った事があるのか？」

「ああ。何度か臨時の教室になって、わざわざここまで来た事あるな。それがどうかしたか？」 瞬はすぐには答えなかったが、しばらくしてこう言った。

「・・・ちよつと見てくる」

「はあ？」

親友の間拔けな声を無視して、瞬はその理学部棟へ歩き出した。何か確信があったわけではない。

だが、瞬は頭の回転がそれほど速いわけではない。だから、確信なんて待っていられないという状況が多々あった。それに、そんな物を待っていたばかりに失敗したという事も。

そのうち、こう思うようになった。

自分は確信に甘えていたと。

確信を得てから踏み出すのは、能力のある人間だ。自分のような人間はそれを待っていてはいけない。他の指標も持たなくてはいけない。行動するのかわからないのか、進むのか退くのか、それを決めるための基準多く持って、そしてそれを使い分けなくてはいけない。今も同じだ。

確信が来るのを待っていてはだめだ。それだけを求めても、ただ行動の選択肢が狭まるだけ。

瞬は進む。

その背を押すのは、確信以外の何かだった。

紅茶専用らしい、綺麗な透明のティーセットだった。

紅茶の綺麗な色もよく分かるし、それをティーポットに注いでいる人も凄く絵になっていた。だが、詩織は全く同じティーセットを量販店で見た事があるので、それが安物だと分かってしまった。そしてその事が、せつかくの雰囲気を台無しにしていた。

知らなければどんなに良かっただろうと、詩織は本気で後悔した。戸部探偵事務所であるらしい一室は、入ってみると普通のワンルームだった。

引越したばかりみたいながらんとした部屋で、身構えて入った詩織が拍子抜けしたほどだった。テーブルと椅子と観葉植物くらいしかない家具の少ない部屋で、よく言えばすっきりした部屋だった。事務所だからこんな物なのかもしれないが、それにしても事務用品も少なかった。

「生憎、お菓子はないます。ごめんなさい」渚が紅茶を注ぎながら言った。

「いえ、お構いなく・・・」

詩織は恐縮して言った。外見は詩織と同じか少し下くらいに見えるが、一応社会人らしいし、雰囲気は大人っぽいので、やはり気兼ねしてしまう。

「それで、どんなご用件ですか？」渚は紅茶を注ぎ終えてから、椅子に座って言った。

詩織は隣の椅子に座っている葉月を見る。

「あの」葉月の言葉は相変わらず歯切れが良かった。「渚さん、って呼んだらいいですか？」

いきなり名前で呼ぶのかと詩織は思ったが、黙っている事にする。そういえば、葉月は最初に会った時から、三枝松ではなく渚の方を使っていた。よく考えてみれば、礼儀正しい彼女にしては珍しい。

何か理由があるのだろうか。

「ええ。こちらでも葉月さんでいいですか？」渚は微笑んで言った。

「はい」

「えっと・・・」渚は詩織を見る。

「あ、私は義江詩織です。私も出来たら詩織って呼んで下さい」

「出来たら？」

「いや、あの、名字で呼んで欲しくないっていうか。ヨシエも女の子の名前みたいじゃないですか。だから、名字で呼んでもらっても、結局名前で呼んだみたいになるので・・・」

「あ、私と同じですね」渚はそう言って、また微笑んだ。

「同じですか？」詩織にはよく分からなかった。

「私も名字で呼ばれるのはちょっと・・・出来たら渚って呼んで下さいね」

聞いてもよく分からないままだった。

渚はそれで終わりとばかりに、葉月に視線を向ける。

「それで、ご用件があるのは葉月さん？」

「はい」

葉月は軽く頷く。

詩織は今更だが緊張した。結構突拍子もない話だから、葉月には出来るだけオブラートに包んで話して欲しいと思ったが、とりあえず最初は黙っていることにする。必要になったら割り込んで話せばいい。それに、一応詩織も話は聞いたのだが、よく分からない部分も多かった。

葉月は少し間を取ってからこう言った。

「ちよっと手に触ってもいいですか？」

詩織は面食らった。

いきなりそれか・・・

唐突にも程があったが、言ってしまった物は仕方なかった。

言われた本人は尚更驚いただろう。案の定、渚も意図が分からないと言わんばかりの表情だったが、それでも両手を差し出してくれ

た。

「どうぞ」

渚の容姿そのままの、少女のような細くて綺麗な手だった。葉月はおずおずと、両手で包み込む様に渚の両手に触れる。傍目には何をしているのか分からない、不思議な光景だった。2人とも綺麗だから、こんな事をしても絵になるのが、救いと言える救いだった。

ただ、詩織も一応少しだけ気になった。

その手は冷たいのだろうか。

しばらく確かめるような沈黙の後、葉月は手を離した。

そして、渚の目を見て質問する。

「渚さん」

「はい？」

「水筒を持ち歩いてますか？」

またもや不可解な質問だった。少なくとも普通のアンケートにはまず無いだろう。

渚がこちらを見たような気がしたが、詩織は窓の外に視線を逸らした。

「いいえ。水筒を持ってないから」

しばらく間があった後に渚が答える。

葉月の質問はまだ続いた。

「最近、誰かにブラウスを貸しませんでしたか？」

今度はすぐに答えがあった。

「貸すほど服がないから・・・」

渚はそう言って苦笑する。

「そうですか・・・」

そう言った葉月は本当に残念そうだった。

渚はそれを見て、困ったような表情をする。そして詩織の方を向いた。

「・・・私、何か期待に添えなかった？」

「いえ、お気になさらず。私にしてみれば、全くもって予想通りなので」

「一体何のアンケートだったんですか？」

「それは・・・出来たら聞かないで下さい」

無理もないが、渚は釈然としない様子だった。自分だけ蚊帳の外にされているというのもあるだろうが、質問が意味不明過ぎるというのが最も大きいだろう。

これ以上突っ込まれても困るので、詩織は話題を変える事にする。「ところで、渚さんは外国の方なんですか？それともハーフとか？いきなり過ぎるかとも思ったが、渚は微笑んだ。

「いえ。私、日本人ですよ。日本生まれの日本育ち」

「そうなんですか？でも、やっぱりどこかで、外国の血が入ってるんですよね？」

「いえ、全然」

詩織は意表を突かれた。

「え？でも・・・」

どう見ても純粋な日本人の髪ではない。髪がすごく綺麗なので目立たないが、瞳も薄い銀色だった。完全な西洋人という顔立ちではないが、外国の遺伝子がないと、こういう髪と眼の人は生まれない気がする。

だが、渚が嘘をついているようには見えない。嘘をつくような理由も無い気がする。

本当に遺伝じゃないとすると、もしかして何か病気だろうか。

詩織は黙った。

渚は特に気を悪くした様子はないが、特に掘り下げたい話題でもない。

そこで、葉月が質問した。

「あの、同じ様な髪の女の子、心当たりないですか？」

渚は葉月の方を向く。

「ひょっとして、その子を探してるんですか？」

「はい。実は」葉月は頷く。

「その子が水筒を持ち歩いてたんです？」

「はい。後……」葉月はじつと渚の目を見て言った。「優しく、白い服を着て、象が好きなんです。それと、黒い高級車に乗って、白人の男の執事さんが運転手で、あ、でも、日本語が上手なんです。そして、たぶんですけど……」

「ちょっと待って」

渚は優しくそう言った。

「あの……何か？」葉月が目を逸らさずに聞く。

「その子、もしかして誰か探してました？」

詩織はティーカップにのぼそうとしていた手を止めた。

勘違いだったという事で終わったと、そう思っていた。

だが、その女の子が人探しをしていたというのは、まだ全然触れていない話題だった。連想させるような話題も無かった気がする。

だから、その子の事を知っているか、調べているかでもない、そんな質問は出来ないはずだった。

まさか、何か心当たりがあるのだろうか。

葉月も少し驚いたのか、やや間があったがすぐに答えた。

「はい。その……サイトウさんって人を探してたみたいなんです」その時だった。

渚の口元が緩んだ。ふっと、空気が漏れるような音がある。

すぐには理解できなかった。しばらく頭の中を整理して、ようやくそれが何の表情なのか認識出来た。

彼女が笑ったのだと分かったと同時に、詩織は驚いた。

そして、少し身震いした。

「あ、ごめんなさい。少し可笑しくて」

そう言った渚は、もう普段の微笑みに戻っていた。

葉月はすぐに答える。

「いえ。その子の事ご存じないですか？」

「まだ、分からないんですけど……他には何か言ってますんでし

た？」

「他ですか？会ったのは私の友達なんです。だから、その子に聞いてみないと・・・」

「そう・・・それで、その子を見つけてどうするんですか？」

渚は急にそう聞いた。

詩織は少し身体が緊張するのを感じた。

やっぱりだ。

さっき彼女が笑ったときにも同じ物を感じていた。普段の優しい微笑みの裏にある、何か。

渚の持つ優しさでも隠しきれないような暗い物。

葉月は気付いていないのか、いつも通りに答える。

「友達がいろいろ助けてもらったからお礼をしたいって。それに、服も借りたままだから返さないといけないし。サイトウさん探しも大変そうだから、手伝ってあげようって」

渚はそれを聞いて微笑んだ。

いつもの笑みだったため、詩織は安心したが、まだ緊張が尾を引いて残っていた。

「そんなに感謝されるなんて・・・いい子なんですな」
どこかいつもより優しさが増しているように見えた。

「はい。あの、渚さん」

「何ですか？」

「その子の事、知ってるんですか？」

いきなり葉月がそう聞いたので、詩織は内心戦々恐々だった。

やぶ蛇じゃないといいのだけど・・・

だが、渚は困った様子ながらも笑顔だった。

「知っているといえば、知ってるんですけど・・・」

葉月は身を乗り出す。

「本当ですか!？」

「でも・・・」渚はますます困った顔になる。「今どこにいるのか、どこに住んでるかとか、電話番号やメールアドレスとか、そう

いうのは知らないんです。だから、ちょっとお役に立てないと思う」

「え・・・」葉月はゆっくり姿勢を戻す。「それじゃあ、せめて名前とかは」

「名前・・・なんて名乗ってるのかも知らないんです。ごめんなさい」

「もしかして、ネット上のお付き合いとかですか？」

葉月の質問に、詩織も同感だった。

だが、渚は首を振る。

「いえ、彼女、携帯もパソコンも持っていないと思うから」

「じゃあ、どうやって知り合いに？」

それも同感だったが、正直詩織だったら聞けなかっただろう。

地雷を踏んだらまずい。

詩織の直感がそう囁いていた。

しかし、今回も踏まずに済んだようだった。

「なんていうか・・・そう、幼なじみなんです。でも、しばらく会ってないから、向こうもきっと変わってしまったと思う」

だんだんよく分からない話になっている。詩織はそれに気付いていたが、嘘ではないかと指摘する勇氣は無かった。

その箱を開けるのは絶対にまずい。

渚は言葉を続けた。

「でも、きつとまた会えると思うから・・・会えたらそう伝えておきますね。それくらいしかできないけれど」

「あの」

葉月が口を開いた。目は真っすぐに渚を捉えている。

詩織はその目を見て、葉月が何を言う気なのか分かった気がした。止めるべきだろうか。

だが、葉月が聞くよりも、詩織が止めるよりも早く、渚が先に口を開いた。

「そうじゃないんです」

渚の言葉は唐突だった。

さすがの葉月も意表を突かれたようだ。

「え？あの・・・」

「私とその子と同一人物じゃないかって、そう言いたいんですよね？」

葉月はやや躊躇ってから答える。

「・・・はい」

「そう思うかもしれないけど、違うんです。今からそのお友達に会いに行ってもいいですけど・・・でも、手は温かったでしょう？」

葉月は驚いたようだった。

渚はさらに続ける。

「それに、ほら」自分の瞳を指で示す。「瞳の色も違うでしょう？これはコンタクトを入れたら誤魔化せそうですけど」

瞳の話題にはまだ触れてもいない。

だが、詩織はあまり驚かなかった。どちらかというと、まずい雰囲気にならないかとびくびくしていたからだった。

葉月が黙っているの、渚が話を続ける。

「その子の事を知っているから、違うところは分かります。昔と変わってるとは言っても、そこは同じだと思う。そうじゃないと、意味が無いから」

詩織は葉月を見た。急に喋らなくなったので少し心配になったからだった。

すると、葉月もこちらを見ていた。さっぱり分からないと顔に書いてあった。

詩織もそれは同じだから、助けようもない。

沈黙が部屋を支配した。

「そういう事でいいですか？私が会えたら話しておきますから」渚がそう切り出すと、葉月はしばらく間をおいてから頷いた。そして、すぐにこう聞いた。

「いつ頃会えそうですか？」

渚は微笑む。

「すぐに会えるかもしれませんね」

「え、本当ですか？」

「はい・・・あ、葉月さん？」渚は葉月の返事を待たずにこう続けた。「サイトウさんも大丈夫ですから」

葉月は少し考えてから、こう聞いた。

「大丈夫って、どういう意味ですか？」

渚の雰囲気は変わらなかった。

「サイトウさんを探してあげるって言ってましたよね？私、彼女も知ってるので、会ったら伝えておきます。だから探さなくても大丈夫。お友達にもそう伝えてあげて下さい」

葉月はもちろん驚いたようだが、さすがに慣れたのか、すぐにこう聞いた。

「彼女・・・サイトウさんは女の人ですか？」

「はい。サイトウAさん、ですよね？」

その言葉を詩織はこの時初めて聞いた。

サイトウさんだとは聞いていた。

だが、Aは初めてだったのだ。

詩織の頭に甦った記憶があった。それはもちろん今朝の事。

そして多恵の顔。

詩織の口が勝手に動いていた。

「あの、渚さん」

渚が詩織を見る。

銀の髪が揺れる。

聞いたらまずい事かもしれないと、詩織は一瞬だけ思った。だが、それも一瞬だけだった。

虎穴に入らずんば孤児を得ず、である。

「Lって何の事か分かりますか？」

渚の瞳にほんの少しだが力がこもる。

それは確かに不機嫌な気配だったが、詩織は意表を突かれた。前

に感じたのと全然違ったからである。前のは、得体の知れない恐ろしさのような物だったが、今のはもっとあからさまな、子供が駄々をこねる時のような、詩織でも簡単に推し量れるような苛立ちに思えた。

「ちょっとだけ、話を聞いてもいいですか？」

渚はそう言った。少しだけ不機嫌そうに見えたが、それだけだった。

よく分からない人だなと詩織は思う。

こういう子供っぽい印象を受ける時もある、その前の様に、邪な大人っぽさを感じるときもある。どちらが本当の彼女なのだろうか。

だが、今はとりあえず、話してみようと詩織は決心する。

多恵が言っていた事。そして多恵に起きた事を。

何か特別な事をこの銀髪の女性は知っている。

そう、銀だ。

詩織がそう思った瞬間、それに応えるように、渚の髪が一瞬輝いたように見えた。

T

「会われてどうされるのですか？」

感情を抑えた事務的な声。声といっても、実際に話しているわけではないが。

「そんな事を聞きたい？」

「はい」

「聞いてどうするの？」

「・・・ただ、それほど重要な事だとは思えません」

「そうね」 あっさり同意する。「私もそう思う」

「それでしたら・・・」

「それは忠告？」 相手の言葉を遮って聞く。

「いえ」

「そうね・・・」 少し考える。「貴方に理解してもらうのは難しいかもしれないけれど、それでも聞いておきたい？」

「もし許されるのでしたら、是非」

「いろいろあるけれど・・・貴方が一番納得出来るそうなのにしておくわ」

「はい」

「杞憂って言葉を知ってる？」

「はい」

「それと同じ事」

「・・・つまり、取り越し苦労という意味ですか？」

「そうね。半分くらいは」

「では、もう半分には何かあるのですか？」

「決まっているでしょう？」

「・・・申し訳ありませんが、理解しかねます」

「杞の国の人が憂いた事があったから、杞憂なのよね？ その人は何をそんなに心配していたのか知らない？」

「確か、天が落ちてくる事を憂いていたと」

「知ってるじゃない」

「ですが・・・」

「あなたは心配じゃない？」

「はい」

「私もそう」無意識に少し頷く。「だけど、私の友達にそれを心配している子がいるの。こうして私達が動かないと、天が落ちてくるんじゃないかって」

「・・・失礼ですが、それは本気とは思えません」

「どこまで本気かは私にも分からない」そこで少し微笑む。その友人の顔を思い出したからだった。「でも、嘘ではないわ。確かに、サイトA次第では、この世界が滅びるような事がないとは言えない。そして、それが巡り巡って、私達を滅ぼすような場合もないとは言えない。だから、今している事は、その為に一応の保険をかけていると言えない事もない」

そこまで言うてから、相手の反応を待つ。しばらくしても、返答はない。

「これで納得出来そう？」

「・・・もう1つだけ、よろしいですか？」

「ええ」

「当主様はサイトAを消されるおつもりですか？」
危険なものは消しておく。彼らしい発想だった。

そして、もしそうなら手を汚すのは自分の仕事。そう考えるのもまた彼である。

「もしそうだとしても、貴方は手を出さないで」

「何故ですか？」

「貴方では勝てない。いたら、邪魔なだけだから」

「・・・かしこまりました」

それっきり彼は黙った。とりあえずはそれでいいという事だろう。この話で完璧に納得しろというのは無理な話だが、彼が欲しいのは

そういうものではなく、自分から言葉を聞けたという、その事実なのだ。いわゆる恩寵と似て非なるものかもしれない。

つまり、それくらいの報酬が欲しいという事だろう。忙しい時に、自分に付き合ってこんな所まで来たのだから、ある意味当然かもしれない。

サイトAにさえ会えれば、その用事も終わりである。思いの外目立った活動をしていないらしく、探すのに手間取っていた。だが、それでも、もう数日もかからないはずだ。

そして、もう1つ気になる事があった。最近この近辺で起きているらしい昏睡事件。誰の仕業なのかというのは分からないし、興味もない。だが、明らかにあった事もある。

サイトLが動いている。

なるべく急いだ方がいいかもしれない。世界の為というわけではないが、それが友人との約束なのだから。

理学部棟の中は、外観と比べるとずっと綺麗だった。

壁や床は白を基調にした明るい雰囲気で、その床はワックス掛けした直後みたいにピカピカである。植物やソファもたくさん置いてあって、ホテルのロビーと言っても信じてもらえそうだった。瞬がよく利用する他の建物は、外はもちろん、中も劣化が激しいので、理系の建物はすべてボロボロだろうと思いきこんでいた。こういう見栄えのいい建物があるなんて意外である。

「祐介」

瞬が声をかけると、掲示板を眺めていた祐介がこちらを向く。

「何だ？」

「理学部っていうのは、何をするとところなんだ？」

「何って・・・数学とか物理とかだよ。決まってるだろ」

「工学部とどう違うんだ？」

そう聞くと、ようやく理解したという顔になった。

「ああ・・・まあ、理学部の方が理論寄りっていうか、その程度の違いじゃないか？定理とか法則とか、そういうのを研究してるのが理学部。新しい素材とか技術を発明しようってのが工学部。俺の主観だけどな」

「その2つは違いがあるのか？」

「大学によっては、理工学部とかになってる事もあるしな。外から見たら一緒だろ。だけど、一言で言えば、きっと仲が悪いんだろ」

「そうなのか？」

祐介は軽く頷く。

「理学部にしてみたら、工学部は実用性ありきで金に直結してるから、志が低いように見えるんだろうな。逆に工学部目線で言えば、理学部は儲かるか儲からないかなんて事考えないから、夢ばかり

追ってる自由人みたいで気に入らないんだろ」

祐介の言い方には、どこか実感があつた。

「詳しいな」

「そういう論争に、わりと縁があつてな」

祐介は少し苦笑いをする。どうやら、本当に身近にそういう諍いがあるようだ。

「祐介は工学部だよな」

「ああ。それくらい知ってるだろ？」

「お前も理学部は性に合わないとか、そういう理由か？」

祐介は手を振って否定する。

「違う違う。工学部の方が後々就職しやすいし、大学の定員もずっと多いし、ただそれだけ」

「じゃあ、もし逆だったら、理学部志望になつてたのか？」

その質問に一瞬静止して、少し考えてから祐介は答えた。

「いや・・・どうだろうな。どちらかというと、工学部の方が合うような気はする。なんていうか、工学部っていう響きがいいっていうか。所詮その程度かな」

瞬にもなんとなくそんな気がした。

「そうか。そうかもな」

「お前は、どちらか選べって言われたら、理学部って感じだよな」

「そうか？」

「あれ、違うか？」

「考えた事もない」

「今考えたらいいだろ」

「今は頭に余裕がない」

「あ、そう」祐介は呆れた表情をする。そして、少し声量を落とすと言った。「じゃあ、さっきの会話は何だったんだよ」

瞬と祐介は、棟の西側にあるエントランスから中に入り、南北に伸びる広い廊下を北へと向かった。そして、突き当たりにあった階段を上る。といっても、行き先を決めているのは瞬であり、祐介は

つについているだけである。そして瞬はこの棟に来たことがないので、どこに何があるのか全く知らない。ただ無意味に徘徊しているだけと言える。

3階を過ぎて、4階へ上がる。誰も普段使わない階段なのか、人は全くいなかった。

階段の終点が近づいたところで、祐介が急に口を開いた。

「瞬」

「何だ？」

「お前、昨日もさっきみたいなのに遭遇したんだって？」
瞬は足を止めた。

「どうして知ってる？」

祐介も止まった。

「たまたま、な。その時の野次馬の中に、ここの学生のお兄さんがいたらしくてな。その妹さんが噂してた」

「そうか」

「それはいいんだよ。それより、お前、ちゃんと話したか？」

目的語が省略されていたが、祐介の言いたいことが、瞬にははっきり分かった。祐介が何か忠告するとき、大半の話題は葉月に関する事だった。

「いや、話してない」

「あのな。どうせすぐ耳に入るのに、秘密にしてどうするんだよ」

「わざわざ心配させる事はない」

「そういうところが過保護なんだよ。もう14歳だろ。子供扱いされてるって、そりゃ思うだろ。だいたい、後で嫌われるって分かってるくせに、なんでわざわざ嘘つくんだよ」

「嫌われたら、それはそれで仕方ない」

「そうじゃなくて・・・いや、まあ、待て」

祐介はそう言うてから、咳払いした。

「お前が、大真面目にそういう事をやる人間なのは分かってる。葉月ちゃんも、まあ分かってるんだろうよ。なんだかねで、お前ら

兄妹は仲良いわけだし。俺だって、それだけの事なら他人事で済むんだよ。だけど・・・」

「伊奈」

声が突然割り込んだ。

祐介は少し苛立ったように言った。

「なんだよ？急に」

「いや、俺じゃない」

それもそのはずで、普段瞬は祐介の事を名字で呼ばない。

「あれ？じゃあ・・・」

瞬と祐介は階段の下の方を見た。そちらから人の気配がしたからである。

そこから上ってきたのは、白衣姿の男性だった。

かなり長身の人物だった。細身の上、黒い髪がやや長めで、一見ミュージシャンといった雰囲気である。どこかのロックバンドでギターやベースを演奏していたら似合うかもしれない。色黒でやや鋭利な顔立ちが、その印象をより際立たせている。

だが、そのイメージを決定づけているのは、間違いなく、白衣の下から見える大量のシルバークセサリだった。髑髏、十字架、鎖といった、いかにもという物騒な物ばかりで、その上の白衣の清廉な印象を完全に打ち消している。

瞬はとにかく重そうな格好だなと思ったが、当然、心の中だけに留めた。

男は階段の踊り場まで上がってから口を開いた。

「伊奈。お前の声はよく響くな」

冷たい声だった。明らかに皮肉を言っているので当然かもしれない。

どうやらうるさかったようだ。瞬はそれに気づいて謝ろうとしたが、祐介が左手を挙げてそれを止めた。

「藤村さん、こんなところにいるなんて、珍しくないですか？」
言葉遣いは丁寧だったが、祐介の口調はむしろ、若干軽口だった

かもしれない。

「珍しいからどうした？」

逆に、藤村と呼ばれた男性の口調は不機嫌そのものだった。

「いや、何かありました？心を入れ替えるような不幸な事とか」

「そういえば、最近縁がないな。お前はどうか？」

「俺ですか？おかげさまでないですね。大きいやつは」

「そうか。だが、心は入れ替えた方がいいぞ。なんなら俺が融通してやろうか？」

「融通って心ですか？そんな物あるなら、俺にはもったいないですから、どうぞご自分に」

「いや、不幸の方だ。今なら何だってしてやれるぞ」

男の目に力が籠もった気がしたが、祐介は涼しい顔をしている。

「いや、それもお構いなく。小さいやつが嫌というほど溜まってるんで、まだ処理しきれてないんですよ。同じ寮に変な奴が住んで、ほとんどそいつのせいなんですけどね。よかったらそいつにでもくれてやって下さい」

「偶然だな。俺の寮にもいる。それなら・・・」

その時、重い本が床に落ちたような音がした。

階段にいた男3人は自然と下を見る。その音が、またしてもそこからだったからである。

そこに立っていたのは、今度は髪の短い女性だった。

おそらく大学生か、その上の大学院生だろう。スカートではなくズボンのスーツ姿で、重そうなファイルを左手に持っている。瞬や祐介よりもずっと短い髪と合わさると、一瞬男性にも思えたが、服は女物だし、華奢で女性的な体つきだったから、恐らく女性だった。眼鏡をかけていて、どこか薄い印象の顔だが、スツキリとまとまっ

ていて、肌も綺麗だった。

顔色は普通だったが、決して機嫌が良さそうではない。
先程の音は彼女が持っているファイルで壁を叩いた音のようだった。今まさにその直後のような姿勢だったから、その推察は難しく

ない。

「・・・そこで口論してたら迷惑だって、分からない？」

スーツ姿の女性が口を開く。落ち着いてはいるが、冷たい声だった。

「なんでこんな所にいる？」

踊り場にいる白衣の男がすぐに問い返す。先程よりもさらに一層声が冷たい。

どうやら知り合いらしいと瞬は思った。発言の内容もそうだが、初対面の相手に、ここまで明確に苛立ちを示すことは出来ないだろう。

その言葉に、女性は藤村の顔を睨んだ。

藤村も彼女の方を見ている。

そして、どういうわけか、そのままにらみ合って動かなくなった。誰も一言も話さない。

場が凍った。

瞬はなんとなく喋るのもまずいような気がして、祐介の方を見た。その視線に気づいた祐介は、瞬の方を見ると少し表情を崩した。

「誰だ？」

瞬は祐介に小声で聞いた。

祐介も小声で返す。

「女の方は俺のチューターだよ。助手の千葉さん」

チューターというのは、進路や学習について指導をする立場の人の事だ。大学ではよくある制度だが、瞬の高校では、全学生にこのチューターがいる。しかし、大学生には助教授や准教授といったいわゆる先生が配属されるが、高校生にはなりたての若い助手がつく場合も珍しくない。

「男は・・・まあ、同じ寮に住んでるんだよ。一応、理学部の助手らしい」

一応というのが少し気になったが、瞬は別の事を聞いた。「それが、どうしてああなる？」

瞬は睨み合う2人を横目で見る。

祐介も完全には理解していないようだった。

「いや、なんていうか・・・結局、相性が悪いんだろうな」

「知り合いだよな？」

「同級生らしいな。だけど、詳しいことは・・・」

祐介も2人を一瞥する。そして、肩をすくめた。

それ以上情報がないということらしい。祐介は暇さえあれば女子に話しかける習性があるからなのか、学内の人間関係についてかなり詳しい。噂のような物については、全て把握していると言っても過言ではない。その彼が知らないという事は、よほどのトップシークレットな秘密があるのか、それとも、ただ相性が底抜けに悪い同級生というだけなのか、そのどちらかだろう。

しばらく、奇妙な冷戦は続いた。

やがて、藤村が前触れも無く視線を外す。何か興味を無くしたような、つまらなそうな表情だった。

千葉の方はその後もしばらく視線を動かなかったが、こちらも突然、顔を動かして左手の時計を見た。そして、ファイルを両手に持ち直す。何もなかったかのような、きびきびとした動きだった。

どうやら終わったらしい。

瞬にもそれは分かったが、何がどう決着がついたのかは見当もつかなかった。

藤村は壁にもたれかかって、何か考え事を始めたようだった。

そんな白衣の男を完全に無視して、千葉が祐介を見た。

「伊奈君。ずいぶん暇そうだね」

祐介は少し戸惑った様子だった。彼にしては珍しい。女性に話しかけられたら、無条件で笑顔になれるような、そんな男なのだ。

「あ、いや、そんな事ないですよ」

千葉はその言葉も無視して階段を上り始める。

「ちょうど人手が欲しいと思ってたんだ」

「いや・・・千葉さん、前々から言おうと思ってたんですけど」

「何？」

「やっぱり、大学の仕事に高校生を使うっていうのは、まずくないですか？」

「いいじゃない。暇なんだし」

千葉の返事はにべもない。

踊り場にいた藤村を一瞥もしないで、その脇を抜ける。そのまま祐介の近くに立った彼女は、そこで初めて瞬に気づいたらしい。一瞬驚いたようだったが、それでも、表情はあまり変わらなかった。

千葉は、祐介の腕を掴んで言った。

「ちよっと手伝って。すぐ済むから」

「いや、俺、ちよっとこいつの・・・」

祐介が瞬の方を見ると、それを予期していたような早さで、千葉がこう言った。

「借りていくから」

簡潔で事務的な口調だった。もう決定済みというニュアンスが十分に伝わった。

瞬は何か言おうとしたが、その時にはすでに千葉は背を向けていた。そのまま階段を降りていく。

その千葉に引っ張られながら、祐介は言った。

「だから、用事が・・・」

「何？用事って」

そう言いながらも彼女の足は止まらない。

特に用事と言える物がないのは明らかだった。だが、祐介は一応食い下がった。

「用事って言えば、ほら、あれですよ」

「何？」

「その、なんていうか・・・」

「なんていうの？」

「いや、困ったな。ちよっと説明しにくいつていうか」

「なんで？」

「言いにくい事ってあるじゃないですか。あ、ほら。特に女性には」

「いいよ。私、気にしないから」

「気にしないって・・・まあ、そうですね」

「それで？」

「え？ いや・・・」

会話しながらも、階段を進む千葉の足は止まらないから、何か決着がつく頃には、目的地に着いてしまっているだろう。だから、会話自体にはほとんど意味が無いと言える。

そのうち、2人の声は聞こえなくなった。

瞬はそれを確認して藤村を見る。

彼は踊り場の壁にもたれ掛かって、じっとすぐ横の壁を見ていた。何か書いてあるわけではない。考え事をしているようだった。階段を下りていく。瞬には少し聞いてみたい事があった。

「すみません」

なるべく穏やかな口調で丁寧に話しかける。

すぐには反応が無かった。

聞こえなかったのだろうか。瞬がそう思った時、藤村はこちらを向いた。

どこか虚ろだった。

瞬は少し観察して、その違和感の原因に気付く。

彼の瞳はまるで焦点があっていなかった。

何かおかしい。

瞬は自分の身体が緊張しているのを感じた。

カーテンを開けると、西日が柔らかく差し込んでくる。

眼下には少しだけオレンジに染まった家々が立ち並ぶ。もっと遠くには海があるはずだが、ここからではさすがに見えない。だが、これくらい高さの景色の方が好きだと親友が言っていたのを思い出して、詩織は少しだけ微笑んだ。

今、その親友はベッドの上で眠ったままで、それを見ることができない。

詩織は多恵の部屋にいた。

木製のインテリアが多い、暖かみのある洋風の部屋だ。ぬいぐるみのような子供っぽい物はほとんどないが、淡い色が中心の女の子らしい部屋である。そして、最も特徴的なのは、写真と本がかなり多い事だった。詩織の部屋の軽く10倍はあるが、いつ来ても綺麗に整理されている。彼女の性格がよく分かる部屋だった。

その部屋に葉月と渚の2人もいた。

葉月はともかく、渚がいるのには理由があった。彼女が来てみたと言ったからである。

結局、渚はLについて何も教えてくれなかった。だが、詩織は多恵がLを伝言したかったのは彼女じゃないかと、なんとなく思った。渚は何か知っている素振りだったし、どこか不思議な印象を持っているのもある。

だから、迷惑とは知りながらも、なんとなく連れてきてしまった。その2人は思い思いに部屋の中を眺めている。誰も喋らないので部屋の中は静かだった。

詩織はベッドにいる多恵の傍らに座っていた。

なんとなく多恵の寝顔を眺めている。詩織にとって、彼女はこの土地に引っ越してきて出来た初めての友人だった。朝起きる時に血

圧が極端に低い事以外は、特に病気があるわけでもない、普通の女の子である。

それが、急にこんな事になるなんて、想像もしなかった。ずっと一緒にいたのに、詩織は何も気づかなかった。

その事がとにかく悔しい。

気付いたら、詩織は多恵の長い髪に触れていた。

多恵はまるで人形のように、静かに眠っている。

「綺麗ですね」

急に葉月の声がして詩織は少し驚いた。

振り返って見ると、葉月がそこに立っていた。いつものスマイルを30%オフしたような控えめの笑みで、いつも天真爛漫な彼女にしては珍しい表情だった。

「・・・多恵の事？」

「はい。お人形みたいです」

葉月は眠っている多恵を見ながら、そう言った。

何か深い意味があるのだろうかとかと詩織は考えたが、すぐにやめた。恐らく、葉月は見たままの事を言ったただけだろう。自分を氣遣っているのかもしれないと気付いて、詩織は少し反省する。後輩に氣を遣わせるようではいけない。

自分はそんなに暗い顔をしていたのだろうか。

詩織は少し無理矢理だが、笑みを作る。

「こうやって寝てると、本当に人形みたいよね。あ、もちろん、普段も可愛いけど」

そう言うと、葉月もにっこりと微笑んだ。

そのまま、また静かになる。

詩織は多恵の寝顔を見守る。多恵は寝返りが極端に少なくて、寝てる間はほとんど動かない。それが低血圧の一因でもあるらしく、幼い頃はいろいろ対策を試したようだ。だが、結局体質は変わらなかったらしい。眼を瞑ったまま動かない彼女は、長い黒髪もあって、日本人形そのものに見える。

今にも多恵がパチッと目を開けるかもしれない。目を覚ますかもしれない。そんな期待を持ちながら見守ったが、結局今日その瞬間は来なかった。

あまり長居しても悪い。そう思って詩織は立ち上がる。

「そろそろ、帰ろっか」

「はい」

頷いた葉月と詩織は、カーテンを閉めるために窓へと向かう。

その時詩織は気づいた。

「あれ？渚さんは？」

いつの間にか、部屋に彼女の姿はなかった。

詩織は葉月を見る。分からないと顔に書いてあった。

トイレか何かだろうか。そう考えた時、部屋の入り口の扉が開いた。

入ってきたのは、その渚だった。何か考えているのか、2人を一瞥もせずに本棚の前に立ち、真剣な表情でじっと本のタイトルを目で追っている。

詩織と葉月は顔を見合わせた。

何をしているのかは分からないが、遊んでいるわけではなさそうだ。

詩織は聞いてみる事にした。

「渚さん」

渚はすぐに詩織の方を向いた。

「何ですか？」

「何か気づいた事ありました？」

その質問に、渚はまた本棚の方を向いた。

「千村さんって、本が好きなんですか？」

急な質問だったが、詩織はすぐに頷く。

「ええ。それはもう」

「もしかして、毎日読むくらいですか？」

「もちろん。図書館に行くのが、日課みたいな物です」

「え、本当ですか？」

渚が突然振り向いたので、詩織は少しびっくりした。

「え、ええ……」

「ここにある本を読んでるわけじゃないんですか？」

そんな重要な事なのだろうかと思いつつも、詩織は答える。

「部屋にあるのは、特に気に入った本と……あと、有名な本とからしいです。多恵は文学部志望だから、そういう本は手元に置いておきたいからって」

「そう……」

渚は何かに納得した様子だった。

「あの……何か？」

「千村さん、今日も図書館に行くはずだったんですね？」

「え？あ、はい。たぶん……」

「毎日行くて事は、今日返却するはずだった本もあるんですか？」

「それなら、たぶん鞆に」

「見せてもらえませんか？」

詩織は多恵の机まで歩いて行って鞆を開けた。

鞆の中を探すと、すぐに図書館の印がある本が2冊見つかった。どちらもハードカバーで、暗くて少し怖そうな印象の表紙だった。作者の名前から察するに、明らかに洋書だった。

「あ、それ……」

葉月が片方の表紙を見て言った。

詩織はその本を見る。

「知ってるの？」

「はい。すごく怖いらしいですよ」

「じゃあ、これ、ホラー？」

「はい。海外の有名な女性作家の小説だって、読んだ友達が言っていました」

「へえ」

それを知ると、詩織は中を読む気になれなかった。詩織はその手

の話が苦手なのである。

「葉月ちゃんは読んだの？」

そう聞くと、葉月は少し苦笑した。

「その友達が、怖すぎるから読んだらだめって……」

それもなんというか、支離滅裂な話だった。

「でも、いつだったか葉月ちゃん、ホラー映画とか、別に怖くないって言ってなかった？」

「はい。だけど、それでもだめって」

そこまで言われると、何故か少し興味が出てくる。だが、もちろん、ページは開かなかった。

「こっちは、恋愛小説みたいです」

いつの間にか、もう片方を手にとってペラペラとページをめくっていた渚が言った。

「え？ 恋愛小説で、そんな表紙ですか？」

渚の持つ本の表紙は、黒と赤が基調で、あまり明るそうな印象ではない。

「大富豪のお屋敷での純愛って感じみたい」

そんな本も読んでるんだなと思いつながら、詩織は少し多恵に悪い気がしていた。なんとなく心の中を覗いているみたいで、思ったよりも気まずい。

だが、詩織はそこである事に気付いた。

「……もう読んだんですか？」

「流し読みですから」

「いや、それでも……」

そんな早さで読めるのだろうか。詩織なら、まだ数ページがいいところだろう。

渚は詩織の言葉には答えず、本の裏表紙を見ながらこう言った。

「この本も有名な作家の作品みたいです」

「あ、それって……」

葉月が渚の隣からのぞき込む。やがて小さく頷いた。

「やっぱり・・・これって、だいぶ前に映画になった本ですよ」

「そうなの？」

「はい。どこかで聞いた話だと思ったんですよ」

「へえ・・・」

そう言われても、詩織には心当たりが無かった。有名な映画なら詩織にだって分かるはずだが、そんな内容の映画は聞いた事が無い。渚は黙って本を閉じた。

向かいにいる詩織も、隣にいる葉月も彼女を見たが、渚は気付く様子もなく、そのタイトルをじっと見つめている。だが、そこにかあるというのではなく、何か考えて込んでいる様子だ。

詩織と葉月は、また顔を見合わせた。

だが、今度の沈黙は短かった。

「お願いがあります」

不意に渚が詩織の方を見てそう言った。

突然だったので、詩織は少し動揺する。渚の薄い銀の瞳は、まるでガラス細工の様だった。

「な、なんですか？」

動揺が声に出ていたが、渚は構わずにこう言った。

「千村さんが最近読んだ本、全部調べられないですか？」

「え・・・」

詩織は少し考えてから、こう聞き返す。

「全部ですか？」

「はい」

渚は簡潔に言った。

簡単に言うが、多恵が今までにどれくらいの本を読んでいるのか、想像もつかない。あの親友の読書量は伊達ではない。

「・・・最近って、どれくらいですか？」

「二ヶ月くらい。それで事足りると思います」

詩織はその間に多恵が読んだ本の数を想像する。毎日1冊としても、約60冊。それを今から全部特定するのは難しそうだった。

いや・・・

「図書館に行けば、履歴が残ってませんか？」

葉月がそう進言する。詩織もそれに気付いたところだった。

だが、それは多恵のプライベートな情報だろう。一冊知っただけでも少し気まずい思いをしたのだ。出来れば本人に了承を取りたいが、しかしそれは無理な話である。

詩織は渚の瞳を見つめ返して言った。

「それ、多恵が倒れた事と何か関係あるんですね？」

渚の瞳は全く揺らがなかった。

「はっきりとは言えないですけど。でも、たぶん」

詩織は小さく息を吐く。そして心の中で多恵に謝った。

勝手に見てごめん。でも、それで何か手がかりが見つかるなら。

詩織は質問する。

「これからすぐでもいいですか？」

渚は頷く。

それを見て詩織は多恵の鞆を手取る。

またこの中を勝手に・・・

心が痛んだ。

起きて来たら、絶対に謝らないといけない。

だから、必ず起きて来て。

詩織は鞆の中に手を伸ばした。

結局、手伝いというのは、千葉の研究室の雑用だった。

妥当すぎる程妥当で分かり切っていた事ではあったが、実際に千葉の口からそれを聞いた時には、それでもがっかりした。ほんの数%程だが、いつもと違う展開があるかもしれないと期待していたのだ。

だが、やはり千葉は千葉だった。

隙なんて数ミリもない。ただ一言、やっというだけで言っ、自分はずっとどこかに行ってしまった。

何人か部屋に残っていた大学生が憐れむような表情をしていたが、もちろん男ばかりだった。何の慰めにもならない。

祐介が今まで出会った女性の中で、千葉くらい苦手な人物はいなかった。

というより、祐介の中では、果たして千葉が女性の集合に属しているのか疑問に思うことが多かった。理系は女性が少ないから、多少男っぽくなるのは仕方がないのかもしれないが、千葉の場合は少しそれとは趣が違った。特に言葉遣いが男性的というわけではないし、割と綺麗だし、体つきも華奢で十分女性らしい。髪が女性にしては短い、あの程度なら特に珍しいわけではない。

だが男らしい。よくよく考えてみるとこの一言に尽きる。

無口だし、よく働くし、そして、自分の外見を飾ったりしない。これだけ言うと、本当に男みたいだと祐介は思った。それも、結構いい男というやつだった。実際、千葉は、男はともかく女子には割と人気があった。工学部の女子は少ないからその人気は限定的だが、何度か女の子の間で話題にされているのを聞いたことがある。

そして、そういうタイプの女子の大半は、祐介に対してあまりいい印象を持っていない。

それも少し面白くない。

そこまで考えて、祐介は大きく息を吐いた。

そんな事、どうでもいいか。

祐介は疲れていた。

その雑用というのが資料を冊子にするだけという単純作業で、面白くないだけならまだしも、精神的に疲れる作業だった。そうではなくても、今日は小テストがあったり、教室移動でやたら歩かされたり、おまけに変な事件に巻き込まれて事情を説明しないといけなかったり、とにかく、ただでさえ疲労が溜まっていたのだ。もう夕方、空腹でもあったが、何も食べなくても寝られそうな程だった。

とにかく、これで終わった。

後は帰るだけだというのが、今日はとてもありがたい。

帰ったらとにかく寝たい。今日はまだ、あの偏屈な同居人は帰っていないかもしれない。もしそうなら、願ってもみない最高の条件だと言える。あの人物がいるだけで、夜中変な物音がしたり、誰かやって来て揉め事が起きたり、とにかく周囲の不快指数が上昇する。出来ることなら、留学でも放浪でも何でもいいから、どこか余所に行って欲しいと、祐介は常々思っていた。

いつの間にか、西門が見えてくる。

そこを抜けても、まだ寮までかなり歩かなければならない。そう思うと少しうんざりした。

それでも仕方ない。そう思った時だった。

西門から校内に入ってくる女子の団が目にとまった。

というより、彼女達は注目の的だった。西門付近にいる人間は、皆彼女達を見ている。それもそのはずで、否応無く見てしまうような個性的な容姿をしていたからだった。

まず、そのうちの1人は瞬の妹の葉月だった。夕日を浴びた彼女の髪は、黒髪の縁にワインで線を引いたみたいに紅く光っている。特殊な遺伝子の産物だというその髪色は、世界でも数人しか例がないという代物で、日本ではもちろん彼女だけだった。魅力的な容姿

と明るい性格も彼女の人気の一因だが、時に必要以上の注目を浴びるのは、その髪に依るところが大きい。

だが、それ以上に目立つのが、一緒にいる銀髪の女の子だった。高い位置で纏めてあるその髪は、見事に真っ直ぐでさらさらで綺麗な銀色だった。葉月の髪もちろんだが、彼女くらい見事な髪も相当に珍しいだろう。

もう1人いるのは、祐介と同級生の義江詩織のようだ。祐介はもちろん、彼女とも何度か話した事がある。ややとつきにくいところもあるが、運動が得意で、凛々しくてサバサバしているところが好印象な女子である。

彼女は周囲の視線が気になって仕方がないようだった。なんとか他の2人を急かして、早くこの場を通り抜けようとしているようだが、はつきり言ってあまり意味がないだろう。彼女たちより目立つ生物は、半径20キロ以内には恐らく存在しない。どこへ行ったとしても、じろじろ見られるのは必至だった。

その3人は、そそくさと建物の裏へと消えていった。

ふと、祐介は、さっきの銀髪の少女が昨日会った子だと気づいた。昨日は私服だったから、だいぶ雰囲気違ったが、あの綺麗な髪はおそらく間違いない。今更気付くなんてどうかしてとも思ったが、既に脳が半分くらいフライングして眠ってしまっているのだろう。

残った半分の脳から、不意に瞬の顔が想起される。

何の前触れもなく頭に浮かんだので、祐介は少し戸惑った。どうしてなのか考えようとしたのだが、やはり半分では上手くいきそうにもないので諦めた。

とにかく帰って寝よう。

瞬とは理学部棟で別れて、それっきりである。恐らく、彼も既に帰っただろう。

「祐介」

いきなり背後から声をかけられて、祐介は驚いた。だが、その驚きもすぐに減衰する。脳が半分だと、驚きも半分しか続かないよう

だ。

祐介は腰の悪い老人みたいにゆっくりと振り返る。

「お、瞬か。まだ帰ってなかったんだな」

自分でも分かるくらい軽い挨拶だった。正直、喋るのも億劫だったのである。

だが、瞬の方は何故か真剣な様子だった。

「お前、いつからここにいる？」

意味の分からない質問だったが、その意味を推測する程の余力がなかった。

「なんだ？いきなり。やっと解放されて、これから帰るんだよ」

「誰かこっちに来なかったか？」

「何言ってるんだ？」祐介はつい笑ってしまった。「そりゃ、大勢来たに決まってるだろ。もう下校時刻なんだから」

「そうじゃなくて、少し変わった奴だ」

瞬は食い下がってくる。

彼にしては珍しいなと思いつつも、祐介は気にせず答えた。

「変わった奴ってお前よりも？」

「比較できないと思う」

「じゃあ、見た目とかじゃなくて、性格とか精神的な意味か？」

「説明しにくいけど……とにかく変わった奴だと思う。もしかすると危ない奴かもしれない」

見ただけで分かるような、危ない人間はいなかったはずだ。

「見なかったと思うけどな。もっと具体的なのは？」

「恐らく、男だ」

「恐らくって、なんだよ」

「見たわけじゃない」

「なんで、見てないのに分かる？」

「証言がある」

「証言？あ、さっきのあれ、まだ調べてたのか？」

瞬は何も答えなかった。それがどういう意味なのか、祐介は考え

ようとしたが、変な熱を持ってきた頭は、働きすぎたコンピュータみたいに動作が遅かった。

「あ・・・悪い。今ちよつと疲れてるんだよ」

「そうか。呼び止めて悪かった」

瞬の声と表情は普段と変わらない。その言葉が本心なのか、見た目からは分からないが、瞬が社交辞令を使わないのは、祐介もよく知っている。

「変な男だっけ？ 心当たりないな。そもそも、男は検索の対象外なんだよ」

「そうだな。そうかもしれない思っていた」

「あ、そう」瞬がそういう皮肉を言うのは珍しい。「もしかして、サービスのつもりか？」

「たまには、口が滑る事もある」

これも瞬にしては珍しい無駄口だった。そんな事を言うくらいなら黙っている男なのだ。だが、にこりもしないので、サービスとしては中途半端だった。

祐介は軽く左手を振った。

「まあ、いいけどな。じゃあ、またな」

「ああ」

瞬は軽く頷くと、周囲を見てから、また校内の方へと戻っていく。祐介はそんな瞬の背中を、なんとなく眺める。

瞬ははつきり答えなかったが、さっき遭遇した事件の事を調べているようだ。物好きだなとも思ったが、昔から瞬は妙なところにくだわるといふか、頑固なところがある。

基本的に瞬はドライな人間だった。現実的というか、夢のあるような事は絶対に言わない。今だって、自分1人が調べたところで何か出来るわけがないと、間違いなくそう理解しているはずだった。何かしてあげたいが、何も出来ないから仕方ないな。そういう台詞をいかにも言いそうな男なのだ。

それなのに、たまにああやって、無駄だと知りながらも労力を費

やす事がある。

一体あいつは何を考えているのか。
まあでも、分からないでもない。長い付き合いだから、少しくらいは理解してやれているはずだった。

ただ、仮に自分が理解できているとしても、変わり者なのは間違いない。

それでも、家族や友達を大事にする優しい人間だから、何も問題はない。

大事にし過ぎるのが少し困り物なのだが。

そこで、祐介は気づいた。

「瞬！」

距離があつたが、瞬の耳まで届いたらしく、彼は振り返った。
走るような元気はないので、祐介は歩いて近づく。それに気づくと向こうも近づいてきた。

立ち止まってから、祐介は言った。

「そういえば、さっき葉月ちゃんが来てたんだけどな。一緒に……」

「

「葉月？」瞬は祐介の話を遮って言った。「どこに行った？」

その反応が祐介には意外だった。

「え？ いや、どこに行ったかは……」

「どこにいた？」

「確か、向こうの……」

祐介が指さすと、瞬はもうそちらへ体を向けていた。

「あ、おい！話を……」

瞬は何も答えず、もの凄い勢いで走って行く。

その姿は、あつという間に建物の影に消えた。

残ったのは、どこかの銅像の物真似でもしているかのように、あさつての方角を指し示している、間の抜けた格好の祐介だけだった。

「……最後まで聞けよ。まったく」

そう言いながら、腕を下ろす。

そういうところが過保護なんだよ。心の中でそう付け加えた。

それにしても、瞬の振る舞いは過剰反応だった気がする。まるで刑事ドラマみたいな反応だった。いつもは嫌というくらい落ち着いているので、尚更珍しい。

ひょっとして、本当に何か危険があるのだろうか。

そう考えると心配にもなる。しかし、具体的にどういう状況が想定出来るのか考えようとしても、祐介の頭はその大部分が既にスリープモードだった。

とにかく早く帰ろう。

祐介は西門へと重い一步を踏み出した。

詩織の高校には校舎がない。だから当然、図書室という物もない。そのため、何か本を借りるときは、大学の図書館を利用するのが普通だった。高校の学生証があれば、それを使って入口のセキュリティを通る事が出来るように登録されている。大学内のどの図書館でも入れるのだが、高校生の多くは西門近くの建物を利用していた。理由は単純で、そこが一番近くて便利だからである。大学生は学部によって利用する建物は様々だし、それぞれ生活範囲も異なるが、詩織達高校生の授業は、大部分がこの付近の建物で行われる。従って、高校生が図書館と言う場合、普通はこの建物の事だった。

もう高校は下校時刻だからなのか、図書館内は閑散としていた。それを確認したとき、正直詩織は助かったと思った。ここに来るまでに嫌と言うほど注目を浴びたので、ここで騒ぎになったらどうしようと思っていたのである。エントランスには数人いたし、受付の人にも少しは驚かれたが、他ははつきり言ってもぬけの殻という状況だったので、ある意味では幸運だったと言える。

もっとも、その注目の原因である2人は道中楽しそうに世間話をしていた。心臓が特注品なのか、或いはもう慣れてしまっているという事なのか、人目を気にする素振りは全く無い。それでも、慣れない詩織はどうしようもなく気になったので、勝手に気苦労が溜まっていた。

そんな2人も、今は静かである。

図書館内に数カ所設置してあるコンピューター端末。これを利用することで、蔵書に関するデータベースを検索したり、自分が借りた本の履歴を確認したりする事が出来る。

詩織たちがここにやってきたのは、この端末を使って、多恵が借りた本を調べる為である。その為には多恵の学生証が必要だったが、

それは多恵の鞆から勝手に拝借していた。本人の為とはいえ、ちゃんと了承を得たわけではなかったし、誰かに見咎められたら困るので、わざわざ2階までやってきたのだ。1階だと帰る人たちに見られる可能性も高いが、ここならそういう可能性は低い。

ディスプレイに表示される多恵の貸し出し履歴を、新しい日付から順に確認していく。といっても、詩織と葉月には何の本を探しているのか分らないので、確認しているのはもっぱら渚である。ただ、有名な本は除外出来るというのは聞いたので、少なからず本を読んでいる葉月は助言をする事が出来た。逆に詩織はほとんど役には立てないので、もっぱら端末の操作係である。

「・・・ここにもないみたい」

そう渚が呟いたので、詩織は画面に触れて、次の履歴を呼び出す。この端末はすべてタッチパネルだった。

しばらく待つと、また本の名前がずらっと表示される。本の虫というのは伊達ではなく、本当に毎日読んでいるらしい。それも、毎日数冊ずつ読んでいるようだった。少なくとも、毎日数冊ずつ借りて返しているのは履歴に書いてある。これまでに、かなりの本の名前を確認したが、日付はやつと先月になったところだった。

「・・・本好きにも程があるでしょ」

詩織は半ば呆れながら言った。

葉月も画面を見つめながら同意する。

「すごい量ですよね」

「確かにすごいけど・・・でも、ちょっと行き過ぎじゃない？」

「そうですか？」

「だって、どうやってたら毎日こんなに読めるの？何時間もかかるんじゃない？」

葉月は少し視線をあげて考えてから、口を開く。

「よく考えたら、そうですね。あ、でも、絵本とかも結構ありますよ」

少し意外だった。

「そうなの？」

「はい。他には、写真集とかも」

「写真集？え、まさか、アイドルとかの？」

「いえ、風景写真みたいです。先輩の部屋にも結構あったじゃないですか」

確かにそうだった。多恵が写真好きなのは知っているが、まさか、わざわざ借りてまでプロの写真を見ているとは思わなかった。

もしかして、そういう仕事を目指しているのだろうか。

ふと気付くと葉月がこちらの顔を見ている。急に黙ったので気になったようだった。

「・・・よく見てるのね。探偵みたい」

詩織がそう言うのと、何故か葉月は嬉しそうだった。

「え、そうですか？」

声が弾んでいる。この後輩も何を目指しているのかよく分からない。

葉月が不意にこう聞いた。

「千村先輩って写真家になりたいんですか？」

「え・・・」

葉月の質問に詩織は答えられなかった。

将来の事について多恵と話す事もあったが、彼女は言葉を濁す事が多い。とりあえず、大学の文学部志望というのは決まっているが、その先についてははっきりしない。詩織の印象では、多恵は器用だし感受性もあるから、それこそ写真家でも小説家でも、なんだってなれそうな気がする。だが、そう本人に言うともんざらではなさそうなの、謙遜してなのか、自分には無理だと答えるのが常だった。

こういう時、詩織は多恵との付き合いの短さを痛感する。今現在、最も付き合いの深い友人とはいえ、まだ1年程の関係だった。だから、お互いに知らない事も多い。もし幼なじみだったとしたら、聞かなくても将来の事くらい分かるのだろうか。両親が転勤族の詩織

には、長く一緒にいる友達がいないので、その辺りの事が実感として無かった。

詩織は急に聞いてみたくなった事を口に出した。

「葉月ちゃんは、将来の夢とかあるの？」

「私ですか？」

「そう。葉月ちゃんなら、なんだってなれるんじゃない？」

それはお世辞ではなく本当の印象だった。この後輩なら、歌手でも検察官でも、宇宙飛行士にだってなれそうな気がする。マフィアのボスになると言い出したら、なっていそうなのが怖いところだったが。

葉月は当たり前といった顔で言った。

「詩織先輩だってなれるじゃないですか」

「私？」 詩織は思わず聞き返す。「私は・・・ちょっと才能がね。なれない物の方が多いと思うけど」

「そうですか？」 葉月は首を傾げる。

それもそうかと詩織は思った。この後輩には不可能という言葉はないのだろう。

「そう。例えば、それこそ写真家とか、今から目指しても無理だと思う」

「詩織先輩も写真が好きなんですか？」

「ううん。だから例えばの話」

そこで詩織はちよつと驚いた。

葉月が急に微笑んだからだだった。いつもの無邪気な笑顔とは違う、どこか優しい表情。多恵の部屋で見たあの表情だった。

どこことなく、渚の大人っぽさに通じるものがあつた。

葉月はゆっくり首を横に振って、それから口を開いた。

「それは私も無理です」

「え？」

「なりたいたくはないとなれないです。そう思えないと、毎日頑張ろうって思えないですから。詩織先輩だってそうじゃないですか？」

部活の朝練に毎日出てるんですよ？」

「まあ、運動は好きだから・・・でも、それでプロになるのは無理よ？」

「それは無理かもしれないですよ？」

「え？」

「だって、他の人に認めてもらえるかは分からないじゃないですか。でも、私はなりたいたいものになれると思うんです」

よく理解できなかった。

葉月は話を続ける。

「なりたいたいと思ったら、ちよつとずつ近づいていけばいいと思うんです。私はそういうのが好きっていうか・・・毎日少しずつ目標に近づいていくのは嬉しいじゃないですか。どんどん理想の自分に近づいていくんですから」

葉月はそこでまた小さく頷いた。

「もし私が写真家になりたいと思ったら、それはきつと写真が好きだからですよ？　だったら、最初は下手で認められなくても、他の仕事をしながらでもちよつとずつ写真を撮っていつて、勉強して、だんだん上手になっていくのが嬉しいと思うんです。理想の写真が撮れる自分に近づいていくんですから。世間では有名な写真家じゃないのかもしれないですけど、肩書きとしては残らないかもしれないんですけど、でも、私だったら、きつとそうすると思います」

「へえ・・・」

詩織は素直に感心した。

この後輩はなんでも出来るという印象があるから、きつと才能の固まりみたいな女の子なんだだと思っていた。いや、実際に才能には恵まれているのは確かだろう。だが、案外地道な考え方をしているというのが分かっただけでも、詩織には結構な収穫だった。

葉月はそこでまた微笑んだ。今度はいつもの太陽みたいな笑みだ。

「でも、これ全部受け売りなんです」

「受け売りって、誰の？」

「兄ですよ。結構前ですけど」

詩織はすぐには理解できなかった。全くの予想外というか、信じられなかったのだ。

兄。

何度考えても、葉月の兄は1人しかいないはずだった。

だけど、あいつが・・・？

突然固まった詩織を、葉月が困ったように見ている。

「あの・・・」

葉月の声に詩織は我に返った。

「どうかしました？」

「ううん・・・というか、葉月ちゃん」

「はい？」

詩織はその先を何も考えてなかった。ふと思いついた事をそのまま口にする。

「結局・・・将来はどんな職業に就きたいとか、そういうのはないの？」

「職業ですか？」

葉月はやや目線を上げて考える。しばらくしてから、思いついたように言った。

「保育士・・・ですかね」

思ったよりも控えめな選択だった。

「あ、それか調理師とか」

「・・・どういう基準？」

少なくともその2つにはあまり共通点がなさそうだった。

「私の家で保育所やってるんです」

「え、そうなの？」

「はい。それで手伝えたらいいなって。今でも遊びの相手くらいは出来るんですけど、ちゃんと手伝おうと思ったら資格がいるので。

お母さんは家の事は気にしなくてもいいって言うんですけど、でも、最近保育所の数が少ないってよく言うじゃないですか。だから、せ

つかく場所があるから、出来たら続けたいなって。人を雇ってもいいんですけど、そこまでお金に余裕が・・・」

葉月の話はほとんどが家庭内事情というか、とにかくかなりスケールの狭い話だった。

聞いてみるものだと、詩織は意味もなく頷いた。今の話といい、その前の話といい、普段の彼女からは想像もつかないくらい地の味な話である。思うままにどこまでも飛んでいけそうな女の子だとずっと思っていたが、思いの外、地に足が着いているようだ。そして、不思議な事に、それが全然嫌ではない。すごく新鮮で、むしろ彼女が前よりも魅力的に見えた。

その時、詩織達の背後から女性の声がした。

「あれ、詩織さん？」

その声に詩織は聞き覚えがあった。

少し高音でよく通る女性らしい声、というだけではない。上品というか柔らかいというか、しっかりとした口調の中にも温かさを感じるようなそんな声。

初めて会って話した瞬間から、詩織は彼女のその声と話し方に惹かれた。詩織のような高校生には出来ない、大人の女性の話し方だったからである。多恵に聞いても同じ意見だったし、他の女子も概ね同じだった。目標にしたいくなるようなそんな声なのだ。

詩織は振り返る。葉月も同時に後ろを見た。

そこにいたのは、若いながらも落ち着いた印象の女性だった。

緩くウェーブした長い髪を、今日は後ろで留めている。黒いスーツにハイヒール、化粧もばっちり決まっっていて、完全なビジネスファッションだ。だが、それでも少し温和な雰囲気のが滲み出ている、キャリアウーマンというよりは、教育実習に来た先生見習いみたいな印象だった。

彼女の名前は、橘美咲。

この大学の文学部助手であり、そして千村多恵の指導員だった。

「お友達？」

美咲は葉月と渚を見ながら言った。

詩織は椅子から立ち上がる。

「はい。えっと・・・」

2人に目配せしたが、渚は画面に見入ったまま、気付いた様子はないかった。

葉月は立ち上がって丁寧にお辞儀する。親の教育の賜物なのか、彼女は普段から礼儀正しい。

「はじめまして。荒瀬葉月です」

「はじめまして。橘です」

こんな挨拶を返されるとは思わなかったのか、美咲はやや苦笑しながらも挨拶を返す。

渚はどうしようかと思ったが、詩織の様子で察してくれたのか、美咲が構わず質問した。

「詩織さん、千村さんの事知ってる？倒れたって聞いたんだけど・・・」

それを聞くだけで詩織は少し気分が沈んだが、表情には出さなかった。

「はい、まあ・・・橘先輩も聞いたんですか？」

「もちろん。私、チューターだから連絡が来たの。でも、今日は遠出してたから、ちょっと前にやっと帰って来たところの。だから、ずっと心配で・・・何か知ってる？」

少し周囲が気になった。詩織は軽く辺りを見渡したが、誰もいないようだ。

「なんていうか・・・検査とかもしたんですけど、医者は特に異常はないって」

「え、そうなの？」美咲は右手を口に当てる。「それって、最近よく聞く話と同じって事？」

詩織は黙って頷く。

「そう・・・」

美咲は少し暗い顔になる。多恵の指導をしているのだから、当然だろう。チューターは基本的に進級しただけでは変わらないから、多恵と美咲の関係はもう1年を越えている事になる。

しばらく考えるようにしてから、美咲が言った。

「詩織さん、これからお見舞いに行くの？もしそうなら、私も行くから、車に乗せていってあげるけど」

「いえ、もう行ってきました」詩織は少し微笑む。

「そうなの？じゃあ、千村さんのマンションまで行って、また戻ってきたの？」

美咲は鋭かった。

やや後ろめたいところがある詩織は、少し動揺した。

「その、ちょっとした用事があって・・・」

「用事？そういえば、何か本でも探してるの？」

美咲は、端末のディスプレイとにらめっこしている渚を見る。

詩織は説明に困った。ここに来た経緯を話す事は簡単だが、きつと美咲には理解されないだろう。多恵の読んだ本に何か秘密があるというのは、今のところ何の根拠もない。結局のところ、詩織が渚をなんとか信じたからという理由だけでここに来ていた。説明したところで、その場になかった人間には伝わらないだろうから、逆に何か疑われてしまいそうでもある。

そうやって詩織が答えあぐねていると、美咲は少し首を傾げてから、黙って詩織の横に立ってディスプレイに注目した。

渚はそれに気づく様子もなく、微動だにしない。

美咲はしばらく画面をみつめてから聞いた。

「千村さんの貸し出し履歴？千村さんに何か頼まれてたの？」

黙っているわけにもいかないし、仕方ないかと思って詩織は答え

る。

「なんていうか・・・変な本があるんじゃないかって」

「変な本？」

「たぶんですけど」

詩織は渚を見る。

「たぶんって・・・」 美咲もつられて渚を見る。「変な本って、具体的にどんな本？」

「その、私には・・・」

詩織は困り果てて苦笑した。よくよく考えると、詩織はほとんど何も知らなかった。

そこで葉月が助け船を出す。

「無名の作家の本らしいです」

美咲は画面に視線を戻す。

「無名・・・それなら、そんなに多くなさそうね」

「そうなんですか？」 詩織が聞く。

「ええ。外国の本は有名作家ばかりだもの。だから、日本の作家だけ・・・あら」

美咲の視線が、画面の下の方で止まった。

「あの、何か？」 詩織は少し待ってから聞いた。

「いえ、こんな作家いたかしらって思って・・・ちょっと待ってね」

美咲がディスプレイに手を伸ばして、何度か画面をタッチする。

画面が切り替わって、渚はようやく現実に戻ってきたらしい。やや目を見開いて後ろを振り返った。

「ちょっとだけ、ごめんね」

美咲が優しく言った。

渚はその微笑みを見て呆気にとられた顔をした。数秒後、説明を求めるように詩織と葉月を見る。どう説明しようか迷ったが、そうこうしている間には、美咲は目標の情報を見つけていた。

「あ、やっぱり」 何かに納得したような美咲の声だった。

「どうしたんですか？」 詩織が聞く。

「こんな作家、聞いたことなかったから、ちょっと調べてみたの。やっぱり、新人作家みたいね。まだデビューして2ヶ月程ですって」2ヶ月という言葉に詩織は反応する。渚は確か2ヶ月くらい遡れば事足りると言っていたのだ。

詩織はディスプレイを覗いた。渚と葉月も画面を見つめる。

そこに表示されていたのは、エクセル・ハントという海外作家の情報だった。正直、変わった名前だなと詩織は思ったが、ペンネームなのだろう。

プロフィールには、ただ小説家・翻訳家と書いてあるだけで、年齢も性別も国籍も何も書いていなかった。秘密主義なのだろうか？詩織は思ったが、もしかしたら、まだマイナー過ぎて情報がないだけかもしれない。

そして、作品リストも、デビュー作が載っているだけの寂しい物だった。作品名の横には、少しでも作品の詳細欄があったが、種別もジャンルの欄も全て空白だった。

その作品の名前の欄には、無名の救済、と書いてあった。

一体どんな本なのか、詩織には想像も出来ない。そして、読もうという気には絶対ならないだろうと思った。こんなタイトルの本が面白いわけがない。こういう本を読む人間の気が知れなかった。

だが、よくよく考えてみると、多恵もこの本を読んでいたのだ。そう考えると、驚きを通り越して少し呆れる。きっと趣味ではなく勉強の為に読んだのだろうと思ったが、それならそれで、一体どういう勉強になるのか見当もつかない。

だが、今大事なのは、これが渚の探す本なのかという事だ。

詩織が見てみると、渚は画面を見たまま再び固まっている。

「とりあえず、変な本だとは思うけど」美咲がそう言った。

「それは私にも分かります」詩織は何度か頷く。

「そうじゃなくて」美咲は苦笑しながら言った。「確かによく分からないタイトルだけど。でも変な本だって言ったのは、データベースに分類できてないから」

「分類ですか？」

美咲は軽く頷く。

「このデータベース、ちゃんと職員が内容を読んでから登録してるの。一冊ずつ、流し読みだけだね。それで登録だけしてあって分類出来てないって事は、この職員が読んでも意味の分からない本だったって事だから。相当奇抜な本だった事は確かだと思う」

「奇抜な本って、例えばどんな本ですか？」詩織には想像できない。

「さあ・・・一応ノンジャンルってジャンルがあるから、そこにも入れなかったって事は、もしかしたら、そもそも本じゃなかったのかしら」

「え・・・」

余計分らない説明だった。

本じゃない本。そんななぞみたいなお本があるだろうか。

詩織が混乱しているのが傍目にも分かったのか、美咲が微笑んで言った。

「登録ミスとかそういう場合もあると思う。気にしても仕方ないわ」

「はあ・・・」

詩織は生返事を返す。気を取り直して、渚を見た。

その渚はまだ画面を見つめたままだ。その横顔は白人ほど色白ではないが、見ていると引き込まれそうなくらい綺麗だった。睫毛が長く、瞳も透けるようである。今更ながら、じっと見つめていると相当な美人だと実感出来る。

その時、彼女の口元が綻んだ。

詩織の背筋が凍る。

同じだ。

あの探偵事務所の一室で見た笑みと同じだった。普段の優しさの裏にある物が漏れ出てきたような、そんなほんの一瞬の顕れ。だが、それでも十分すぎるくらいの印象を残す程の暗い物。彼女が普段隠している裏の顔なのではないかと思うと、詩織はぞっとする。美人なだけに、その怖さも一層増していた。

しかし、次の瞬間には、渚は普段通りの表情に戻っていた。

それでも、詩織の心臓はまだ少し鼓動が大きくて、そして速かった。心臓に悪いとはまさにこの事だった。

「この本、ここにありますか？」

渚が後方を見渡しながら聞く。彼女が見ているのは、主に美咲だった。どうやら、彼女をこの職員だと思っているらしい。

「まず、その貸し出し状況ってところを・・・」

美咲がそう言いながらも、手を伸ばして、自分で画面を操作し始めた。

「その本が、探してる本なんですか？」葉月が渚に聞く。

「きつとね」渚が少し微笑んで頷く。この2人はあっという間に親しくなっていた。

「あ、ないわね」美咲が手を止めて言った。「貸し出し中だって」

「誰が借りてるか、分かりませんか？」すかさず渚が聞く。

「それは、個人情報だから・・・」美咲が困ったような顔で言った。

「調べようと思ったら、調べられるんですか？」

渚の遠慮ない物言いにやや気圧されるようにしながらも、美咲は動じない。

「ここの職員ならね。でも、それは図書館の業務に必要な時だけで、正当な理由もなく勝手に見られる情報じゃないから」

「あの、橘先輩」詩織がそこで会話に割り込む。「調べてもらえますか？」

「だから、それは・・・」

「私も詳しい事情は知りません。でも、多恵が倒れた事と何か関係あるらしいんです。それで、私・・・」

「あのね、詩織さん」美咲が戒めるように言った。「貴女本人がよく知らない事に、他の人を巻き込んでしまってもいいの？もし間違った事だったら、取り返しのつかない事にならない？」

詩織は黙った。美咲の言う通りだったからである。

「それに、その本一冊がそんなに重要な事なの？多少変わってるとしても、本は本でしょう？」

そう言われると詩織は何も言えなかった。

美咲と詩織は顔見知りだから、ひよっとすると詩織を信じて協力してくれるかもしれない。だが、美咲が仕事を頼む図書館の職員はどうか。その人にしてみれば、他人の貸し出し履歴を勝手に教えるのは業務違反だろう。そんな事が公になったら、何か処罰されてもおかしくはない。

ここまでだろうか。

詩織はふとそう思った。

それも仕方がないとも思う。何も得られなかったのは悔しいが、美咲の言い分は正しい。

だが、多恵の事を思うと簡単には諦められなかった。

詩織は渚を見る。

その視線を渚の透き通った瞳が受け止める。詩織の言わんとする事くらいは、彼女なら十分理解しているはずだった。

事情を知っているのは彼女だけ。つまり、赤の他人を説得出来るかどうかは彼女にかかっている。彼女が事情を説明してくれるなら、この職員の人も協力してくれるかもしれない。

渚が話してくれるならもっと調べたい。だけど、それが駄目なら諦めよう。

詩織はそういう心境で渚を見つめる。

渚は黙っている。葉月も美咲も誰も喋らない。

途端に静かになる。図書館内には、他に誰もいないように思えた。

詩織はそのまま待った。

やがて静寂を破ったのは、涼やかな声だった。

「Lは・・・」

渚の声が静寂の図書館に伝わる。

L。

多恵の残した言葉だ。

やっと聞ける。

詩織がそう思った時だった。

唯一人椅子に座っていた渚が突然立ち上がった。渚は真剣な目をしている。

その視線は向かい合っている詩織のもつと向こう側。

渚を見ていた他の3人は、それに気づいてそれぞれ背後を振り返った。

両脇に本棚のある通路の先。

丁度通路が十字に交差するその場所にいつの間にか男が立っていた。

一目大学生という印象の男性だった。黒い長袖のインナーに白地のシャツを重ねていて、下は同じ色のズボンを履いている。さっぱりとした男性らしい髪型で体つきもやや逞しいが、他には特徴もない、テニスサークルにでもいそうな普通の大学生に見えた。

だが、彼の右手に握られている物は明らかに普通ではなかった。

細長い棒状の物で、金属なのか鉱物なのか、それとも木なのか、詩織にはわからないが、黒光りする材質で出来ている。それも、よく見るとただの棒というわけではなく、文字なのか絵なのかよくわからないが、細かい装飾が彫られていて、安物には見えない。

そして、その先端には乳白色の鉱石のような物が、細長いダイヤモンドに象られて取り付けられている。それはかなり細長くて、そして薄い。簡単に言えば、触れれば刺さりそうなくらい鋭利に見えた。

一般名詞で呼ぶなら、それは恐らく槍だった。

詩織の目はしばらくその槍に釘付けになる。詩織が知っている槍と言えば、陸上の槍投げに使う物くらいだったが、それとは比べものにならないくらい長くてそして重そうだった。

もちろん、普通の人を持ち歩くような物ではない。図書館で必要な物でもない。それなのに、なんでそんな物をこの男は持っているのか。何をしようというのか。第一、このエントランスで呼び止められなかったのだろうか。詩織の頭の中で、疑問が次々と現れて

は消えた。

詩織はなんとか頭の中を整理する。

槍を持つ男性は口元が少し緩んでいたが、目は笑っていなかった。それに気付いて、詩織はまず気持ち悪いと思ったが、少し怖いと思った。

そこでふと気付く。

その男は詩織の方を見ているが、詩織とは視線が合っていない。つまり、彼の視線は詩織の後ろにいる人物に注がれているのだ。

そこにいるのは渚だった。

それに気づいた途端、不思議な事に、詩織は急に体が熱くなるのを感じた。

どんな男なのかは知らないが、変な真似をしたら容赦しない。

この4人の中で、一番腕が立つのはおそらく自分だと詩織は思った。葉月は運動神経抜群ではあるが自分より小柄だし、他の2人は運動が出来そうには見えない。何より、普通の女性は喧嘩なんかした事はないだろう。何を隠そう、詩織は何度か場数を踏んだ事があった。

詩織は身構えた。

その時だった。

「何かご用？」

急に後ろから声がして、詩織は本当に心臓が飛び出るかと思った。すんでのところで声は出さなかったが、上がっていた体温が冷めてしまった。

声の主は渚だ。

そう言うなり、後ろにいた渚は詩織と葉月の間を抜けて前に出た。あまりに落ち着いていたので、止めるタイミングが無かった。

「それより、どちら様？」

前に出た渚が聞く。相手の方が年上に見えたが、そこを気遣う様子は無い。詩織には、いつもよりも高圧的にすら思えた。

渚の後ろ姿は虚勢を張っている様には見えない。落ち着き払って

いて、むしろ余裕が感じられるほどだった。

男はしばらくして、こう言った。

「サイトA」

詩織は息を飲んだ。

いつ口が動いたのか分からなかったし、やや聞き取りにくかったが、確かにそう言った。

質問に答えたのだろうか。

前にいる渚は何の反応も示さない。

だが、その時にまた突然声が聞こえた。

「あ」

声の主は葉月だった。何か忘れ物に気付いた時のような声で、見事なくらい緊張感が無い。

詩織は葉月の方を向く。渚も男も視線を動かさなかった。美咲の顔は詩織からは見えない。

さすがと言うべきか、葉月は全くの普段通りに見えた。

「何？」

詩織の質問に、葉月はこちらを向かずに答えた。

「いえ、向こうに・・・」

その言葉に、詩織も葉月の視線の先を見てみる。

葉月が向いているのは渚と同じ方向、つまり、男の方だった。向こうと言うからにはもっと向こう側だろうと思い、その通路の奥に視線を移す。

詩織もすぐに気付いた。

男の肩越し、通路のもっと奥にもう1人男が見える。

詩織はその男に見覚えがあった。

だが、それも一瞬の事だった。

「え？」

葉月のその声より僅かに早く、その異変は起こった。

詩織には、一瞬何が起こったのか分からなかった。自分の目を本気で疑ったのは、これが初めてかもしれない。すぐに状況を理解す

るように努めたが、あまり功を奏さなかった。

黒い槍を持った男と、その後ろにいた男。

2人の姿が今は無い。

消えたのだ。

詩織達の目の前で。

まるで神隠しにあったように。

消えてしまった。

詩織は信じられなかった。何かの間違いに違いないと思った。

だが、時間が経つにつれ、どうやら本当らしいという確信が、徐々に身体の隅々にまで浸透していく。

そして、身体の奥まで染み渡った時。

どうしようもなく怖かった。

人が消えてしまったのだ。何の前触れもなく、突然。

ふと、そういう怪談話があったのを思い出す。

いや、思い出してしまったのだ。

詩織は必至にその先を考えるのをやめようとする。だが、そんな事は無理だった。一度思いついてしまったら、忘れられない。それどころか、勝手に考えてしまうのだ。どういうタイトルの

話だったかなんて、聞きたくもない事を勝手に思い出そうとする。

そして、思い出してしまふのだ。

人喰い図書館に飲み込まれた人は決して帰ってこない。

その文章が頭を流れる。

詩織の背筋は冷たくなった。

L

真っ白だ。その言葉が頭に浮かんですぐに、変な言葉だと思った。

それは目の前の少女が着ている物の事でもある。持っている物の事でもある。そして、背負っている物の事でもある。その全てが白い。それが彼女の正装だから仕方ないが、こんな服が正装だったら、きっと似合わない人も多いだろう。もしかしたら、似合うか否かも採用条件なのかもしれない。いや、きっとそうに違いなかった。目の前の彼女は似合い過ぎている。

純白の少女はまさに清廉を連想させる。だから皆、彼女がその職に就くのを認めたのだろう。

そう、純白はいい言葉だ。だが、真っ白というのはよく分からない言葉だった。

「以上です」少女の声が聞こえる。

「ご苦労様」軽く微笑む。考え事をしながらだったが、全て聞いていた。それくらい出来ないければ、この地位には就けない。

「それと、これは噂でしかないのですが・・・」

「聞いておこう」

「その・・・神隠しと言いますか、突然人が消えるのを見たという人がいます」

「へえ」分からない話でもない。「それはどれくらいいるの？」

「それほど多くはいません。ですが、その・・・」少女は口ごもる。

「ああ・・・」すぐに分かった。「僕の仕業だって、そう言ってるんだね？」

「・・・はい」

一瞬迷ったようだが、すぐに彼女は頷く。隠しても無駄だと分か

っているのだろう。

「消えた人達は、まだ帰ってきていない？」

「はい。一部の人は路上に倒れているところを発見されていますが、ほとんどはまだです」

「そうだね・・・」少し考える。「消えた人達はどういう人だったか分かる？」

「どういふと言いますと？」

「君の言い方だと、あまり世間では問題視されていないみたいだ。つまり、消えてもいいような連中だったんじゃないかな？」

少女は少し驚いたようだった。

「あ・・・はい。確かに仰るとおりです。あまり素行の良い人はいなかったように思います」

「そうか・・・神隠しというのも合っているかもしれないね」

「はい？」

その声に微笑みを返してから、こう尋ねた。

「その人達を元に戻したいのかな？」

「いえ、私は・・・」

「いいんだ。市民としての意見を聞きたい」

「私は市民と言うには立場が違い過ぎます」

「じゃあ、君の立場としての意見を聞きたい」

「私は・・・神隠しという物を信じていません。ですから、単に失踪したのだと、そう考えています。そして、そういう人間は他にもたくさんいます。彼らの状況が少し特殊だからとはいえ、それだけで特別扱いはい出来ません。ですが・・・」

そこで少女は黙る。

「僕が彼らを救えば、僕の汚名が晴れる。そういう事かな？」

「・・・はい」

「なら、よく聞いておくといい」そう前置きしてから、微笑む。「僕の名前が汚れたと思っているなら、それこそ幻想だ。そんな幻想に構って、進む道を誤っては元も子もない。さっき君が話した事の

方がよっぽど正しい。だから、自分を信じて進んでくれたらそれで何も問題ない。僕の名誉を気にしてくれるのは嬉しいけれど、僕が正しければ名誉も勝手についてくるわけだから、君が気にする事じゃない。分かるね？」

「はい」

「だから、僕は他の事を優先するよ。彼らの事はもっと重要な事が全部済んでからでいい。君も彼らは失踪者という認識でいい。特に重要視しないでもいいよ」

「分かりました」

「これで全部かな？」

「はい。では失礼します」

少女が去ってから、その失踪者達の事を考える。

全員が全員そうではないだろうが、恐らくほとんどは自分の意志で消えたのだろう。消え方に関してはいろいろ考えられるが、手段なんてそれほど重要ではない。人間は自分の意志さえあれば、どこへだって行く事が出来るのだから。

しかし、多少は気をつけておくべきだろう。下手に混乱が起きても困る。

その時、確かに気付いた。

そうか。

どうやらやっと引っかかったらしい。

これでやっと会いに行ける。

サイトA。

とりあえず挨拶だな。そう思って、引き出しから真っ白な紙を取り出す。

真っ白か。だが、純白の紙とはあまり言わない。

汚れる事が決まっていたら、真っ白と呼ぶのだろうか。だが、それでも変だな。真っ黒は汚れたりしないのだから。

やっぱり妙な言葉だ。

まあ、いい。

こんな感覚とも、もうしばらくすれば縁がなくなるのだから。
自分も、そしてサイトAも。
そして、この都市の全ての人々も。

図書館内の空気は、凍っていた物が融け出すように、徐々に普段の印象を取り戻す。

そもそも、それほど大騒ぎしたわけではない。交わした言葉はほんの少しだけである。もちろん、誰かが暴れ回ったわけでもない。騒々しさでいえば、詩織と葉月が会話をしていた時の方が明らかに上だった。

だが、遭遇した者達にしてみれば、それは騒音どころではない衝撃だった。

男が立っていた場所は現在何もない。床にも何の跡もない。さっきまでの気配もない。

あの男は幻だったのだろうか。

出来ることなら、詩織はその可能性を信じたかった。心の中では、その可能性が現実になるように精一杯応援していたが、やはり実感には勝てないようだった。

やはり幻ではない。不気味で変な感じだったけれど、確かに生きている人間の気配だった。

「・・・何？今の」

急に声をする。詩織は凄い勢いでそちらを向いた。

そこには、驚いたような困ったような、判別しにくい表情の美咲がいた。だが、さすがと言うべきか、詩織ほどは動揺していない。さっきの声も呟くようだったが震えてはいなかった。

「・・・何でしょうね」

詩織にはそう答えるのが精一杯だった。

「そこに立っていた人、知り合い？」

「いえ、全く」

「何か変な物持ってたけど」

「・・・ですね」

「どうやって持って入ったのかしら？」

「さあ・・・」

美咲が思っていた以上に落ち着いているので、詩織も少し落ち着く事が出来た。そして、胸に手を当てて大きく息を吐く。それになり楽になった。

それを見ていた美咲が、やや心配そうに聞く。

「詩織さん、大丈夫？」

詩織は軽く微笑んで頷く。美咲のお陰だった。

「橘先輩、やっぱり落ち着いてますね」

「だって、私が慌てたら困るでしょう？」

「あ、はい」そんな気構えくらいでどうにかなるのかと思って、詩織は少し笑った。

「そういうあなたこそ、本当に大丈夫？」

「なんとか・・・先輩がいて助かりました」

「そう言えば、詩織さん、こういうの苦手だって言ってたものね。」

誰かは知らないけれど、本当、迷惑なイタズラね」

イタズラという言葉に詩織はしっくりこない。だが、美咲はそう認識しているようだ。どこかそう言い切れない、妙な現象だった気がしているのは詩織だけなのだろうか。

詩織は葉月と渚の顔を見てみる事にする。

そこで、初めて気付いた。

「あれ？」

「何？」美咲が聞いた。

「あの、葉月ちゃんがいまませんが、どこかに行きました？」周囲を見ながら言った。

渚は詩織のすぐ近くにいた。こちらからでは少ししか表情が見えないが、真剣そうに見える。

だが、隣にいたはずの葉月がいなかった。もしかして彼女も消え

てしまったのだろうか。そう思うと、詩織は少しまた背筋が寒くなる。

だが、美咲が呆れたようにこう言った。

「詩織さん、気づかなかったの？」

「え、何ですか？」何の事か分からなかった。

「彼女なら、ちょっと周りを見てきますって、どこか行っちゃったわ」

「本当ですか？」

詩織は全く気づかなかった。そんな事があったのだろうか。

「さっきの人が消えてすぐに、彼女、いきなりその場所まで歩いて行くから、私もちよっとびっくりしたけど。それで、何も見つからなかったから、近くを探しに行ってきましたって。止めようと思ったんだけど、あつという間だったから・・・」

全く記憶に無い。だが、そういえば、あの後すぐの記憶があまり鮮明ではなかった。どうやら、それに気付かないくらい呆然としていたようだ。そう思うと、詩織は恥ずかしくて、そして情けなかった。

「えっと・・・すみません。ちよつと頭が真っ白だったみたいです」
詩織は自分の顔が赤いのが分かった。

美咲はやや困り顔が混じりながらも、優しく微笑んでくれた。それだけで、詩織は救われた気がした。

「あんな変な物を見たんだから、仕方ないけどね。でも、荒瀬さんは、本当に物怖じしない子なのね。私は初めて会ったんだけど、確かにちよつと変わってるわ」

「ええ、まあ」詩織も少し微笑むことが出来た。

「さっきも何の躊躇もなくそこまで歩いて行っただけ。私なんか、すぐに行っても大丈夫かなって思っちゃうけど。度胸があるというか、怖いもの知らずというか」

「というか、葉月ちゃん、大丈夫ですかね？」ふと詩織はそう思った。

「少し心配だけど、ここも無人っていうわけじゃないし、何かあったら大声出すと思うから、たぶん大丈夫だと思う」

「どっちに行きました？」

「向こうの・・・あ」

美咲が指で示した先から、その葉月が丁度姿を現した。

葉月もこちらに気づくと、駆け足で戻ってくる。タイル張りの床に学生靴だったが、まるで妖精が歩いているみたいに足音が小さかった。

「いませんでした」

葉月は渚の手前で立ち止まるなり、開口一番にそう言った。少し残念そうな表情だ。

「葉月ちゃん、どこまで行ってたの？」詩織が聞く。

「一応、このフロアを全部見て来ました」

どうやら、葉月は本当に全く怖くなかったらしい。

「そうなの？」美咲は呆れたようだった。「気になったのは分かるけど、さっきの男の人、普通じゃなかったでしょう？あまり関わらない方がいいわよ」

美咲のその言葉に、葉月は首を振った。

「いえ。その、兄がいるかもって思ったので・・・」

その言葉が美咲には意外だったようだ。

「お兄さん？どうして？」

「さっき、向こうに・・・」

「あ、橘先輩は知りませんでしたっけ」

詩織が気づいて発言する。

「何を？」美咲が詩織に聞く。

「さっきいたのが、葉月ちゃんのお兄さんなんです」

「さっき？」

美咲はまだよく理解できないようだった。

「もちろん、すぐそこにいた男じゃないですよ。ほら、通路の奥に、もう1人いたじゃないですか」

「通路の奥?・・・え、でも」

美咲は葉月の顔を凝視する。

半信半疑というよりは、完全に信じられないという顔だった。だが、それも無理はないと詩織は思う。そういう詩織も最初は信じられなかった。今だって、半分くらいは嘘だと思っている。

だが、驚いたのは美咲だけではなかった。

「・・・お兄さん?」

意外な方向から声がしたので、詩織は意表を突かれた。

声の主は渚だった。

ずっと黙っていた彼女が突然呟くように発した声。

渚はまだ葉月の方を見つめたままだったので、この位置からは表情がよく見えない。

だが、それでも詩織には分かった。

明らかに今日一番の驚きを示している。

渚がそんなに驚いた事が、詩織には信じられなかった。確かに、あの男と葉月が兄妹だというのは意外な事実ではある。だが、普段から落ち着いているイメージのある渚が、そこまで驚くような事とは思えない。

それに何より、渚だって似たようなものなのだから。

葉月がやや躊躇うようにして聞く。

「そうですね・・・でも、そんなに驚きました?」

渚はすぐには答えなかった。葉月の目をじっと見つめている。葉月も相手の目を見て話すタイプだから、自然と見つめ合う格好になった。この2人は背格好も同じくらいで雰囲気もどことなく似ている。髪や瞳の色が同じだったら、双子に見えたかもしれない。そんな2人が向かい合っていると、何かの絵画みたいで、妙な感じだった。

しばらくしてから、ついに渚が口を開いた。

「あなたのお兄さん・・・何者なの?」

彼女の口から出たのは、結構不躰な質問だった。

だが、葉月の兄に限って言えばそれほど不自然な質問ではない。思わず聞きたくなる人も多いただろう。

葉月も慣れた様子で答える。

「よく聞かれるんですけど、普通の人ですよ」

普通の人というのも凄い答えだなと詩織は思った。だが、渚はすぐにこう言った。

「そうじゃないの」

「え？」

葉月が意外そうな声をあげる。詩織も同じ意見だった。

「いえ・・・やっぱりいい」

急にそう言って、渚は少し下を向いた。

葉月が少し首を傾げる。不思議そうな表情が詩織の位置からはよく見えた。

反面、渚の顔はよく見えない。

何が聞きたかったのだろう。

どうして聞くのをやめたのだろう。

詩織には分からない。

ふと気付く。

この場所にも、いつの間にか夕日が射している。

その光で、渚の銀髪は黄金色に輝いている。

そして、葉月の黒髪は紅い光を放っていた。

前に来たことがあると瞬は思った。

それは昨日の事ではなく、もっと幼い頃の事だ。その頃の瞬は父親に連れられて何度も海外に行った。その中で何カ所か歴史ある教会を訪れた事もある。そのうちのどこかと似ているような気がするが、具体的に例を挙げる事は出来なかった。

それに、瞬は教会のような場所にどうも水が合わないようだった。そう言うと祐介には笑われるのだが、なんとなく居心地が悪い。瞬は古い建築物が好きな方だし、宗教が嫌いなわけでもない。もちろん、嫌な思い出があるわけでもない。

言うまでもないが、自分の外見のせいでもない。

「お前は何者だ？」

知らない男の声だった。

だが、その質問にはどういうわけか縁がある。

瞬は声のした方を見据えた。

視線の先、奥の壇上に男が立っている。

割と簡素な建物だった。木造の建物で、少し床から高くなった広い通路が建物の中央を真っ直ぐに壇上に向かって延びているだけ。通路の両側には座席がいくつもあり、教会堂というよりは小劇場といった感じである。それでもここを教会だと思ったのは、窓が多くて光の多い設計である事と、壇上の奥に大きな古めかしい黒い槍が飾ってある事、そして、独特の苦手な雰囲気、つまりは瞬の個人的な印象からだった。

「何者だ？」

壇上の男がもう一度聞く。声がよく響く場所だった。

男とは反対側の壁際、その通路の真ん中に立っている瞬は、そこ

から周囲を見渡した。2人の他には誰もいない。男との距離は20m程に見えるが、どのくらい信用していいのか、瞬には判断しかねるところだった。

というのも、昨日は全く意味のない距離だったからである。

「なぜ、そんな事をしている？」

瞬は相手の質問に答えず、問いを返した。

男は答えない。何か考えているようだ。

瞬も何も言わない。そんな余裕はない。

昨日もそうだった。瞬はここで彼を見た。彼の足元に倒れている血塗れの女性を見た。

その一瞬後には、自分の血を見た。

そして、その後は覚えていない。

「サイトLを知らないのか？」

男の声が伝わる。

瞬は迷った。サイトLと言われてもよく知らない。だから、イエスと答えればいいのだが、そう答えると会話が終わってしまう気がした。会話は出来るだけ長い方がいい。それは時間稼ぎも兼ねているからである。だが、普段会話に乏しい自分にはあまり技術が無い。それが困りどころだった。

迷っていると、思いの外早く、次の質問が来た。

「お前こそ何をしている？」

これも答えにくい質問だった。端的に言えば、瞬は相手の活動を妨害している。今の時点でも分かりそうなものだが、相手には何か違う懸念があるようだ。それを確かめる為に、こんな効率の悪い会話をしているのである。

それならば、なるべくはっきりさせない方がいい。

瞬の脳裏に図書館で見た黒い槍が想起される。その槍は昨日見た物と同じだった。

昨日もこの男が握っていたのだ。

血塗れにして。

図書館にいた葉月の顔を思い出す。

どうしても、この男をここから帰すわけにはいかなかった。

「どうして生きている？」

男の声がした。

その答えも、瞬は知らない。

なんとなく覚えているのは、生ぬるい感触と、冷たい身体。そして、それでも必死に動かそうとしていた自分の声。

そろそろ黙っているのも限界な気がするので、瞬はこちらからも質問する事にした。

「サイトLは何を言っていた？」

瞬にしてみれば、この質問は結構な冒険だった。まるで見当違いだったらたちまちに、自分は何も知らないという事が相手に分かっってしまう。朝の葉月との会話のお陰で、全くの当てずっぽうではないのだが。

しかし、その質問には予想外の効果があった。

男が口元を歪める。

瞬は笑わなかった。彼には出来ない表情である。

「サイトAを手に入れる」

その言葉にも瞬はリアクションしなかった。

「そして、この世界を消す」

そちらの言葉には、正直リアクションしろと言われても出来なかっただろう。

世界を消す。

どうやって？

いきなり大規模な事を言われたので、瞬の感想はそれくらいのものであった。

だが、そう言った男の顔から察するに、笑ってはいるが、冗談ではなさそうだった。

本気らしい。

瞬にしてみれば、自分が信じられるかどうかは指標の1つでしか

ない。相手が信じているらしいというのが分ければ、それで十分だった。

瞬はそこでふと気付いた。

バラバラだった物が一カ所に集まっていくような、問題を解く道筋が見えたような、そんな感覚があった。

その手がかりは、この男の言葉。そして、この場所の雰囲気。

この場所はあまりに質素過ぎる。

まだ漠然としていたが、瞬は納得した。

ここは教会でも劇場でもない。

ここがサイトLなのだ。

「そうか」

特に怒ったわけでも、呆れたわけでもない。瞬の口調は普段通り淡々としていた。

瞬は男を見据える。

「どうして世界を消す？」

男は笑うのを止めた。

「汚点だからだ」

瞬は身体に力を入れる。怒ったのではない。襲われてもいいように、身構えたのである。

「それでいいのか？」

「汚れは消す。間違えれば直す。どこもおかしくは無い」

迷いのない、はっきりした声。

瞬は黙った。

ここがサイトLだと気付いてから、瞬はもう居心地が悪くはなかった。

それもそのはずで、ここは教会とも劇場とも役割が違うのだ。

教会も劇場も、前に立つ人は全くの自分を見せているわけではない。教会では神聖な存在の言葉を代理で話し、劇場では台本の中の人物を演じる。壇上の人間は、言わば代弁者。

観衆がそれに夢中になれるようにセッティングされた場所。それ

が教会や劇場の役割である。

だが、ここは違うのだ。

ここには装飾が何もない。大きな黒い槍が立て掛けてあるがそれだけである。だが、そんな物だって本来はいらないのだ。

ここに立つのは、代弁者でも演技者でもない。

本人。

壇上にいる男が心酔している存在。

その存在が立つのが本来の配置。

だが、今は違う。本来の配置ではない。

その事が最も重要なのだ。

「お前は何者だ？」

男が再び聞いた。これ以上聞く気はないという事が、彼の口調から分かった。

瞬もこれ以上引き延ばす気はなかった。サイトL云々はともかく、この男が大真面目なのは分かった。それで十分である。後は、勝っても負けても、葉月がどこかに行っているのを祈るだけだった。

「人間だ」

この答えで必要十分なはずだ。

「そんなはずはない」

男は即答する。

同じ質問を何度かされた事はあるが、この答えをはっきりと否定されたのは初めてだった。

だからといって、瞬が笑うわけはなかったが。

「違うかどうか、確かめたらどうだ？」

瞬の提案に男は笑うのをやめる。

彼の気配が大きくなった気がした。

戦いは一瞬だ。どこかで聞いた言葉を思い出す。

「消えろ」

男が呟く。

瞬は身構えた。

その言葉が呪文だったみたいに、彼の右手に黒い槍が出現する。
図書館で見た、あの槍。

そして、昨日はあれに一瞬でやられた。

だが、あれこれ思案する余裕はない。

既に男はこちらに向けて槍を構えている。

そして一拍の後。

男が床を蹴ったかと思うと、あっという間に瞬の目前にいた。

黒い槍の白い穂先が鈍く瞬いた。

橘美咲の車は、クリーム色の女性らしいコンパクトな国産車だった。

その車内に詩織たち4人はいる。運転手が美咲で助手席には詩織、後部座席には葉月と渚が行儀良く座っている。道路はやや混んできている上に、信号が多いので少し渋滞気味だった。

詩織は少し気になって後部座席を振り返る。今、葉月は家に電話しているところだった。渚は何か考え事をしているようだ。

その葉月の電話が、丁度終わったようだった。

「どうだった？」

詩織がすかさず聞く。そう聞くのがこの場での自分の役回りだった。誰も聞かなければ、台風の日みたいな重い空気になるのは間違いない。

「まだ、帰ってないって・・・」

葉月の顔には心配が滲み出ていた。

詩織は少し元気づけるように明るく言った。

「お兄さんだって、寄り道ぐらいするでしょ？どこか友達と遊びに行ったのかも」

「遅くなったり、外泊したり、そういう事はあるんですけど。でも、そういう時はちゃんと連絡するんですよ。家族に心配させたらいけないって・・・私にも、遅くなるときは連絡しなさいって言うぐらいなので」

「まあ、まだ遅いって程でもないし。もう少ししたら、連絡があるんじゃない？」

「・・・そうですね」

まだ不安げな声で葉月が言う。それでも詩織には少し微笑んで見

せた。

詩織は前を向いて座り直す。

本来なら、男子高校生が帰らないからといって心配するような時間ではない。だが、今の状況では、葉月が不安がるのも分からなくはなかった。

詩織達の見ている前で消えてしまった2人の男。その片方が、葉月の兄というのは、どうやら確かなようだった。図書館の受付の女性に聞いたところ、彼がそこを通ったという証言が得られたのもある。

その兄は図書館から忽然と姿を消した。

もちろん、隅々まで探したわけではない。だが、図書館職員の人に協力してもらい、簡単にだが館内を見回った。防犯カメラの記録も見てくれた。

だが、どこにもいなかった。そして、どこからも出ていなかった。これが自分の身内だったら、さすがに不安になるだろう。

神隠しにあった。そういう話を詩織はたまに聞く事もあるが、実際にそれらしい現場に遭遇したのはもちろん初めてだった。聞く前はそんな事があるわけないと思っていたが、不思議な事に、目の当たりにした今でも詩織は信じていない気がした。その理由はなんとなく分かった。

怖いのである。

きつと、今の自分は理解できないから冷静でいられるのだと、なんとなくそういう予感がした。理解しようとしたら、そんな自分が既に少し怖いようなそんな気さえする。

知ってはいけないこともある。

ふと浮かんだ言葉を、詩織は心の中で繰り返す。

そこでまた、車内の空気が暗いような気がして、詩織は美咲に話しかけた。

「先輩」

「何？」

美咲の声はいつも通り優しい。

「あの・・・私達も行っちゃっていいんですか？」

「なんで今更そんな事聞くの？」

美咲は少し笑う。

「いえ、だって、最初は反対してたし」

「そうだけど、結局貴女達は諦めないでしょう？勝手に危険な事をされても困るし。それなら、見える場所にいらった方が安心なもの。それに、結構遅くなっちゃったから家まで送ってあげようと思ってたし。だから、まあ、ついでよね」

「はあ・・・」

詩織は生返事を返す。

「それに、本の場合もはつきりしたしね」

その通りだった。

美咲は渋々ながらも、あの謎の本について、今借りているのが誰なのか調べてくれた。やはり目の前で異常現象を見たというのが大きかったのか、少し心境の変化があったようだ。これで良かったのか悪かったのか、微妙なところである。

その人物の名前がわかったとき、美咲は呆れた顔をした。

「その本を持ってるのって、先輩の友達ですか？」

詩織が聞いた。

「そう」美咲は頷く。

「文学部の後輩とか？」

「ううん。学部は違うんだけど、同い年なの。今はそうでもないけど、昔ちよっと・・・付き合いがあってね」

付き合いという言葉に、少し抵抗があったような気がした。ふと思いついて、詩織は聞いてみる。

「・・・もしかして、男の人ですか？」

「え？そうだけど」美咲は少し戸惑ったようだ。

「それは・・・行って気まづくなったりしませんか？」

「どうして？」

迷った末、詩織は素直に言う事にした。

「いえ、その・・・付き合いつてそういう意味かなって」

車内に静寂が満ちた。

だが、それも数秒だけだった。

美咲が笑っていた。

どういうわけか大受けだったので、詩織は慌てた。美咲は運転中なので尚更である。

「すみません！違いました？」

詩織が手を合わせて弁解する。

「ああ・・・可笑しい。もう、変なこと言い出さないでね」

「ごめんなさい。先輩、ちょっと言いにくそうだなって思ってた。それで、ひょっとしたら、そういう関係だったのかなって・・・」

「そういう関係って、どういう関係ですか？」

急に葉月が会話に参加してくる。

「どうって・・・簡単に言うのと、恋人だったんじゃないかって」詩織が答える。

「え！そうなんですか？」

「だから、違うの。ただの同級生で、高校の時から割と仲良くしてた友達なの。それだけよ」

「なんだぁ・・・」葉月は残念そうだった。

「変わった男子で有名だったから、そういう噂は全然なかったの。頭が良くて、そこそこハンサムだったんだけど・・・性格かしらね」

「性格、悪かったって事ですか？」詩織が聞く。

「悪いっていうか、とにかく話しくいのよね。理屈っぽいし、難しい言葉が多いし、それに、何でもはっきり言うから話しても楽しくないの。今だったら、一理あるなって思えるような事なんだけどね。そういう意味では、大人っぽい男の子だったのかもね」

「・・・なんで、そんな人と友達だったんですか？」

「それは、まあ、ちょっとした縁かしらね」

美咲はそう言って少し笑った。

昔を懐かしむような笑みだった。なんとなくだが、大人っぽくて羨ましい。

詩織と美咲はいくつ離れているのだろう。美咲は確か、院生を卒業してすぐ助手になったと言っていた。助手にはやっとな慣れてきた頃だとも聞いた。

少し計算してみても、ふと思った。

「先輩って、兄と同級生でした？」

詩織の質問に、美咲は少し驚いたような顔をする。

「どうしたの？急に」

「いえ、先輩って私のいくつ上だろうって思ってた」

「どうして？」

「ちよっと気になっただけで・・・」

詩織は言葉を濁した。

普段の彼女とは、少し雰囲気が違う気がした。いつもならすぐに答えてくれる気がする。もしかして、年齢を聞くのはタブーなのだろうか。だが不機嫌というのは全然なくて、どちらかというと戸惑っているように思える。

そんな変な事を聞いたのだろうか。

その時、後部座席から声がした。

「橘先輩って、高校の頃、どんな女の子だったんですか？」

葉月の声は、どこか楽しそうだ。

「どんなって言われても・・・普通だったと思うけど」

「でも、きつとモテましたよね」詩織も便乗する。

「全然」美咲は即答する。「私、地味だったから」

「多恵みたいな感じですか？いつも本を読んでいるような」

「あ、そうかもね。本は好きだから」

「だったら、モテモテですよ、きつと」詩織はからかうように言った。「多恵もああ見えて、実は人気あるんです」

「そうなんです」葉月は何故か嬉しそうだ。興味津々だった。

「そうそう。普段男子と全然話さないから、告白とかは無いんです」

けどね。でも、噂では聞くんです。優しいところがいいとかどうか。だったら、先輩は大人気だったんじゃないですか？」

「どうかな。優しいなんて、そんな子はたくさんいるでしょう？」

「そんな事ないですよ。先輩は美人だし・・・何回くらい告白とかされました？」

「だから全然無し。本当に地味だったから」美咲の返事は素っ気ない。

「そんな誤魔化さなくても・・・」

「詩織さんの方が人気あるんじゃない？」

急に美咲がそう言い出した。

「やっぱり、そうなんですか？」

葉月が楽しそうに言った。

何がやっぱりなのか詩織は気になったが、敢えて触れずに答える。

「全然。たまに男みたいだって言われるくらいです。しかも面と向かって。モテるとかそれ以前に、まず女扱いされないっていうか。ちょっと酷くないですか？」

「そんな事ないかも」美咲が言った。

「え、そうですか？」

「うん、例えば・・・」美咲はそこまで言いかけたが、そこでやめてしまった。

「例えばなんですか？」詩織が聞く。

「ううん。聞かない方がいいかも」

「なんですか？それ」詩織は不満を顔に出す。

「詩織さん、好きな男の人はいるの？」

いきなり聞かれて、詩織は慌てる。

「な、なんですか？いきなり」

「いるんですか？」葉月も聞く。

「いないけど・・・」

「荒瀬さんは？」

「あ、葉月でいいですよ」

「じゃあ、葉月さんは？」

「いますよ」

あっさりとした回答に、詩織は心底驚いた。

「いるの!？」詩織はたまらず聞く。

「あ、でも、家族以外ですか？」

その言葉に、詩織の体から風船みたいに空気が抜けた。

美咲は少し苦笑しながら言った。

「葉月さんは、モテるなんてもんじゃないでしょうね」

「私、女子校なんです」

「でも、高校はうちに来るんでしょう？」

「はい。多分」

「共学になるじゃない。だったら、男の子との出会いもたくさんあるわ」

「そうですよね」そう言ったものの、葉月の声には実感が伴っていなかった。

「でも、何十人にモテるかどうかよりも、大好きになれる人を1人見つける方がとても大事。それこそ、家族と同じかそれ以上のね」

「あ、それ、よく言われます」葉月が言う。

「でも、そういう人を探すのは案外大変だから、変に人気があると余計苦労するものかも。それこそ、女扱いしてくれないような男は、最初から相手にしなければいいじゃない。手間が省けるでしょう？」

「それ、私に言ってるんですか？」詩織が聞く。

美咲は黙って頷いた。

「そんな上から目線でいいんですか？」

「いいのよ」美咲はウインクする。その仕草は慣れていて、とても大人っぽい。詩織は女ながらもドキドキした。「度胸がないのか、子供っぽいのか知らないけれど、貴女に気があるのなら、はっきりそう言える男じゃないとね。妥協なんてしたらダメ。そんなお互いの為にならないんだから」

詩織はなんとなくだが感じる物があって、ゆっくりと頷いた。

「2人とも、私の大事な後輩なんだから、困った事があつたらなんでも言つてね。それに渚さんも。知り合ったのも、何かの縁だから」美咲はそう言つてバックミラーを見たが、渚の反応はなかった。そのまま、車内は静かになる。

渚は相変わらず一心不乱に考え事をして一言も喋らない。

葉月は疲れたのだろうか。天真爛漫なようだが、結構気を遣う性格でもある。

詩織は美咲の言つた事の意味を考えていた。感じ入る部分もあったが、わからないところもあった。感性がずれているような、そんな感じがする。

詩織と美咲の違い。

歳も違うし、性格も違うし、立場も違う。だけど、今の話に関係あるところで、一番大きな違いはなんだろうか。

ふと気付く。

「あの、先輩」

そこで、車が止まった。目的地に着いたらしい。

「何？」

美咲が聞く。

「いえ、なんでも・・・」

詩織は気後れして、誤魔化した。あまりたいした質問とは言えない。

その時、葉月の声がした。

「あ、ここって・・・」

「どうかした？」詩織が聞く。

葉月が目的地の建物を見ながら言つた。

「私、ここ知ってます」

距離を詰めるのは一瞬だったが、槍の動きはそれほど速くはなかった。

むしろ遅かったと言ってもいい。なんとなくだが、瞬には相手が槍の扱いに慣れていないと分かった。どちらかといえば、慣れている方が不自然である。今時、日本で槍の扱い方を学んでいる人間はかなり少数派だろう。どちらにしろ、男の動きは、そういった鍛えられた洗練さとは無縁のものだった。

真っ直ぐ突いてくる槍を、軽く左に避ける。

そして、瞬は両手で槍を掴んだ。

とりあえず、この物騒な物をどうにかしようと思っていた。出来れば取り上げるか、最悪でもこうして掴んでいれば、こんな長い得物は距離が近すぎて役には立たない。

しっかりと掴んだ両手にさらに力を込める。

だが、違和感がした。

瞬と男の目があう。

笑っている。

男が体に力を入れるのがわかった。

瞬は気づいた。

離さないとまずい。

そう思った時には、既に槍から手を離している。だが、遅かった。

右腕の骨が割れたような痛み。

二の腕だ。

その痛みを抱えたまま。

瞬の体は車にひかれたように吹き飛んだ。

視界が激しく動く。

すぐに、左腕と背中に衝撃。

痛みで息が止まる。

景色も止まった。

漠然とだが、受身はとったようだった。

床ではなくて、壁にだが。

瞬は壁際にまで弾き飛ばされていた。

視界がまだ少し揺れている。

それでも、瞬は状況を確認した。

視線の先には、男が立っている。

槍を振るった姿勢のまま動いていない。距離は10 m程。もちろん、詰めようと思えば一瞬の間合いだろう。だが、それとは違う感想があった。

よく飛んだな。

今男が立っている位置が、さっきまで瞬の立っていた場所だった。そこからここまで吹き飛ばされたという事だから、結構な飛距離である。だが、きっと壁がなかったらもっと飛ばされていただろうという感触があった。

男が右手を振るっただけで。

だが、あの男の力ではない。瞬は体を起こしながら、相手の右手にある槍を見つめる。それを振るったのは紛れもなく彼の右腕だが、特別なのは、おそらくあの槍の方だった。

瞬がああ槍を掴んだときの違和感。

そして、振るった時の威力。

つまり、それがLか。

それらしいなと瞬は納得する。

あの槍は動かなかった。瞬が掴んでも、空中に固定されたようにびくともしなかった。

あの槍は止まらなかった。咄嗟に防御した瞬の体ごと、容易く弾き飛ばした。

使用者の意志か、それとも槍の意志か。

どんな障害があっても、目的の場所へ必ずたどり着く。そして、その場所を動かない。

真っ直ぐに、正しい場所を射抜く、美しい槍。

それが、この男の信じるL。

男が再び床を蹴る。

やはり、一瞬後には、瞬の目の前にいた。

今度は突きではなく、大きく振りかぶって、切りつけてくる。

瞬はまた左側へ、今度は地面に転がるように避けた。

男は返す刀で水平に振るってくるが、瞬はその時には間合いの外にいた。

意味はあまりないが、さらに数歩下がって距離をとる。

そこでまた一拍。

正直なところ、瞬は困っていた。

こちらに武器がない以上、槍をどうにか男の手から離すのが得策だと思っていた。だが、槍を掴んでも無駄であるとわかったからには、男の体を掴むか、或いは殴るか蹴るか、いずれにせよ、槍が使えない間合いに持ち込むしかチャンスはない。

だが、問題があった。

瞬の右腕は先程から動いていない。

本当は動かしたいのだが、動かないのだ。

どうやら最初に弾き飛ばされた時に右腕に衝撃が集中したようだ。折れたのか、或いはもつと酷いのかはわからないが、とにかく二の腕から下が全く動かない。見て確認したいところだが、そんな余裕は無いし、そもそも、見たところで治るような傷ではなさそうだった。とりあえず、まだ引っ付いているようだから、それでいいかと思う事にする。

いずれにしても、わずか数秒で片腕を失ったわけだから、結構間拔けな話だった。

これだと仮に懷に入れたとしても、互角だとは言えない。

どうするか。

時間が経てば経つほど疲れるのは、怪我をしているこちらの方だろう。

一か八か、左腕だけでもやるしかないか。

瞬がそう思ったときだった。

男は槍を頭上に持ち上げた。

なんの真似だろうかと、瞬は訝しむ。

槍投げの体勢に見えない事もないが、あんな構えではこちらまで届かないだろうし、届いても速度はたかが知れているだろう。何より、投げてしまったら、せっかくの武器を手放す事になる。

そう考えたのも束の間だった。

槍が男の手から消えた。

そう思ったが違った。

瞬のまさに目の前にそれは現れた。

近い。

飛んできたのだと気づいたが遅すぎた。

動く時間はない。

避けられない。

槍は測ったように頭の位置を正確に捉えていた。

そのまま、瞬の頭を通り抜けた。

インターフォンが鳴っている。

伊奈祐介は微睡みながらもそう認識する。

そして少し腹が立った。

それは、こんな時間に訪問してきた人物に対する怒りではない。気持ちよく眠っていたのは事実である。だが、通常なら祐介だって起きている時間だし、一般的にもまだ夜中といえる時間ではない。

祐介の怒りの矛先は、同居している男だった。

「なんで、出ないんだよ」

祐介はそう呟いて、ベッドから起きあがる。布団も何もかけていなかった。

ここは寮とは言っても、一戸建ての中の部屋を間借りしている状態で、住んでいるのはこの家主と祐介と、もう1人、藤村という変人だけだった。そして、今家主は、出かけていて不在である。つまり、訪問があれば祐介かその変人が応対しなければならぬ。

帰ってきたときに、寝てるから後のことはお願いしますと言ったはずなのだが・・・

ダイニングに出てみるが、男の部屋からは何の物音もしない。どうやら、居留守を決め込むつもりらしい。いい度胸だと思ったが、どうせいつだってこんな調子なのだ。

祐介は苛立ちを飲み込んでから、インターフォンの通話ボタンを押した。

「はいはい」

「あ、伊奈先輩ですか？」

聞こえてきた声に祐介は驚いた。知った声だが、予想だにしていなかった。

「葉月ちゃん？」

「はい。遅くにすみません。今大丈夫でした？」

「いや、もう、全然平気。何？どうかした？」声が少し大きいのが自分でも分かった。

「あの、藤村さんって人、いますか？」

葉月の質問もまた、かなり予想外だった。

「藤村？そういう名前の奴なら、確かにここに住んでるけど、葉月ちゃん、知り合い？」

「いえ、全然。あの、藤村さん、ご在宅ですか？」

「いるけど・・・」

「それなら・・・あ、ちょっとすみません」

そう言うなり、葉月は他の誰かと相談を始めたようだった。どうやら、相手も女性らしい。このインターフォンはカメラがないので相手の姿が確認できない。祐介に確認できるのは、それらしい話し声だけだった。

しばらくして、葉月が戻ってきた。

「あの、伊奈先輩」

「はいはい。何？」

「ちよっとだけ、上がらせてもらってもいいですか？」

「え、うちに？」

聞くまでもなく当たり前前の事だったが、それでもつい確認してしまった。

「はい。ダメですか？」

「いや、駄目って事はないけど。ただ、瞬の奴がなんて言うか・・・」
「そこまで言って、祐介はふと気づいた。「そういえば、他にも誰かいる？」

「はい。実は」

「ああ、それならいいか」

「そうですか？私も入れて4人なんですけど」

「4人？」思わず口に出た。想像よりも多い。「あ、いやいや、と

りあえず、ちょっと待って」

そう言ってから、祐介はインターフォンを切る。その後、出勤要請のあった消防署みたいな手際の良さで、簡単にダイニングを片づけて、身だしなみを整えた。玄関を開けるまで、所要時間は一分を切っていただろう。

その数分後には、葉月達4人の姿がダイニングルームにあった。結構な人数なので多少戸惑ったが、全員女性なので、もちろん悪い気はしない。

それぞれと簡単に挨拶をした後、祐介は事情を聞いた。

「へえ・・・瞬がね。まあ、あいつなら大丈夫だろ」

「・・・ですよね」

そう言いながらも、葉月は少し元気がない。

祐介は何か言って元気づけようと思ったが、適当な事が思いつかなかった。というよりも、下手な事が言えなかった、と言う方が正しい。というのも、瞬が図書館にいたのは、葉月の事を探し回っていたからではないかとなんとも思ったからだだった。それだけならまだいいが、じゃあどうして葉月を探していたのかという話になると、少し困る事になる。瞬は昨日今日と遭遇した事件について調べていたようで、恐らくその関係だろうと思ったが、昨日の件は、瞬がこの妹に秘密にしている話だった。詳しく話してしまうと、瞬の意志に反する事になる。本人には過保護だと言ったが、だからといって自分で暴露するのは、どうにも気が引けた。

祐介は話題を変える事にする。

「それで、その本に何かあるんですか？」

女性陣を見回しながら聞いた。祐介には誰に聞いたらいいのか分からなかった。

「まあ、それをはっきりさせようと思ってね」美咲が言う。「それに、その本、貸し出し期間がとくに過ぎてるらしいから。だから、催促も兼ねてね」

「またか」祐介は呆れた。

「まあね」美咲は可笑しそうに答える。

「またって、よくあるんですか？」葉月が2人に聞いた。

「よくあるっていうか、ちゃんと返してた本ありました？」

祐介が美咲を見ると、彼女は笑って首を振った。

きょんとした顔の葉月に、祐介が説明する。

「たいてい催促されてから、やっと返しに行くんだよな。そうできゃ、たぶんずっと借りたままだと思う」

「学部の書庫は管理が適当だから」美咲が一応弁解らしき物をする。「そこで借りた本は図書館みたいにチェックが厳しくないから、ずっと借りたままって事もあるの。管理スペースに比べて本が多すぎるから、そうしないとやっていけないっていうのもあるけどね。藤村君、そこで借りる本の方が圧倒的に多いから、たぶん、それに慣れてしまってるんだと思う。そういう人、結構多いもの」

「まあ、結局、悪いのはあいつですよ」

祐介はそう断言してから、美咲の方を向く。

「橘さんでしたっけ？ひょっとして、藤村さんの知り合いですか？」

「知り合いついていうか、友達なの」

「友達？ほんとに？」

「今はあまり会わないけどね」

「ひょっとして、工学部の千葉さんとも友達ですか？俺のチューターなんですけど」

「そう。実は伊奈君の事もちょっと聞いてたのよ」

「うわ。ほんとですか？」祐介は嫌な顔をする。

「ふらふらしてるけど、見所もあるって」

相変わらずのはっきりしたコメントだが、千葉にしては多少甘口だった。もっと酷い言われ方をしても不思議ではないので、祐介は少しホッとする。

「ということは、千葉さんがここまで本の催促に来るのって、もしかして橘さんが情報を回してるせいですか？」

美咲が笑顔で頷く。

「うわ・・・」祐介はそう呻いてから、困ったように頬を掻いた。
「どういう事なんですか？」葉月が2人の顔を見比べながら聞く。

「いや・・・」祐介は左手を振る。意味は特にない。

「ごめんね。でも、彼女が一番話が通りやすいから」美咲の顔は笑っていた。

「そういう事なら、まあ・・・」

「あの」

会話を割って入ったのは詩織だった。

「ここに来た目的を忘れてませんか？」

詩織の表情は、怒っているというよりは呆れているようだった。
指摘された3人は顔を見合わせる。

しばらくして、祐介が咳払いして言った。

「その本なら、とりあえず、借りた本人に聞けばいいよな」

「その本人が話を聞いてくれるかが、一番心配なんだけど」美咲が言った。

祐介は全く同感だったが、詩織と葉月には理解できなかったよう
だ。

「そんな難しい人なんですか？」

詩織が質問した。

何故か妙な沈黙があった。

「まあ、やってみるしかないか」

祐介がそう言って、ダイニングからすぐ見える扉まで歩いていく。
女性陣もそれに続く。

藤村の部屋らしき場所からは、物音ひとつしない。

「もしかして、寝てるとか？」

詩織がそう発言したが、祐介は黙って首を振った。

祐介はその扉の前に立ってから言った。

「悪いけど、みなさん、ちょっと離れてて」

「どうしてですか？」葉月が不思議そうに聞く。

「まあまあ。万が一って事があるし」

「万が一？」詩織も意味が分からないようだった。

「伊奈君に任せましょう。ルームメイトなんだし」

美咲が助け船を出してくれる。

もう一人の渚は、あまり興味が無いのか何も喋らなかった。一昨日街で話した時の印象とはまるで違うので少し意外だったが、誰にでもそういう日があるものだと思っただけ。

詩織と葉月が釈然としない様子ながらも扉から離れる。

それを確認してから、祐介はドアをノックした。

しばらく待っても応答はない。

その後も何度かノックして名前を呼んだりしたが、応答はなかった。

全くもって、予想通りである。

最後に祐介は肩をすくめた。

「やっぱり、寝てるんじゃないの？」詩織が言った。「ちよつとだけ、ドアを開けてみたらいいじゃない」

祐介は困った顔をする。

「やっぱりそうなるよな」

「何かまずいの？」

「いや。じゃあ、準備するからちよつと待って」

「準備って？」

「とりあえず、手袋がいるんだよな。後はまあいろいろ」

「手袋？」

詩織はドアを見る。何の変哲もないドアだった。

手袋なんてどこに必要なのか。詩織の顔にはそう書いてあった。

「ちよつと待って」

突然した声に、他の全員が振り向く。

渚の声だった。

ずっと無口だったのが急に発言したので、祐介は少し驚いたが、それは他の女性陣も同じだったらしい。

「あの部屋は何ですか？」

渚が指さしたのは、祐介の立っている部屋の隣だった。

祐介は軽く頷いてから、明るく答える。

「ああ、その藤村さんの書斎っていうか、物置っていうか、とにかくよく分からない物で溢れてる部屋だな」

ある意味失礼な言い方だが、誇張ではなかった。何度か中を見た事があるのだが、その時の印象そのままである。

「そこです」渚が不意に言った。

「へ？」

「そこにあるみたい」

主語をはっきりさせて欲しいと祐介は思ったが、それを言う瞬間みたいだと思って、口に出すのは止めた。代わりに、想像で補う事にする。

その部屋の中に問題の本があるらしい。

どうやらそう言っているようだった。他の4人は視線を交わして、それを確認する。

最初に口を開いたのは葉月だった。

「その部屋を見せてもらう事って出来ますか？」

「この部屋はどうだろうな」祐介はその部屋のドアに目を向ける。

「まあ、妙なセキュリティがなければ、勝手に見ればいいんだけど」

「セキュリティって？」詩織が聞く。

「まあ、ちょっと・・・」

祐介はそう言いながら、すたすたとその扉まで歩いていく。

そして、ドアノブに無造作に手を伸ばした。

触れた瞬間、やはりという痛みがあった。

思わず手を引っ込める。

意味が分からないという表情の女性陣を見てから、祐介は肩をすくめる。

「ダメだな。やっぱり準備しないと」

「あの・・・何？」詩織が聞く。

「とりあえず、電流が流れてるから、それをどうにかしないと」

詩織は意表を突かれたようだった。いつもの彼女とは違った間の抜けた表情だが、素直に可愛らしいと祐介は思った。

「電流って・・・なんで？」

「さあね」祐介は微笑む。「それが分かったら、俺にも教えて欲しいな」

「セキュリティとか言ってたなかった？」

「そう聞いたわけじゃないけど。でも他に説明できないし」

「セキュリティにしたって、なんでドアノブに電気なの？」

「だから、それは知らない」祐介はつい可笑しくて笑った。

釈然としない顔で、詩織はドアノブを見る。

「これ・・・その藤村さんはどうやって入るの？」

「どこかでオンオフしてるんだと思うけど。そうでなきゃ、ゴム手袋でもするんだろうな」

「・・・なるほどね」詩織は呆れ顔になった。

「でも、これだけじゃないから」

「え・・・どういう意味？」

「鍵穴からレーザーが出た事もある。だから、ブレーカーを落とすのが一番安全なんだけど」

これには誰も突っ込まなかった。

改めて考えてみると結構悪質だなと思う。そして、それに慣れている自分は結構凄いなとも思った。

その時だった。

藤村の部屋のドアが、音もなく開いた。

開くときにはあまりにも音がしなかったため、最初は祐介も分からなかった。だが、扉が閉まった時にはそれなりの音がしたので、そこで初めて気付いた。

藤村は扉の前に腕を組んで立っている。

予想通りというか、藤村は機嫌が悪かった。自分の部屋の前で騒がれたら誰だって不機嫌になるというのは一般論だが、この場合、その騒ぎの原因が本人にあるのだから、自業自得だった。

だが、そう言っても素直に聞かないのがこの男である。

とりあえず、自分が話すしかないか。

祐介がそう思った時だった。

「藤村君」

誰よりも早く発言したのは美咲だった。

祐介はそれに少し驚いたが、若干の好奇心もあった。この優しい文学部の先輩が、藤村と友人だと言うのは俄には信じられない事である。どういう会話をするのか興味があった。

もつとも、会話のようなものが成立すればだが。

名前を呼ばれた藤村は美咲を睨みつける。結構な迫力だった。

だが、美咲はそれを涼しい顔で受け止めている。

結構慣れている。祐介にはそれが分かった。

期待できるかもしれない。

しばらくの間、2人はそのまま動かなかった。

槍は敵の頭を貫通して、壁に突き刺さった。

真山にはそのように見えた。

だが、一拍の後、敵の姿は煙の様に消えてしまった。

同時に壁に刺さった槍も消える。

外した。

そう確認するのに少し時間がかかった。というのも、真山には敵の避け方が信じられなかったからだった。

相手が自分の身体を気化させて避けた、ように見えた。

そんな避け方は普通出来ない。日常はもちろん、この空間内でも、真山には真似できないだろう。自分の身体を変質させるというのは、架空の話ではよくあるが、だからといって、自分の身体に対してそれを具体的に想像できるだろうか。自分の身体が空気に溶けるとき、その感覚が、意識が、心が、一体どうなるのか、どこに行くのか、明確に定義出来るだろうか。それが出来なければ、こんな真似は出来ないはずなのだが。

もしかしたら、さっきのは幻覚だろうか。

だが、可能性としては低い。その場合、槍は幻影に惑わされずに本体を射抜いていたはずだからである。

やはり、見た通りの事をやったとは思えない。

人間業じゃない。そう真山は思った。

だが、その場合、彼はもう元には戻れないかもしれないと思った。物質的にはともかく、精神的な物は普段あまり定義されていない。つまり、曖昧なのだ。それを元に戻すのは相当な難問と言える。物質を元に戻す場合の比ではない。そして、ここは外と違って、精神にも容赦はない。

再構成、或いは再定義出来なければ、それで終わり。

眠ったままになるか、或いは起きられても、狂ったままになるか。精神的な死を迎える。

そう考えると、あの男はとんでもない事をしたと改めて思った。

成功しても失敗しても、そんな事をしようというのが、もう普通の感覚ではない。試す事自体が、正気の沙汰ではない。

化け物か。それこそまさに、ヴァンパイアのような。

真山は気配を感じた。

ここはサイトL。自分ならば、屋内のどこに誰がいるか、見なくても分かる。

あいつだ。

最初に奴が立っていた場所。

真山はそちらを向いた。

その男は身構えるでもなく、こちらをじっと見ている。

先程と寸分違わぬ姿だった。

傷が多く、相当痛みがあるはずだが、平然とした顔をしている。

中でも一番右腕の傷が重傷に見える。どうやら既に動かないようだというのは分かったが、それほど気にしているようには見えなかった。余裕があるのか、或いは、そういった怪我に慣れているのか。

いずれにしても、信じられない。

完璧に成功したという事なのか。そこまでの技術と精神力があるという事なのか。それなら、こちらに決定的な攻撃をしないのは何故なのか。傷を治そうともしないのはどういう事なのか。何か特殊な事情があるのだろうか。

彼の髪に目が留まる。

図書館でやっとみつけたサイトA。

あの少女を思い出した。

「まだ聞いてなかったな」真山はそう前置きしてから聞く。「サイトAは何を言っていた？」

答えないかもしれないと思ったが、すぐに返答があった。

「会った事もない」

そんなはずはない。これだけの事を見せられて、嘘にも程がある。

「何故隠す？」

今度は何も答えなかった。

真山は問いを続ける。

「サイトAに何を言われた？ いや、お前はサイトLにも会ったはずだ。俺と同じ事を聞いて、同じ物を見たはずだ。何故、俺と同じ行動をしない？」

答えはない。

「サイトAに従っているということか？ 何故そうなる？ サイトLが真実しか言わないのは理解しているはずだ」

やはり答えはない。

何故答えないのか。それが真山には分からなかった。それどころか、動揺すらしていないように見える。自分が言った事は、実際にその通りのはずだから、全く心当たりが無いという事はあり得ないはずなのだが。

真山はもつと強く話す事にした。

「この世界は汚点だ」

相手の目を睨む。向こうの目は最初から鋭かった。

「失敗作だ。リセット出来るなら、誰だってそうしたはずだ。どんな人間でもこれは否定できない」

真山の口調は淀みなかった。迷いは無かった。

何故なら、ずっと前に悩み終わっていたからである。

以前の自分はずっと悩んでいたのだ。どうして世界に不幸ばかりあるのか。どうして他の人間は平気な顔をしていられるのか。何か出来そうな人間がいても、どうして何もしないのか。

どうして、こうなってしまったのか。

それでも、自分で変えてやろうと思っていた。誰かがしないなら自分でやればいいと思った。あの時は苦しかったが、ただそれだけの意志で努力した。

だが、ある日気付かされた。

自分の目標は幻でしかない。

例えば、自分が人類で最も偉くなったとしても、宇宙の真理を見つけたとしても、或いは神になれたとしても。

不幸は無くならない。それどころか減らす事も出来ない。

現象としてあり得ない。

気付いてみれば当たり前の事だった。同じ事を深く考えずに言っている人間もいるが、まさにその通りだった。何も知らなくても偶然答えが合っている場合もあるが、そういう事だろう。

不幸が無くならない理由。

それは、もう幸福が必要とされていないからだ。

誰ももう幸福を求めている。求めているのは、目先の豊かさ、快樂、後は幸福だと捏造された偽りの物。そもそも、誰も自分で幸福を探そうともしていない。自分で探さなければ見つからないに決まっているのに、目先の物に飛びついて、それでなんとなく幸せだと思ってしまう。それで十分なのだ。幸福を見つけるのは大変で苦しいから、そんな面倒な事はしないのだろう。

だから、他人が不幸でも分からない。不幸な人の苦しみが、幸福を求めた事の無い人には分からない。分からないから、平気な顔をしていられるのだ。気付かないから、何かしようなんて思うわけが無い。それを指摘したら、その人はきつとこう言うのだろう。そんな事仕方ない、俺の幸せを邪魔するなど。その人間の言う幸せとは、その程度の物なのだ。

幸福が見えていないのに気付いていない。

自然な解答だと、真山は思う。これに気付けなかった自分はどうにかしていたと思うが、やはり幻にしがみついていたかったのだろう。

その弱さを克服できたのも、サイトLのお陰だった。

真山は相手の反応を待った。

少なくとも同じ物を見たはずの男である。何も感じる物がないと

は思えなかった。

男の口が動いた。

「そうだな」

これ以上無いくらい、あっさりとした言葉だった。

真山は愕然とした。

彼の言葉には何の感情もなかった。何か感じ入っているわけでも、こちらを見下しているわけでもなく、ただ淡々としている。そこで昼飯でも食っていくか、と聞かれた時と同じ様な答え方である。

そんな事は当たり前だ。そう言わんばかりの落ち着きようだった。だが、さらに驚いたのは彼の次の一言だった。

「喋っていていいのか？」

「何？」

思わず聞き返してしまった。

「俺を殺すんじゃないのか？」

彼の口調は静かだった。

耳を疑った。

こいつは何を言っているのか。

それに、内容と口調とのギャップがありすぎる。

俺を殺すんじゃないのか？

落ち着いて言えるような事ではない。

「お前は何者だ？」

思わず口から出た。

答えはない。

「サイトAとは何だ？」

これにも答えはない。

「お前は何故ここにいる？」

答えはなかった。

「ひとつくらい答えろ！」

真山は叫んだ。

男は、荒瀬瞬はしばらく間を置いてから、ふとこう言った。

「よく喋るんだな」

嘲っているわけではない、普通の口調。

だが、こちらの頭に血が上るのには十分な言葉だった。

真山は右手を前方に伸ばす。

そのわずか後、目の虚空に12本の槍が水平に現れる。ちょうど、時計の文字盤のような配置だった。そして、少し遅れて、右手の中にも1本出現した。

全部で13本。それが彼の創り出せる限界だった。

目の12本は一瞬消えたかと思うと、すぐさま瞬を取り囲むように出現する。

この槍は決して動かない。これで相手の動きは制限されるはずだった。

瞬はその状況でも微動だにしない。

真山は床を蹴る。右手には最後の一本。

たった一步で、距離は無くなる。

瞬は動かない。

真山は真っ直ぐ右手を突き出す。

狙いは心臓。

相手は動かない。

穂先が駆ける。

そして。

当たった。

相手の身体を貫く。

肉と骨を裂く感触。

確かな手応え。

瞬のシャツが赤く染まる。

口からも血を吐いた。

確かに刺した。

やってやった。

真山がそう思ったときだった。

急に右手が軽くなる。

握っていた槍から、急に手応えが無くなった。
なんだ？

真山は槍を見る。

驚いた。

信じられなかった。

瞬の心臓を刺した槍。

自分の右手が握っている槍。

それは。

折れていた。

まるで刃物で切られたように。

綺麗に折れていた。

あり得ない。

これはサイトルの象徴なのだ。何者にも阻まれない絶対の槍。あらゆる物を貫くし、決して他人には動かせない。

折れるなんて事はありません。

その時、真山は気づいた。

目の前の男。

男の左手。

綺麗な刀身。

握られていたのは日本刀だった。

時代劇で侍が振り回すような物ではない。もっと小さい短刀だった。

しかし、それで斬ったらしいというのは俄には信じられない事だった。刀だろうと斬れるわけがない。そもそも、斬ったところを見ていない。

だが、普通じゃないとしたら、どうか。

この刀か、或いはこの男が。

真山は瞬の顔を見る。

これだけの至近距離で、しかもある程度の時間連続して、彼の顔

見るのは初めてだった。

髪は乱れているし、口からは血の筋が垂れている。それなのに、なんともないような、特に苦痛に歪むわけでもない、普段通りといった表情をしていた。

だが、それだけではない。

その髪は美しいシルバーの短髪。そして、人を拒絶しているような冷たい相貌。色白ではないが、肌理の細かい綺麗な肌。

日本人離れしたというのはもちろん、もっと言えば、人間離れした容姿をしている。

そして、極めつけは瞳だった。

真山は瞬の瞳を見て、そして戦慄した。

瞬は大学でも有名人だった。それは独特の容姿のせいだが、原因の大部分はその瞳にある。

鋭くて冷たい視線を放つ瞳。

それはまるで呪いの証のように、暗い真紅に染まっていた。

R

全てを焦がした炎は陰り、空と海の境界が消える。

光は膝をつき、ただ真理のみが立つ。

槍が星を貫いた。

黒の楔は揺らぐことなく、白い刃をその身に宿す。

小石のままだった世界は、やがて季節を運ぶ風となった。

救済は名乗らない。

無を忘れ、時を知ったとしても、ただあるべき場所へと還るのみ。

救済は名乗らない。

地に堕ち、才を得たとしても、ただあるべき痛みを教えるのみ。

ただLとしてあるのみ。

来るべき約束の時、真理はひとつになる。

創世の時、正しい場所、正しい選択肢へ。

信じるべきあなたの真理へと、あなたを導け。

本を閉じる。

全て目を通したが、Lの記述があるのはここだけ。つまり一カ所だけである。

必要最小限。

彼らしい。

そして、こんな本を書いたというのもまた、彼らしい事だった。

どうやら諦めていないらしい。

それは十分予想範囲内だったし、不自然な事ではない。誰かが目指すとしたら、恐らく彼だろうというのは計算するまでもなく、皆の共通認識だろう。

だから、余計残念だった。

つまりそれが、分かっているにもならないという事。

今の自分の限界。

彼が目指すのもその為だろう。彼もまた、自分の非力さに嫌気がさすのだ。

自分も彼も、そこは同じだ。

だが、全く同じではない。

自分は全く同じだと言えるような立場ではないのだから。

とにかく、サイトLはサイトAを見つけるだろう。そうならば、いずれ彼は彼女に会いに行く事になる。そして、もちろん、会うだけでは済まない。

その時の為に、出来るだけの事をしないといけない。

その出来るだけというのがあまりに少ないから、すぐに底が知れてしまうのだが。

だが、仕方ない。

サイトA。

ふと、その言葉が頭に浮かぶ。

もしかしたら、自分が一番羨ましいのは彼女かもしれない。彼女なら、自分の限界を破ってくれそうな、そんな気がする。サイトLが彼女を求めるのもよく分かる。いや、もしかしたら、彼だけではないのかもしれない。皆が会ってみたいと思っているとしたら、それはサイトA以外あり得ないのだから。

私も会ってみたい。

自分で行けばいいのに。そう言われた事を思い出す。

その通りだった。だが、まだそれは出来ない。

表層に影響が出ないというのはもちろんだが、それに加えてなるべく余力を残しておきたい。

合理的に動きたい。思うままに動くというのは、自分には出来ない。

そう。それが自分の限界なのかもしれない。

少し微笑む。

あの子ならきっと出来るのだろう。

サイトA。

彼女に会うまでは、今のままでいい。きっとそれしかないのだから。

だが、きっと、いつかは。

会うのが楽しみだ。

そう思うと、自然とまた少し笑みが浮かんだ。

折れた槍は溶けるようにして形を失っていった。

瞬の瞳はそれを握っていた男の顔を捉えて離さない。

男は、驚いたのか、怯えたのか、それらが無い交ぜになったような表情をしていた。

瞬にしてみれば、特に驚きはない。自分と目が合った人間は大抵そういう反応をするからである。若い人は特に、その傾向が強い。

男は逃げるように後ろに跳んで距離をとった。十分現実離れた跳躍力だったが、接近するときとは勝手が違うのか、思ったよりも控えめな距離と速度だった。

それを見ながら、瞬は左手の重みを確認する。

何故こんな物があるのか、自分でもよく分からなかった。だが、なんとなく手に馴染むというか、そういう感じがした。いずれにしても、あって困るわけではない。それどころか、この状況ではありがたいとさえ思える。だが、あまりに都合が良すぎるので、突然消えてしまわないか心配になった。

だが、そんな心配をしている余裕も無さそうだった。

やはり、槍で胸を貫かれるというのはかなり辛い事だった。言うまでもなく当たり前の事だが、想像するのと体験するのとは結構違うものだった。立つのがやっとなくらい気分が悪いし、呼吸が苦しい。普段は何気なく息をしているが、今はなんとか集中して、それでようやく呼吸のリズムを作っているという有様だった。血が流れすぎたのか、寒気がするような気もする。

出来るなら、貫かれる前に斬っていれば良かった。だが、今更言っても遅すぎる。何より、瞬には斬ったという覚えがなかった。左手を動かしたという感覚もないし、今に至っては満足に動かせる自信も無かった。

あれこれ考えても仕方ない。

この発想自体が追いつめられている証拠だった。なりふり構って
いられないというわけだ。実際、相手はまだ無傷だが、こちらは周
囲の槍が消えないから外から突かれ放題だし、満身創痍でもある。
この場所についての知識も相手の方が上だろう。

いいところは何もない。また負けるかもしれない。

今度は死ぬかもしれない。

心の中で誰かにそう言われた気がした。

だが、瞬は即答する。

そうだな。いつだってそうだ。

体を確認する。左手には短刀。右手は動かない。足も怪しい。胸
に刺さった半分の槍はまだ残っている。

男は構えるでもなく、こちらを見ていた。

瞬も黙っている。長期戦は避けたいが、こちらから動くのは難し
い。

相手が来た瞬間。そこで勝負するしかない。

男の身体の動きに細心の注意を払う。距離が一瞬で詰められてし
まう以上、至近距離で向かい合っているのと同じだった。気を抜い
たらそこで終わりだ。迎え撃つ方針なら尚更である。

だが、そこで男の声が静寂を破った。

「何故斬れた？」

また質問かと瞬は思った。瞬は答えを知らないし、答える義務も
ない。そもそも、この男は瞬に何を求めているのか。何かそれらし
い事を言ったとして、瞬の言った事を信じるのだろうか。まだ戦う
前ならまだしも、瀕死の重傷を負わせた後に質問するというのは、
あまり意味がある行為とは思えない。瞬ならそんな事はしないだろ
うと思った。

黙って襲ってくればいいのだ。何も言わず、戦えばいい。

それくらいの覚悟があるから、武器を振りかざしているのではな
いか。

甘えている。そう瞬は思った。だが、すぐにこうも思った。
甘えるのは別に悪い事ではないか。

「その槍は・・・」

男は不意にそう呟いたが、後は言い淀んでしまう。
この槍。

瞬は自分の胸に刺さったその異物を感じながら、相手が何を言いかけたのか考える。

少し朦朧としてきた。

だが、ふと気付いた事があった。

仕方がないので瞬は口を開く。

「正しいと思う」

その言葉に、男は目を見開いてこちらを見る。

その反応で、瞬は相手の懸念に触れられたと確信する。

もう少し補足する事にした。

「この世界は汚れている。消そうとする奴がいてもおかしくはない」
瞬の紅い瞳は少しも揺れていない。

嘘はなかった。

紛れもなく本心である。

「間違っていない。確かに正しい」

男は驚いたような表情でこちらを見ている。

本心だと伝わったようだった。だが、嘘とかそういうレベルの話ではないと瞬は思った。

そんなのは当たり前前の事なのだ。良い事ももちろんあるが、悪い事も多い。毎日戦争や犯罪がどこかで起きていて、そして、それらがどうにもならない事も多い。なんとなくだが、この先良くなる事はないという予感が瞬にはあった。瞬にはせいぜい予感でしかないが、もっと賢ければ、或いは悩むのに疲れてしまえば、それを確かな未来として受け入れなければならなくなる。

この男のように。

そうなるときつと辛いのかもしれない。他人の不幸を悲しむよう

な、慈悲のある人間なら尚更である。

証明は波紋の扉。知れば知るほど、人は豊かになって、そして不幸になる。

その言葉も、それを言った人間の顔も、瞬はよく覚えていた。当たり前前の事の方が証明するのは大変なんだよ。

そう言った顔は、笑ってはいたが悲しそうで、とても子供には見えなかった。

瞬は前に立つ男の顔とその記憶の顔を比べてみる。少しくらいは似ているかもしれない。

「正しいなら」

男の声が、瞬の思考を遮った。

「正しいなら、何故邪魔する？俺とお前は同じだろう？」

その語尾は少し乱れていた。

「そうだな」

瞬は思ったままの事を言った。

「何故同じ事をしない！？同じ物を見たはずだ！」
瞬は答えない。

「世界は不幸だ！これから先はもつとだ！豊かになればなるほど、幸福なんかに目もくれなくなる。物を漁るだけで、他の物を、もつと大事な物を推し量ろうとなんてしなくなる。便利になって、それに甘えて、人は駄目になって、そして最後には幸せなんて理解できなくなる！」

男はそう言うってから肩で息をする。

きっとそうだろうなと瞬は思う。だが、それを聞いて瞬には分かった。

この男とあの子の表情は別物なのだ。同じ定理を導いて、同じ事を瞬に言った。だが、本当に言いたかった事は正反対なのだ。

この男は証明していて、あの子はまだ証明できなかった。
なるほど、と瞬は思った。

あの子は本当に天才なんだな。あの時既に、この男よりも頭が良

かったのだから。

普通は逆である。普通は証明できた方が頭が良い。だが、この場合は証明出来なかった方が格段に上だった。

まだ、その先があると見抜いていたのだから。

瞬は息を整える。

改めて確認する。逃げるという選択肢はあり得ない。説得というものも意味がない。戦うのみだ。それが、その言葉を教えてくれたあの子の為でもあるし、家族や友人の為でもあるし、この男の為でもある。そして何より、自分の為でもあった。

そんな事も分かり切っている。

瞬は出来るだけはっきりとこう言った。

「さっさとかかってきたらどうだ？」

男の顔が怒りに染まるのが分かった。

突然始まった年長者2人の睨み合いを、詩織達4人は固唾を呑んで見守った。

明らかに機嫌が悪そうな藤村はもとより、その視線を受け止める美咲も、笑顔に見えるがただならぬ雰囲気だった。詩織の位置からは、はつきりしないが、目が笑っていないというのは容易に想像がついた。

あまりに居心地が悪いので詩織は誰かに話しかけたかったが、適当な話し相手がいなかった。葉月と渚に状況が分かるわけがないし、伊奈祐介は何か知っているようだが、あまり親しいとは言えない。彼の場合、親しくなり過ぎても、関係が変に発展しそうなのが悩みどころだった。

やがて、藤村は祐介を睨みつけてから自分の部屋の中へ帰っていった。

詩織が祐介を見ると、彼は肩をすくめて微笑んだ。

美咲も詩織の方を向く。

「あの・・・」

「入っていいって」

美咲が詩織の質問を先回りして答える。

「え？でも・・・」

一言も言葉を交わしていないのに何故分かるのか。

「変わり者でしょう？」

美咲は笑顔で言った。

確かに変わり者だった。だが、その変わり者の目を見るだけで会話が成立したのだろうか。

本当にただの旧友なのだろうか。

「橘先輩がいて助かりました」

祐介がそう言って、問題の物置のドアまで歩いていく。

「私も久しぶりだったから少し不安だったけど、でも通じて良かったわ」

美咲も彼の後に続く。渚もその後ろに着いて行った。

話についていけない詩織に、葉月が耳打ちする。

「今の、どうやって話してたか、分かりました？」

詩織は首を振る。

「伊奈先輩と渚さんは、分かってたんですかね？」

藤村の同居人の方は知っていても不思議ではない。

だが、渚はどうだろうか。

思えば図書館での一件から、渚は何かを考え込んだままで何も聞けなかった。今日初めて会ってからここまで着いてきたものの、変な出来事に遭遇はしたが、何か解決に向かっているような印象はほとんどなかった。ここで本が見つかったからといって、それで多恵がどうにかなるのだろうか。

何か流されているだけという気がする。ここは特に危険があるというわけではなさそうだし、大丈夫だと思うのだが・・・

「葉月ちゃん、疲れたんじゃない？」

今度は詩織が葉月に耳打ちした。

葉月は微笑んで首を振る。詩織もこの後輩が疲れを見せるのを見た事はないが、それでも、恐らく気を遣っているのだろうと思った。今日はここで終わりにしよう。

詩織はそう決心した。ないとは思うが、ここで何かあっても、今日はこの子を家に帰さないといけない。それにすっかり忘れていたが、葉月は友達が会ったという吸血鬼少女を探しに來ただけであって、多恵の件とは全く関係ない。これ以上付き合わせてもいい事はない。

詩織は葉月に軽く微笑むと、他の3人が立っているドアの前へ歩いていく。

葉月もそれに続いた。

問題の部屋のドアは、何の変哲もない普通のドアである。

だが、祐介はドアノブを調べたり扉を叩いたり、何かを慎重に調べているようだった。要は、まだ妙な仕掛けがないか確認しているのだろう。しかし、傍から見ると、金庫を開けようとしている泥棒みたいだった。

やがて納得したのか、祐介はこちらに向かって頷くとドアノブを掴んだ。

今度は素手で掴んでも平気なようだ。

ゆつくりとドアが開かれる。

鍵穴があるのに鍵はかかっていなかった。詩織はそれに気付いて、セキュリティならまず普通に鍵をかけてほしいと思ったが、口にするのは止めた。

部屋の中は真っ暗だった。

祐介が部屋の照明を点けて、ようやく部屋の中がはっきり見えた。

物置とか書斎とか聞いていたが、詩織の想像とはだいぶ違った。

詩織から見て左の奥には本棚があり、その前にはいくつか大きな段ボールが積んである。その上にも分厚い本があるから、きっとその中身も本なのだろう。そこは最高に普通の物だった。

その隣には、ドラムセットらしき物とギターケースらしき物が置いてある。らしいというのは、ここからだと言われ、段ボールの陰になっていてはつきりと確認できないからで、ほぼ間違いないだろう。これも比較的普通の物だと言える。

だが、その隣にあるのは多少普通ではなかった。それは銀と銅の甲冑である。博物館にあるような表面の装飾が美しい高級そうな品だった。両方とも上半身だけだが、十分な威圧感がある。

そしてその隣にあるのは大きな白馬だった。詩織はどこかで見た事があると思ったが、すぐに思い至る。それは遊園地のメリーゴーランドの一部だった。甲冑の横に並べてあるので、もしかしたら彼

らが乗る馬という事なのだろうか。いずれにせよ、意味が分からないし、なんでこんな所にあるのかはもっと分からない。だが、これらもまだ不自然極まりないというわけではない。

極めつけは、その手前に積み重ねられている大量の金の延べ棒だった。

詩織はきつと偽物だろうと思った。というより、偽物であって欲しいと思った。もし本物だったら、相当な額のはずだから、真つ当な手段で得たものとは思えない。

だが、その金色の輝きと、上に掛けられた高そうな布からは、嫌な予感しかしなかった。

女性陣4人は固まった様に動かなかった。言葉は交わさなくとも、皆同じ事を思っているだろうと詩織は確信していた。

まずい物を見てしまった。

「えっと」

祐介が不意にそう言ったので、視線がそこに集中する。

唯一部屋の中に踏み入れていた祐介は注目されて少し戸惑っている感があったが、それほどいつもと変わらない様子だった。少し頬を掻いてから、彼は言葉を続けた。

「やっぱり、俺が探すんですかね？」

何も考えていなかった詩織は答えられなかった。

「あ、私も探しますよ」

葉月があっさりと言った。その声は普段通りである。本当に凄い心臓を持っていると、詩織は感心した。

「いや、でも、服が汚れるよ？」

祐介がそう言って部屋の中を示す。掃除してないのが明らかなくらい、埃が溜まっていた。

「でも・・・」

「いいっていいって。服も髪も汚れるし、それにこんな所に入れて喉でも悪くなったら、それこそ瞬に文句言われるし。それで、何て本でしたっけ？」

「待つて」

そう言ったのは渚だった。間髪入れずに、彼女はこう言った。

「そこから出て」

「はい？」 祐介は聞き返す。

「部屋から出て。危ないから」

「危ない？」

彼がまた聞き返した時だった。

金属の転がる音がした。そちらを向いて確認すると、金の延べ棒の横に、銀色で半球状の物体が転がっている。まだ動いているから、転がったばかりらしい。

その上に目を向ける。

そこにあるのは立派な銀の甲冑だが、今は多少変化していた。

頭の上半分が切り取られたように無くなっていた。

祐介がゆっくりと渚に視線を戻す。

渚は黙って頷いた。

それを見てから、祐介は何故か両手をあげて、ゆっくりと部屋から出てきた。

「誰かいるの？」

詩織は祐介に聞いたつもりだったが、答えたのは渚だった。

「いいえ」

そう言って、部屋の中にすたすたと入っていく。

詩織は何か言おうとしたが、その前に葉月が言った。

「大丈夫？」

彼女の心配そうな声に、詩織は驚いた。

渚は振り返って、そして微笑んだ。

「ええ。私強いから」

その微笑みは最初に会った時の大人びた優しい笑みだった。いつもの彼女だった。

「このドア、開けないでね」

渚はそう言うと、詩織の方を向いた。

「詩織さん」

返事をしようと思ったが、それより早く渚の言葉が続いた。

「千村さんなら大丈夫だから。待っていてあげてね」

なんでそんな事が分かるのか。

聞こうと思った時には、ドアはもう閉まっていた。

あっという間の事だった。

廊下に残ったのは哑然とした空気と、それを発する人間達だけだった。

「・・・どういう事？」

最初に言葉を発したのは美咲だった。

詩織はその声を聞いて、何かの許可が出たような気がして、口を開いた。

「さあ・・・」

「彼女、部屋の中で何をしてるの？」

美咲の質問に、誰も答えられなかった。

「とりあえず、ドアを開けちゃダメみたいです」

その葉月の発言に、他の3人は顔を見合わせる。

「開けちゃダメって言われても・・・」美咲は困った顔をする。

「危ないらしいし」詩織は頷く。

「ここに女の子1人閉じこめるってのは・・・」祐介も困り顔だった。

「あ、ダメですよ」

葉月はドアを背にしてそう言った。

それを見て、他の3人は思案する。

詩織にしてみれば、開けた方がいいのか悪いのか、判断がつかねるところだった。本当に危険なら渚を一人にはしないが、誰もいない物置にどんな危険があるというのか。中で渚が何をしているのか気になるので、少し覗いてみるのも手だが、本人が開けないで欲しいと言った手前、なんとなく気が引けた。

困ってしまって、詩織は美咲を見た。

美咲は少し小声になって言った。

「中で鶴にでもなってるのかしら」

「まっさかぁ・・・」

綺麗で浮き世離れしているのは間違いないが、それはないだろう。

第一、この場合、誰に恩返しするのだろうか。

「そうじゃなかったら・・・実は税務署の人だったとか？」

「税務署ですか？」

詩織にはよく分からない。

だが、祐介には分かったようだった。

「さっきのあれですか？個人的には別に冤罪でもいいから、脱税って事にして持って行って欲しいんですけど」

祐介の顔は笑っていた。

そこまで聞いて、ようやく詩織にも話が見えてきた。

「さっきのあれ・・・本物？」

「教えてもいいけど・・・義江さん、本当に知りたい？俺は正直、知って後悔してるんだけど」

全員が押し黙った。

しばらくしてから、美咲が口を開く。

「今とはとにかく、渚さんよね。やっぱりちょっと覗いて見た方がいいと思う」

「ダメです」

葉月が即答する。真剣な表情だった。

美咲と詩織は顔を見合わせる。

「とりあえず、ちょっと音でも聞いてみるっていうのは・・・」

祐介が突然そう言った。

なんとなく、男の祐介がそう言ったのが気に入らなくて、詩織は少し睨んだ。

それを見て、祐介は慌てて手を振る。

「いやいや、デリカシーが無かったら謝るけど・・・心配なら、それだけでもちよっと様子を窺ってみたらってだけ。俺は向こうにい

るからさ」

祐介はそう言って、ドアとは反対側の壁にもたれ掛かった。

「まあ、そうね」

美咲が軽く同意する。詩織も頷いた。

葉月はドアに背中を押しつけて言った。

「でも、開けたらダメですからね」

徹底抗戦の構えだ。

「そうね。もし機織りの音が聞こえたら、大人しく退散しましょう」

美咲は可笑しそうにそう言って、ドアの前に移動する。

詩織もそれに続いた。

2人でドアに耳を押し当てる。

何も物音がしていないのか、或いは防音性能がいいのか、何も聞こえてこない。

だが、耳が慣れてくると、うつすらと渚の声が聞こえてくる。

何を言っているのかは分からないが、誰かと話しているようだった。

詩織が美咲を見ると、彼女もこちらを見て頷いた。

そのまま部屋の中の音に集中すると、次第に何を言っているのか認識出来るようになってくる。渚の声がよく通るのも幸いだった。

「目障りなの」

詩織は息を呑む。

最初に聞き取れたのはその言葉だった。

相手が強く踏み込むのが、体の動きで分かる。

何かするとしたらこの瞬間しかない。相手が動いてからでは遅い。飛び道具のない瞬にしてみれば、その位置から槍投げされるのが最も困る。だが、それはないだろうと思っていた。挑発されたら、すぐさま飛びかかってくるような性格なのだ。ただの感想で、よく喋るなど言っただけなのだが、その時の反応で瞬にはそれが分かった。今度はあからさまに挑発したから、間違いなく来るはずだ。

瞬は刀を握った左手を無造作に振るった。

刃筋さえ通っていればなんでも斬れる。そう言っていたのは昔近所に住んでいた爺さんだったが、あいにく具体的な技術は何も教わっていない。居合いをする姿を見た事はあるが、知識としてはそれだけである。

だが、刃筋なんて通せなくても、もしかしたら偶然通せたのかも知れないが、周囲の槍は綺麗に斬れた。

槍は斬れたそばから消えていく。

これで自由に動ける。

その時には、男は目の前にいた。

いつの間にか両手で槍を握っている。

突きの構えだ。

また心臓狙いだろうか。

既に刺さっているのに。

まあいい。

瞬は体を捻るように左にかわす。

同時に左手を振る。

男の持つ槍の中央が、面白いように綺麗に斬れる。

自分がやったとは思えなかった。

瞬の左手だろうか？

動かしているという感覚がない。

だが、そもそも利き腕じゃないしな。

いつも右手ほどは思ったように動かないものだ。

斬れた槍は、消えていく。

瞬は男の顔を見た。

怒っている？驚いている？それとも、怯えている？

だが、混ざっているわけじゃない。

迷っている。

そうか。

瞬は心の中でそう呟いた。

そして。

刀を投げ捨てた。

悪いな。

心の中でそう謝っておく。

もちろん、目の前の男にではない。

もっと大切に立派な物に。

それも瞬にとっては、だが。

相手の顔は一瞬で驚きの色が濃くなっている。

瞬は踏み込んだ。

足はまだ言う事を聞いた。

相手の懐に入る。

無防備だ。

瞬の瞳が男の目を捉える。

今度はまた少し怯えている。

その顔を、瞬は。

左手で思いつき殴った。

男は後ろに倒れる。

拳が綺麗に入った。

上手くいった。

瞬がそう思ったときだった。
胸のつかえが取れた気がした。
心理的ではなく、物質的に。
同時に、頭が真っ白になる。
気分が・・・
瞬は膝を着いた。
だが、それもはつきりしない。
何も見えない。
急にどうしたんだ？
さっきまで、ちゃんと動いていたのに。
言う事を聞いていたのに・・・
瞬は床に倒れた。
どうやら俯せらしい。冷たい床の感触が、わずかだが感じられる。
そういえば・・・
胸に何もないな。
ああ、そうか。
どうやら、刺さっていた槍が消えてしまったらしい。
なるほど。
本当に、栓の役割をしてたんだな。
無かったら、こんなに気持ち悪いのだ。
こんな状態なら。
仕方ないか。
それにしても・・・
結局、一発殴れただけか。
情けないな。
だが、まあ。
出来るだけ、やった。
弱いのは仕方ない。
負けるのも仕方ない。
それでも・・・

役目は・・・
瞬の意識は、そこで途切れた。

渚は埃まみれの物置の中を音もなく進む。

もちろん居心地のいい場所ではない。スリッパを履いているから足はまだいいが、舞い立つ埃は見るだけで嫌な気分になる。ある程度は防ぐことが出来るが、体に付かなければいいという物ではない。この代償は誰かに払ってもらうしかない。

もちろん、その相手は決まっていた。

渚は本棚の前に積まれている段ボールの前で立ち止まる。その上に無造作に積まれている数冊の本。忌々しい感覚は、間違いなくその一番下の本からだった。

手っ取り早く消えてもらおう。

そう思った時、前触れもなく積まれた本が動き出した。滑るようにバラバラと床に落ちる。

箱の上に残ったのは、一番下にあった本。大きいが、白地に黒い文字が書いてあるだけのシンプルな本。

タイトルは、無名の救済。

渚は少し意表を突かれた。

どうやら挨拶くらいはする気があるらしい。

本は独りでにページをめくっていく。

不意にそれが止まると、渚にははっきりと声が聞こえた。

「自ら来るとは思わなかった」

かなり高いが男の声だった。

「私も、まさか喋るとは思わなかったわ」

渚の口調は落ち着いている。

「少しは感服したかい？」

「いえ、全然」

渚は即答した。

「もう少し素直になったらどうかな？」

「技術的な事じゃないの。挨拶するなんて、そういうのが恥知らずっていうのよ」

相手は何も言わない。

「だいたい、こんな物を作ってまだ神様を気取るつもりなの？ 私に直接会いに来る事も出来ないくせに、未練がましいにも程があるわ。それにね、こんな物があるお陰でこちらは大迷惑なの。無関係な人が何人も犠牲になってるんだから。神様を気取るなら、せめてもう少しスマートにやってももらえない？」

そこまで一息に言ってから、渚は最後にこう付け足した。

「目障りなの」

渚は大きく息を吐いた。

言ってしまった。少し後悔したがもう遅い。

しばらく静寂が続いたが、やがて相手が口を開いた。

「意外だ」

渚は眉をひそめる。

「何が？」

「いや・・・もっと、違う姿を想像していたからね。そんなに弱々しいとは思わなかった。なんていうか、女の子みたいじゃないか」
さすがに腹が立った。

「女の子なのよ。それに、弱いのはお互い様」

「ひょっとして、僕の助けが必要かい？」

「それ、冗談？全然笑えないけど」

渚が低い声で言うのと、相手は可笑しそうに笑った。

「独りで笑わないで」

「・・・そうだね。だけど、君が女の子ならば、僕の助けを必要としても問題はないだろう？」

「私にも選ぶ権利があるの」

「そう。そして、全ての人にもね」

渚は本を、本の向こうの彼を睨んだ。

彼は話を続ける。

「僕に触れて、それをどう受け止めるかはその人次第だ。触れるのを拒絶する事だって出来る。僕の事を知っていても、触れようとしない君のように」

「その言い方が未練だって言ってるの。私はあなたが気に入らないだけ」

「同じ事だよ。だいたい、君の言い分は矛盾している」

「どこがよ？」

「僕が神様じゃないなら、本を出したくらいで文句を言われる筋合いはないだろう？」

「言ったでしょう？ 迷惑してるの」

「必要な事だ。少なくとも僕はそう判断した。君こそ、このまま何もしないつもりなのか？」

「私がしなくてもいい事でしよう？」

男は黙った。

渚は少し語調を落として、諭すように言った。

「私達が気にする事じゃない」

その言葉に相手ははつきりと言い返す。

「僕達の役目だ」

今度は渚が黙った。

言うべきなのか迷った。言わなくても彼はどうせ分かっている。

だから、言っても言わなくても同じだった。だが、それでも迷ってしまうのだ。

心の中がもやもやする。人間の心は呆れるくらい思い通りにならない。

「挨拶は終わりだ」

彼はこう付け加えた。

「君を必ず、僕の物にする」

愛の台詞に聞こえない事もない。だが、そうではなくて、文字通りの意味だった。

渚は仕方なくこう聞いた。

「仮に私を手に入れたとして、本当に上手くいくと思ってるの？」
「当然だ」

男は即答した。

「自分の姿を鏡で見てみた？」

渚の質問に男はまたもすぐに答えた。

「サイトMには出来た。僕に出来ない道理はない」

「あの子は・・・きっと元気でやっているわね。他の誰よりも」

「彼女とは違う。僕も君もね」

「違うかどうか、あの子に聞いてみたら？」

男はそれに答えず、しばらく間を置いてからこう言った。

「君は僕の一部になる。これが僕を拒絶した君に与えられる、唯一の慈悲という事になるね」

しっかりとした口調だったが、どこことなく悲しい言い方だった。

渚は小さく溜息を吐く。

「本当に神様気取りなのね」

「僕達より、神様に近い存在はないよ」

「どんなに近くても、近いだけでしょ？」

「そうかもしれない。だけど、もとより僕達は神様とは違う。だからアナザーサイトなのだからね」

「同じ事よ」

「目指す場所が違う。宗教は誰が作ったにせよ、その本質は人の為にある。僕達は宗教の一部ではあるが、本質じゃない。人を救う事はあっても、それは精々欠片程度の事でしかない」

「知ったような口をきくのね」

「知っているからね。僕を誰だと思っている？」

物置は静かになった。

渚には言うべきか迷っている言葉があった。相手が神様なら、きつと言えただろう。或いは自分が神様だったなら。だけど、渚は人間だった。

言葉一つを、言うか言うまいか、迷ってしまうような。
弱い人間だった。

そして、相手も。

だから、どうしても言えなかった。

「目的は済んだ。僕が言うまでもないと思うけれど、その本は好きにしたらいい」

沈黙を破ったのは、相手の方だった。

渚の心情を知っているのだろうか。知らないとしたら、とんだ神様気取りである。

人間にだって、小さな人間にだって、そのくらい分かるのに。

「さようなら。サイトA」

「サイトAじゃないわ」

渚がやっと絞り出したのが、その言葉だった。

「私達はもうアナザーサイトじゃない」

相手はしばらく待ってから、こう言った。

「そう思いたいなら、それでもいい。だけど・・・」

音もなく、本の真上に黒い槍が2本出現する。

床に平行に、そして、穂先は渚の方を向いていた。

それが飛んでくるのも一瞬だった。

だが。

次の瞬間には、槍は真っ二つに折れて床に落ちる。

乾いた音がたつと同時に、埃が小さく舞う。

その埃も、渚の体には触れない。避けるようにして、最後には床にまた積もった。

「・・・それでも、普通の人間とは言えない。いや、普通の生物ではない、かな。生命ではあるけどね」

渚は何も答えない。

「僕達がいたらどうなるのか、考えなかったわけがない。まず心配したのがその事だったはずだね。他の誰よりもサイトAを理解している君はどうなのかな？」

「・・・はつきり物を言うのね」

人の気も知らないで、と心の中で付け加えた。

「当たり前だ。僕は、救済とか使徒とか、いろいろ言われるけれど、その本質は真理。常に正しい事を言い、決して嘘は言わない」

「それだけじゃないくせに」

「君だってそうだよ。君はよく天使だと例えられるけど、それだけが君の顔ではないだろう？」

その通りだった。今の自分もそれは同じだ。

「つつい長話してしまうね。じゃあ、今度こそさようならだ」

「そうね。まあ、いいわ。あなたを振り返りにすればそれで済むんだから」

「出来るならね」

その直後、突然本に大きな穴が空いた。

「・・・乱暴だね。女の子なら、普通に燃やしたらどうかな？」

「大きなお世話よ。だいたい、それが普通なの？」

「本を処分する方法の中では、そこそ一般的だね。まあ、一番いいのは、捨てないで、誰かにあげるとか、どこかに寄贈するとかじゃないかな」

「そんなの出来るわけじゃない・・・というか、この本、他にもあったりしないでしょうね？」

相手の返答は凄くあっさりしていた。

「あったらいけないのかい？」

「当たり前でしょ！何度も言ってるけど、迷惑してるんだから」

「こちらもしき言ったけれど、僕の本を読んだ人間が何をしようが、僕に責任はないと思うんだけど・・・」

「普通の本ならそういう事言えるかもしれないけど、この本は違うでしょう？」

「違うかな？」

「普通の本は喋ったりしないわよ！だいたい、この本は何の本なの？」

「神話みたいな物かな」

「しんわぁ？よくそんな物が堂々と書けるわね」

「それは神話を書いてる人に失礼だよ」

「あなたが神話を書くこと自体が、神話を書いた人に失礼よ。だいたい、内容が理解されてなかったらしいし。ジャンルとかの詳細が不明って事になってたもの」

「まあ、サイトをLを理解出来なければそうだろうね」

「そんな本をどうやって・・・あ、なるほどね。だいたい分かったわ」

渚は少し微笑む。

「分かったなら、それでいい。さすがに察しがいいね」

「そうね。あなたのやり方はだいたい見当がつくもの」

自分が少し笑っているのに気づいて、渚は驚いた。

何故だろう。相手とは相容れない関係で、大嫌いなはずだった。

今日、詩織から彼の存在を匂わされた時には、嫌な顔を隠せなかった程だ。分かり合おうとしても、分かり合えない関係。その事は揺るがしようなない事実だった。

でも、今は違った。

確かに気に入らない所はある。というより、許せないやり方を使うのだから、好きになれないのは当然だった。

だけど、今は絶対に分かり合えないとは思えなかった。

法則が曖昧になったとは言える。また、立場が共通するところもある。

しかし、それだけだろうか。

何か他にあるような気がした。だけど、それが何かは分からなかった。

ただ、分からないだけだろうか。それとも何も無いのだろうか。相手はどうなのだろうか。

「では、さようなら、サイトA。確信、或いは祝福の天使。そして・・・」

「そんなのいいわ・・・でも、そうね」

渚は微笑んだ。

「あなたを返り討ちにするまでは付き合ってあげる。でも、その後は違う名前を名乗ってもらうから。今から考えておいて」

「負けた時の事を考えろと言われてもね」

「別に今から名乗ってもらってもいいんだけど」

「そう言うくらいだから、君にはもう名前があるんだろうね」

「普通はあるの。無いのはたぶんあなたくらい・・・とも言いきれないけど」

彼は軽く笑ったようだった。

美咲は少し思い出すようにしてから、こう言った。

「さようなら、サイトL。救済、或いは真理の使徒。裏は・・・いいわよね？」

「ああ。僕も言い損ねたしね」

天使と使徒。

それが、2人の表の顔だった。

傍から見れば非常によく似ていて、それなのに正反対な2人。分かり合えないはずの2人。

「では、よい戦いを」

男の声はそれっきり消えた。

戦いか、と渚は心の中で呟く。

どこであつても、正面から戦えば、渚が負ける筈はない。だが、向こうもそれは承知だろう。何かしら彼らしい手を、それこそ、最も有効で、かつ確実な手を使ってくるはずだ。もっとも最善の手を使うのが、サイトLである何よりの証拠と言える。

それでも、逃げるわけにはいかない。

それに、ただ相手を倒すのが、渚の理想ではない気がした。彼の言った事は、確かに真実だったのだ。それを解決してみせてこそ、真の勝利という物だろう。

渚はふと大穴の空いた本を見る。

意識を呼んで、軌跡を想像する。

すると、本は突然、弾かれたように高く舞い上がった。渚の頭上を越えて、天井すれすれの放物線を描く。

そして、入り口のドアの前に綺麗に落ちた。

だが。

その時には渚の姿はなかった。

ドアも窓も開けずに、一步も動かずに、彼女は消えた。物置の中は無人になった。

真山は座り込んでいた。

その視線は、数メートル前の床に注がれている。

俯せに倒れた銀髪の少年。その表情は陰になって見えない。そして、ぴくりとも動かない。彼の体の下にはおびただしい量の血が溜まっていた。

死んでいる。最初は、それを確かめる時間だった。

いつまでたっても動かない。だが、もしかしたら急に動き出すような気がして、目が離せなかった。昨日だって、確かにこの手で殺したはずなのだ。だが、今日は平気な顔をして戦っていた。どういう理屈かは知らないが、とどめを刺し損ねたに違いなかった。また動き出すような事があれば、すかさず息の根を止めないといけない。近づいて行って確かめる手もあるのだが、そんな気にはなれない。もしかしたら、そこで襲いかかるつもりかもしれないではないか。さっきの彼の戦術も同じ様なものだ。

ここでじっと待つ。絶対に逃がさない。逃がしてはならない。

そうやって見守っていたが、相手は動かなかった。

どれくらい経ったのかは分からないが、やがて真山は気づいた。

もう彼は動かない。

そう思った時の彼の心は、一言では言い表せなかった。ホツとしたような気もするが、そう言い切れるほど安心でなかった。怖くなったような気もするが、そう言い切れるほどは震え上がらなかった。戦って勝った自分を誇ったような気もするが、そう言い切れるほど胸が熱くはならなかった。

結局、真山には昇華出来なかった。

ふと、殴られた頬が痛んだ。

思えばこの男は何がしたかったのだろう。この場所に来て、こち

らの邪魔をして、話しにも応じなければ、挑発までしてきた。それなのに、最後はこちらを殺そうとしなかった。

あの刀なら殺せたはずなのに。

あんな物、防げるわけがない。

真山はふと、その刀を見たくなった。

あれはどこにいっただろうか。彼が投げ捨てたのは、どちらの方だったか。

しばらくぶりに視線をさまよわせる。

その時、やっと真山は気づいた。

心臓が大きく脈打つ。自分が気付かなかったのに驚いた。

誰かいる。

そう思ったと同時に声が聞こえた。

「綺麗ね」

真山は中腰になり、声がした方向へ振り向く。

そこに立っていた人物を見て驚いた。

「サイト、A・・・」

思わず口から言葉が漏れた。

そう呼ばれた銀髪の少女は振り向くまでもなく、既にこちらを向いていた。

だが、真山は気づいた。

サイトAじゃない。

よく見ると、あの図書館の少女よりも顔立ちがはっきりしているし、肌もより白い。逆に、瞳の色はこちらの方が濃かった。ついでに言えば、あちらは黒いスーツ姿だったが、こちらはこれでもかというくらい白くめの私服姿である。ストレートロングの銀髪や年格好はそっくりだが、それ以外は別人だった。

誰だろうか。

彼女の両手の平の上には、あの短刀が置かれている。

「魔除けだわ」

「魔除け？」真山は聞き返す。

「女の子が産まれたら、これを抱かせるのね。健やかに育ちますようにって」

初耳だったが、それがどういう意味を持つのか、真山には分からなかった。

「どういう意味だ？」

「だから人を斬るのに使いたくなかった・・・のかもね」
少女の目が倒れている男を捉える。

その表情は悲しんでいるようにも見えたが、そう言い切れない何かがあった。それが気になって、真山は少女の顔を見つめる。その若さをして既に、少し触れがたいような印象もあるが、間違いない美しい少女だ。

少女の目が瞬く。

真山は立ち上がった。

「何者だ？」

その言葉に、少女はこちらを向いた。

「何者って？」

「サイトAの仲間か？」

「どうしてそう思うの？」

「そうでなければ、わざわざこんな所に来ない。こいつを助けに来たか、それとも、最初から捨て駒にする気だったのか。ともかく、こいつの関係者だろう？」

「サイトLの関係者かもしれないわ」

そう言われて、真山は黙った。確かにその通りだった。ここに入るにはサイトLを知っていなければならぬ。だから、そちらの方を疑うのが自然だった。

だが、似ていたのでついサイトAを連想してしまった。銀髪なのも良くなかった。

まさに先入観だった。

「ひょっとして、あの子に会った？」
少女が聞く。

凶星を指されて、少し驚いたのが顔に出た。それだけでもうばれてしまっただろう。

今更遅いが、真山は視線を逸らす。

この少女はどこかおかしい。全て知っているような言い方だし、何より、サイトAの事をあの子呼ばわりしている。自分はサイトLの事をそんな呼び方は出来ない。

真山は視線を戻して言った。

「お前は何者なんだ？」

少女の回答は素っ気ない。

「私は、あの子を探しているだけ」

「サイトLの為に？」

「いいえ」

「じゃあ、何故探す？」

彼女は少し考えてから言った。

「やっぱり、会ってみたいからかしら」

「何？」

真山は思わずそう口に出していた。その口調は十分攻撃的だっただろう。

「そういう貴方は、サイトLの手伝いをしているの？」

「ああ」

「どうして？」

真山は即答した。

「正しいからだ」

その言葉に、少女はすぐに質問を返した。

「サイトAは手伝わないの？」

その質問には即答出来なかった。

「・・・何故そうなる？」

「何故って・・・」

少女は口を噤んだが、やがてこう切り出した。

「サイトAが、なんて呼ばれているか知ってる？」

そんな事は知る必要もない。

真山が黙っていると、少女は言葉が続けた。

「サイトAは、ひらめきを確信に変える者。或いは祝福を告げる天使、または女神。海や森や砂漠、そして宇宙、目印の無い場所を歩く旅人が楽園へたどり着いた時、それを讃えるのが彼女」

少しだけ、何かが心に引っかかった。

「それがどうした？」

「祝福の天使。それが彼女の表の顔」

「表？」

「そう」

少女は真山を真っ直ぐに見据える。

「彼女にも裏の顔がある。それは、翼を折る悪魔」

真山は、何故か居心地が悪い思いがした。

それを知ってか知らずか、少女は構わず話を続ける。

「彼女に認められた者は楽園に入る。だけど、決してそこから出て行かない」

真山は唾を飲み込んだ。

少女の口調は淡々としている。

「長くて難解な道を抜けて楽園にたどり着いた人は、それに見合った素晴らしい足や翼を持っている。未開の地を見る時の目は常に輝いている。だけど、彼女はそれを奪う。彼女に魅入られた者は、歩みを止め、空を飛ぶのも止め、外を見るのも止める。やがて、歩く事も飛ぶことも出来なくなり、楽園にとどまる。結果、彼女の周りには邪魔になって折れた翼が積み重なっていく」

そんな場所を、真山は見た事がある気がした。

少女は話をこう締めくくった。

「その時初めて、楽園の人々は彼女に翼がない理由に気づく。そして、天使と呼ばなくなる。代わりにこう呼ぶの。翼を折る悪魔だって」

お伽話だったら、鼻で笑えたかもしれない。

だが、真山には分かった。この話は抽象なのだ。

「不要だ」

真山は唐突に言った。

少女は黙っている。

「そんな奴なら、消えてなくなればいい。いたところで役には立たない。楽園とは名ばかりの、虚しい場所が増えていくだけだ」

「そんなに嫌いなのか？」

「反吐が出るな」

「でも、貴方だって、彼女の祝福を受けたはずでしょう？」

「昔の事だ」

真山は少女を睨んだ。

「今はもう違う」

少しだけ表情を陰らせながらも、少女は真山をずっと見ている。

だが、やがて視線を外して言った。

「これ以上は私には言えない。ここまでは入り口程度だから誰でも知っている。でも、ここから先は、私の口では正確に言えない。だから、自分で知るしかない」

「知る必要はない。俺はもう捨てた」

「本当に捨てたのなら、あなたにサイトAは見えない。だけど、貴方には、あの子が分かったのでしょうか？ だから、私はここまで言っているの」

「大きなお世話だ」

真山は槍を出した。それを右手で握る。

それを見ても少女は驚かなかった。

当然だろうと真山は思った。恐らく自分よりも、多くの事を知っている。そして、その言動から、こちらの味方でないのは明らかだった。少なくともサイトLの味方ではない。今の自分にはそれが全てだった。

少女は自分の手の上にある短刀を見て、そして血塗れで倒れている男を見た。

「もしかしたら、彼は知っているかもしれないわ」

真山は答えない。

「だから、貴方を・・・」

少女の言葉が途中で止まる。

彼女は目を見開いていた。明らかに驚いている。

真山は少女の視線の先を追った。

そこに。

男が立っていた。

大怪我をしているとは思えない程、自然な体勢。それが血塗れの制服とミスマッチだった。

銀の髪。冷たい相貌。

そして、紅い瞳。

その瞳は、生きているのか死んでいるのか、分らないくらい静かだった。

その静かな視線は、まっすぐこちらを捉えている。

間違いなく自分が殺した男だった。

真山は声を上げるのも、構えるのも忘れて、その男を凝視した。

生きているはずがない。いや、仮に生きていたとしても、普通に動けるとは思えない。第一、起きあがったなら、音くらいしそうなものだ。それなのに、全く気づかなかった。

まるで幽霊が起きあがったみたいだった。

だが、それだけではなかった。

その男の足下。

血溜まりが出来ているその場所が紅い。だが、血が紅いのではない。

その上が紅い。

真山はそれを理解するのに時間がかかった。

燃えているのだ。

血溜まりから炎が出ている。

見ているうちに、まるでガソリンみたいに大きく燃え上がっていく。

何が起きているのか、真山には分からない。

その時、声がした。

「驚いたわ」

真山は少女の方を向いた。

だが。

いなかった。

少女のいた場所は、既に大きく燃え上がっていた。

すぐに真山は周囲を見回す。

一面火の海だった。

どこを見ても、既に大きな炎が、壁や天井を蹂躪していた。

一瞬のうちに、予兆も何もなかった。

すぐに、炎は真山の傍までやってくる。

熱い。

息苦しい。

だが、どこか懐かしい。

いや。

とにかく止めなければ。

真山の視線が最初に戻る。

炎の向こうに銀の髪が見えた。

2人だけ。

ここには2人しかない。

自分じゃないなら、後は自ずと決まっている。

真山は槍を出す。

だが、その瞬間に槍は燃え尽きてしまう。

無駄か。

そう思った瞬間だった。

真山は炎の中に飛び込んだ。

近づいて倒す。

そう決心して敵の顔を見る。

銀の髪。冷たい表情。

紅い瞳。

それを睨み返す。

敵の瞳は、周りの炎よりも紅かった。

A

「どうしたの？」

びっくりした。

だって、急に声がしたから。

「お友達と喧嘩したの？」

優しい女の人の声。

でも、顔は見えない。

涙って、拭いても拭いても、出てくるから。

「・・・うん」

うまくしゃべれない。

「そう・・・」

女の人は私の隣に来て、背中を撫でてくれた。

そしたら、また涙が出た。

なんでか、分からないけど。

女の人は何も言わなかった。

待っててくれてるんだ。

涙が全部、出ていくまで。

出ていってから、私は話した。

話したかったから。

「・・・私の事、大嫌いだって」

思い出したら、また、悲しくなる。

そしたら、女の人がこう言った。

「私もよく言われるの」

えっ、と思って、その時初めて顔を見た。

びっくりした。

凄く綺麗な髪。

思ったよりずっと若い。

もっと年上だと思ってたのに。

女の人はにっこり笑った。

「私もね、大嫌いだってよく言われるの。悪魔みたいだって・・・悪魔って分かる？」

なんとなく分かった。

会った事はないけど。

「どうして？」

こんなに綺麗なのに。

「仕方ないの。でもね。私、信じてるから」

「信じてる？」

「そう。きつとまた、私に会いに来てくれるって」

よく分からなかった。

「お友達の事、嫌い？」

それも、よく分からない。

だけど、なんとなく首を振った。

嫌いっていうほど、嫌いじゃなかったから。

「好きなら、仲直りしてあげてね。その子の事、分かってあげてね。そうしたら、前よりもっと仲良くなれるから」

「本当？」

「ええ」

とっても優しい顔だった。

目がとても綺麗。ビー玉みたいに透明で、真ん中に綺麗な模様が
あるみたいだった。

「お姉さん、どこから来たの？」

聞きたくなった。どんな所で生まれたんだろう。

「私、日本人なの」

「本当？」

「ええ」

「私も、お姉さんみたいになれる？」

驚いたみたいだった。

そんな変な事を言ったかな。

「お友達が来たみたい」

そう言われて、公園の入り口を見ると、本当にいた。もう一度、お姉さんを見ると、また優しい顔だった。

「お友達の気持ち、聞いてあげてね」

「見てくれる？」

「ええ。ずっと見てる」

私は、駆けだした。

相手の前まで、すぐだった。

立ち止まって、顔を見る。

ちゃんと聞かなくちゃ。

その時、分かった。

目が赤い。

泣いてたんだ。

「ごめんね」

気づいたら、そう言っていた。

あれ。

私が悪いんだっけ。

どうだったかな。

でも。

「ごめんね」

向こうも謝ってくれた。

そっか。

もうどうでもいいよね。

そう思うと、笑顔になれた。

相手も笑顔になる。

良かった。

前より仲良くなれたかな。

「誰と話してたの？」

そう聞かれて、私は振り返った。

ありがとうって言わなくちゃ。
だけど。

誰もいなかった。
どうして・・・

ずっと見てるって言ったのに。
ずっと？

「仲直りできた？」

声が聞こえた気がした。

遠くじゃなくて、近くじゃなくて。
外じゃなくて。

そっか。

ありがとう。

心の中でそっと呟いた。

体の芯が少しだけ温かくなった気がした。

膨大な敷地を持つ大学構内の北東の果て。

そこが農学部領域だった。

敷地が広いからか、予算がありすぎるのか、或いは、皆が言うようにここがそこそこの田舎だからなのか、十分植物園が開けるほどの面積が、木や花や植物によって埋め尽くされている。他にも酪農や水産関係のスペースや研究施設があり、もちろん学生が講義を受ける建物や、小さいがレストランや博物館等の展示スペースもある。それらを全部合わせると、ちょっとした町や村が作れる程の広さだった。

その広さから言えば、ほんの一部でしかない研究棟の屋上。

そこで屋上緑化の研究の為に、いろいろな土や設備を用いて、実際に植物が植えられていた。

その場所に、荒瀬瞬と伊奈祐介の姿があった。

瞬の手には、これでもかという程使い込んだらしい緑色のじょうろが握られている。

「屋上緑化っていうのはさ・・・」祐介が言った。「いちいちそうやって水をやらないといけないものなのか？」

「いや」瞬は軽く答える。

「じゃあ、なんでお前が水やりしてるんだよ」

「ただの趣味だ」

実際、瞬が水をやっているのは、屋上の所々に置かれているプランターだけだった。

「趣味ってお前のか？」

「いや。チューターに頼まれた」

「あの腰の低い先生だっけ？」

「まだ助手だけだな」

「そんな事はいいんだよ。その先生が、なんでわざわざお前に頼むんだよ」

「挨拶に行ったら忙しそうだったから、手伝ってるだけだ」

「自分で立候補したのか？本当に物好きだよな」

「いつもお世話になってる。それに、こういうのは嫌いじゃない」

そう言うってから、瞬は可愛らしい小さな白い花に水をやる。だが、もちろん、それで微笑んだりはしない。好き嫌いは判別できないが、祐介から見ても、瞬の冷たい容姿で花に水をやる光景は十分アンバランスだった。どこぞの修道女がパチンコをしているような、そんな感じだ。

意外性がモテる条件だとしたら、瞬は絶対モテるはずだと祐介は確信していた。そのままヴァンパイア映画に出られそうな奴が、農学部志望の学生なのだから。だが、実際にはそんな事はなく、大抵の女子は怖がって近づかない。興味があっても、遠くから見ている。そんな有様だった。瞬の方も全く愛想がないので、ある程度は仕方がないが、親友として、多少将来を心配しているのが正直なところだった。

心配したところで、どうにかなるわけではないのだが。

祐介は本題に入る。

「そろそろ聞いてもいいか？」

「何をだ？」

「決まってるだろ。3日前の事だよ」

瞬は3日目の晩、図書館の中に倒れているのを発見された。見つけたのは図書館の職員で、すぐ近くには、真山という大学院生も倒れていた。2人とも意識が無かったが、外傷もなく、病院に運ばれたが何も異常は無かった。最近頻発していた事件と、ここまでは同じだった。

だが、瞬は発見された1時間ほど後に目を覚ました。

これには、周囲の人間のみならず、申し訳程度には捜査していたらしい警察も興味を示した。他の被害者は最低でも10人弱程いた

が、全員まだ昏睡状態で、事情を聞けなかったからである。瞬はすぐに病院で事情を聞かれたが、結局有意な証言は得られなかった。というのが、噂経由で祐介が入手していた情報だった。

その後、すぐに瞬は帰宅したらしい。祐介はその日のうちにそれを知ったが、わざわざ本人に確認しなかった。心配じゃなかったというわけではなく、家で質問責めにされているのが目に見えていたからだった。

その質問のほとんどは、おそらく彼の大事な妹からだっただろう。

そして、派手に喧嘩したはずだと、祐介は思った。そんな時に電話するのも悪いと思ったのである。そもそも、2人はあまり普段から電話やメールをしない。その理由は、なんとなく照れくさいからだった。また会ったときに聞けばいいと思っていて、そのまま今日まで会わなかった。

瞬はしばらくしてから、こう前置きした。

「聞いたら後悔すると思う」

祐介は笑った。

「なんだ？魔法とか超能力とか、そういう話か？」

「似たようなものだな」

「本当に？お前が？」

「そんなに変か？」

どちらかというと、外見だけなら似合っている。だが、瞬の性格からすれば、意外性は十分だった。

「お前がそういう話するの、初めてじゃないか？」

「そうか？」

「そりゃそうだろ。そもそも、お前、魔法って何か分かるか？」

「知るわけない」

「お前の知ってる魔法って言えば・・・あ、童話とかは？」

瞬は少しだけ手を止めて考える。

「カボチャが馬車とか、そういうのは聞いたことあるな」

「他は？」

「他は・・・鏡が喋るとかあったな」

「なんていうか・・・何歳児だよ、お前」

「だが、原理は知らない」

「知ってたら凄いいけどな。ああ、でも、カボチャはともかく、鏡が喋るくらいは、今なら作れるのかもな」

「確か、どれくらい美人なのか判定してくれるらしい」

「顔認証か。結構凄いい性能だよな」

そこで少し笑ったが、話題が脱線しているのに気付く。

「そんな事はいいんだよ。とりあえず、話してみろって」

「面白くもないと思う」

「いいからいいから。つまらなくても、後悔しても、責任持ってやるからさ」

祐介がそう言うのと、瞬はまた手を止めて、こちらを見た。

瞬は無表情でも機嫌が悪いように見える。端的に言えば、目つきが悪いのだ。だが、祐介は、瞬が本当に不機嫌な時の怖さが今の比では無い事を知っている。

今はどちらかというと落ち着いている。

瞬は少し間を置いてから、図書館での出来事を話し始めた。

真山という男が話した事。戦った事。そして、負けた事。

右手にじょうろを握っているのが非常にミスマッチだったが、瞬の話は非常に具体的だった。

聞き終わるなり、祐介は尋ねた。

「・・・それ、警察に言ったのか？」

「ああ」瞬の返事は簡潔だった。

「このまま？」

「ああ」

「それは・・・お前、なんて言われた？」

「ゲームのし過ぎだって言われたな」

「お前くらいゲームしてない奴も、珍しいんだけどな」

祐介は苦笑する。

瞬は無表情だった。祐介にはそれが本心だとなんとなく分かった。怒るでも悲しむでもない。

瞬はそういう人間なのだ。

「別にいいって、そういう顔だな」

「そうだな」

「お前がいいなら、別にいいけどさ」

それを聞くと、瞬は水やりを再開する。

祐介は周囲を見渡した。木や花は何も言わない。祐介はそうでもないが、瞬はそういう植物が好きなのだ。他人に話すと意外だと言われるが、祐介にはなんとなく納得できるものがあつた。

瞬も無口だった。

そこがどこか植物に似ていると祐介は思う。何も言わず真っ直ぐに立ち、人に恵みを与える。そういう物に対する憧れがあるのだろうか。実際には、植物は独りで立っているわけではない。水や日光や空気の恩恵を受けて立っているのだが、それだって人間と同じだ。社会や経済の恩恵を受けて生活しているのだから。だけど、それを感じかける事なく、いや、きっとそれを知って甘んじながらも、堂々と立って、文句を言わず、自分のすべき事をする。

瞬もそういうところがある。

説明するのは自分の義務。それで何を言われても、信用されなくても、それは仕方ない。

祐介は気付かれないように小さく溜息を吐いた。少し頭を整理してから口を開く。

「・・・とにかく、信じる信じないは置いて」

「それがいいと思う」

「あのな。お前それ、家族にも話してないよな？」

「ああ」

話したら話したで、また病院に連れて行かれそうだった。

「それはいいとして・・・お前はどっと思ってるんだ？」

瞬は手を止めてこちらを見る。意外な質問だったらしい。

「どういう意味だ？」

「現実だったか夢だったか、お前の印象は？」

瞬は少し考えてから、こう答えた。

「そういえば、夢だとは思わなかったな」

「そうか・・・まあ、そういう夢を見たとしたら、結構夢のない話だよな」

「だが、現実だとしたら、結構現実離れしている」

「それでも、あり得ないっていうのは死語だからな。お前の体験も絶対無いとは言えない。物理の世界だと、大真面目に時空とかパラレルワールドとかを研究してる人だっているし。俺なんか、あり得ないとか、そんな事言い切れないだろうしな」

「信じられても困る」

「だから、それは置いとく。だいたい、俺が信じようが信じまいが、そんな事どうだっていいだろ？信じたところで、そんな超能力者みたいな奴どうしようもないし。気をつけろって言われても、具体的にどうするんだって話になったらお手上げだしな」

瞬は何か考えているようだったが、やがて納得したのか、軽く頷いた。

「そもそもお前、結局何も分かってなかったっていうか、そんな感じじゃないか？」

「そうだな。あまり気にしなかった」

祐介は呆れたが、瞬らしいとも思った。いつも最高に落ち着いている。

「・・・でも、その真山だけ？そいつの言う事は分からないでもないよな」

「そうか」

瞬はそう言いながら水やりに戻る。

祐介も特に腹が立つわけではない。仕事を早く終わらせたいだけだろう。

「最近の若者はモラルがないとか、よく言われるだろ？じゃあ老人と比べてどうなんだってのは置いとくにしても、俺から見ても、こいつもうちよつと気を遣えよって奴いるよな。中には、モラルなんか気にしたら負けみたいな奴もいるし。ああいうのは、やっぱり、豊かになつたから出てきた奴なんだろうな。昔じゃ、ああいう奴は生きられなかったんじゃないか？」

「いや、どうだろうな」

瞬の言葉が、祐介には意外だった。

「あれ、お前違うのか？」

「違うと言えば違う」

「そうか？でもお前、相手の言う事に納得したみたいなの、そんな話し方じゃなかったか？」

「別に矛盾してない。だが、俺には断言できないだけだな」

「そういうのは違うって言わないだろ。勿体付けずにはつきり言えばいいんだよ」

「いや・・・ただ、定理だと思っただけだ」

祐介にはすぐに理解できなかった。

「定理？定理って、あれか？正弦定理とか余弦定理とか」

「ああ」

「それがどうした？」

「定理は正しい。どこも矛盾してない。だけど、それを使って解くべき命題が別にある気がする。数学でもよくあるだろ？出された問題を解くのに、一旦別の定理を示してから、それを使って解答を出す事が。あの男の言っている事は正しいと思ったが、そこで終わったら中途半端というか、不完全な気がしたただけだ。正しい定理を示す事は出来ていたが、肝心の命題が解けていない。テストで言えば、部分点はくれる、だが不正解。そんな感じだな」

祐介にはかなり意外だった。瞬がこういう意見を持っている事が、ではない。

持っているなら、何故言わなかったのか。

「・・・それ、その時すぐに思いついたのか？」

「すぐじゃない。だが、男の話を聞いている時だったな」

「だったら、そう言えば良かったんじゃないか？決闘みたいな事しないでさ」

祐介の言葉に、瞬はあっさりこう言った。

「そこまで説得力はない」

「いやいや・・・そういう問題か？いまいち信じられないけど、お前、死ぬところだったんだよな？」

「命がかかっているのは仕方ない。いつだってかかっている」

「あんな・・・だからって粗末にしていけないだろ」

「粗末にしたわけじゃない。それに、逃げる手はなかった」

祐介は少し目を細めた。

「それは、自分が逃げたら、次は図書館にいた葉月ちゃんが危ないと思っただけだからか？」

「それもある。だけど・・・」

瞬はそこで手を止めた。

そして、こちらを向いた。

紅い瞳が祐介の目を捉える。だが、祐介はもちろん慣れている。逸らしたりはしない。

「誰かが止めないといけなかった。そして、たまたまだが俺は見つけた。俺は若い男だし、多少だが武道の経験もある。俺が逃げて、他の女性や子供や老人が試みるよりも、そこで俺が止めようとする方が合理的だ」

「そう言うと思った」

思わずそう口にしていた。

なんとなくそうだと思っていた。その話が夢でも現実でも、その行動は瞬の意志に基づいている。確かに、瞬はそういう奴だ。全くもって彼らしい。

だからといって、それでいいとは思えなかった。

祐介は真摯な表情で話す。

「だけどさ、それだと社会の歯車みたいだろ？お前は、真面目で、礼儀正しくて、思いやりがあって、いい奴だけどさ。さっきの話も、妹を大事に思って、周りの人の事も考えて、そこまではいい。けど、お前、その男の事も考えたんだろ？そいつが立ち止まって考え直すまで付き合ってやろうとか、そんな事考えたんだろ？それは確かにお前らしいけどさ。確かに優しいと思う。だけど」

祐介は一拍置いた。これ以上は言い過ぎだろうかと心のどこかで思ったが、もう止まらなかった。

瞬もこちらを見たまま黙って聞いている。

「でも、お前、少しは自分の事考えたか？確かに誰かが止めないといけなかったのかもしれないけど、葉月ちゃんの事が心配なのも分かるけどさ、ただ、お前がその男に付き合う事はないだろ？適当な事言って時間稼いでから、逃げればいいんだよ。最後だってな、俺に言わせれば、別に殺したっていいんだよ。何の為の正当防衛だよ？お前だって分かってたくせに、それでも最後まで付き合って、あげく殺されて。社会の為とか、家族の為とか、他人の為とか、立派だけどさ。だけど、お前はそういうのが多すぎないか？なんていうか、お前、気づいたら・・・」

なんとかそこで止まった。

これ以上は言っではいけない。瞬がもし気付いていなかったら、傷つくだろう。気付いているなら、わざわざ口にする意味はない。

祐介は溜息を吐く。

「・・・悪い、変な事言ったな」

「いや」

「まあ、生きてたからいいけどな。無茶は程々にな」

「そうだな」

「あと、あれだ。あんまり家族に心配かけるなよ」

「そうだな」

あまりに単調な返事に、祐介は可笑しくなって笑った。

「お前・・・本当に分かってるのか？」

「ああ」

相変わらずのあっさりとした返事に、祐介はまた溜息を吐いて肩をすくめた。

だが、今度はまだ笑顔だ。

言ったところで直るものでもない。それに、今時決闘なんて、そうあるものではない。ここで変に気を遣うのも、おかしい話だろう。

聞くことは聞いたし、もう帰るかと思った時だった。

祐介は気づいた。

誰か来る。

だが、もちろん、槍を持って襲ってくるような物騒な人間ではない。

「どうした？」

気になったのか、瞬が聞く。

祐介は微笑んだ。

「お客さんだ」

そう言うと同時に屋上の扉が開く。2人からはよく見える位置だった。

そこから近づいてくるのは、制服姿の、髪の長い少女である。

なんとなく女の子の位置が分かる。

それが祐介の特技の一つだった。

「・・・お前の直感の方が超能力だな」

瞬が無表情で言った。表情には出ていなくても、やはり呆れていただろう。

だが、祐介には関係のない話である。視線はもうその少女の方を捉えていた。

瞬は恐らく自分は邪魔だろうと思った。

近づいてくる少女は瞬の知らない人物だった。だから、用事があるとしたら、祐介の方に決まっている。瞬の場合、仮に用事があっても男の代理を寄越されるような、そんな特異な容姿をしているのだ。

瞬は黙って水やりを再開する事にする。頼まれた仕事は、まだ少し残っている。

祐介の声は、先程までよりも明らかに元気だった。

「千村さん、もう平気？」

「はい・・・お陰様で」

千村と呼ばれた少女は多少緊張しているのか、怖ず怖ずといった感じの声だった。

祐介は場の雰囲気を意識してか、さらに明るくなる。さすがのサービス精神だと瞬は少し感心したが、手助けしようにも自分では力になれそうもない。

「義江さんに少し聞いてたから心配してたんだけど、元気そうで良かった。とにかく、そんな改まらなくていいからさ。それで、俺が瞬に何か用事？それとも、屋上緑化の勉強？」

最後のは、場を氣遣った祐介の冗談だったのかもしれない。だが、そうだとすると、あまり気が利いていなかった。瞬はもちろん少女も笑わない。

「あの・・・」

少女がそこまで言って口ごもる。

祐介が内心困っているのが瞬には分かった。だが、自分に出来ることはないので、瞬は黙って手を動かすだけだった。

しばらくして、意を決した様に、こう言った。

「荒瀬君。伊奈君。その・・・本当にありがとう！」

瞬は振り返った。

その時には、少女は逃げるように屋上の扉へと向かっていた。

あつという間にその扉の向こうに消えていく。

屋上はまた男2人だけになった。

2人とも何も言わない。それはお礼を言われて感動しているからではない。或いは、祐介はそうだったかもしれないが。

「・・・ありがとうだってさ」

祐介が不意に言った。

瞬は答えない。頭を働かせるのに忙しかった。

「・・・お前、家族に言っていないんだよね？」

「ああ」

「千村さんと知り合いなわけもないよね？」

「千村という名前も初めて聞いたぐらいだな」

「千村多恵さん。千村さんも眠ってたんだよ」

「そうか。だが、初対面だったと思う」

「千村さんは・・・確か文学部志望だよな。お前、生物とかの授業で一緒になったとか、そこでノート貸したとか、そういう事もないか？」

「仮にあったとしても、そんな事でいちいち来ないだろうな。お前だけならともかく」

「・・・だよな」

祐介はそこで黙る。考えを纏めているようだ。

瞬と祐介の疑問は同じ物だった。

彼女が瞬にお礼を言った事が、どう考えても不自然なのだ。

瞬は知らなかったが、千村多恵が昏睡者の1人だったというのはどうやら確かな事らしい。

そうになると、彼女がお礼を言うのは、自分を救ってくれた人物とというのが妥当だろう。

だが、瞬が事態の解決に貢献したとは世間では思われていない。世間的には、瞬は昏睡者の最後の1人に過ぎない。むしろ、学校で流れている噂はその反対だった。瞬は一連の事件の関係者ではないかと疑われているのだ。実際には根も葉もない事だが、釈明しようにも何も証拠がないし、それにそんな必要もないと瞬は思っているので、何もせず放置していた。

もっと言えば、瞬はただ負けただけだった。

正直なところ、どうして昏睡者達が目覚めたのか、瞬には全く心当たりがない。もっと言えば、あの男がどうやって人を昏睡状態にしていたのかもよく分からない。あの場所で殺された場合にそのまま眠ったままになるというのが漠然とした予想としてあったが、その場合、自分がどうして起きているのか分からない。体質とか体調とか、或いは自分が異常だっただけかもしれないが、いずれにしても、眠らせた方法はともかく、起こした方法は皆目見当がつかない。「・・・まあ、千村さんは頭良いから、お前が何か貢献したと推理したのかもな」

「そんなわけない」

「言い切れるか？」

「実際何もしてないんだから、そう推理出来るわけがない」

「結果はそうでも、一応は努力したわけだろ？」

「そんな曖昧な物を推理できるわけない」

「推理はあれだけどさ。もしかしたら、女の勘ってやつかもしれないだろ？お前が最後だったわけだから、そこに何かあるとか、そういう発想だったのかもしれないし」

そう言われるとそんな気がしてくる。

そこで瞬はふと気付く。すっかり忘れていた。

「・・・悪い事をした」

「なんだよ？」

「勘違いしたままだ。ちゃんと訂正しておくべきだった」

全くどうにかしていたと、瞬は思った。その場ですぐに言うてお

くべきだった。勘違いしたままでは、相手にも失礼だった。

だが、祐介は特に気にした様子もなかった。

「お門違いって決まったわけでもないだろう？」

「決まっている。俺は何もしてない」

「そういう事じゃないんだよ。とにかく、お前にありがとうって言ったんだから、それは素直に受け取っておけて。結果はどうでも、お前が体張ったのは事実なんだからさ」

瞬は黙った。納得したというよりも、今ここで口論しても何にもならない。

それにもっと重要な事があった。

祐介が唐突に言った。

「なんていうか、気持ち悪くないか？」

瞬は少し驚く。自分もそうだったからだった。

何か胸騒ぎがする。

「そうだな」

「どんな感じだ？」

「・・・居心地が悪いつて感じか」

祐介はどこか遠くを見てから、こう言った。

「何か取りこぼしたっていうか、見逃したっていうか、そういう感じじゃないか？」

瞬はその言葉にしっくりきた。

「そうだな」

「数学とかでよくあるよな。これは間違ってる、このまま行くと出題者の思惑通りだって分かる時が。全然根拠はないけど、そういう時はさ、なんとなく分かるよな」

「ああ」瞬は頷いてから言った。「つまりそういう事かもしれない」「何が？」

「まだ終わってないんだろうな」

瞬の言葉に祐介は動きを止めた。

何かに脳の隙間を射抜かれたような、そんな一瞬。

そしてしばらくして、彼はゆっくりと頷く。

不意に祐介が言った。

「真山って奴、どうしてるんだろうな」

瞬は知らなかった。

もちろん、逮捕なんて出来ない。何も証拠がないし、信憑性のあ
る話でもない。一応、この3日間、昏睡事件は起きていない。だが、
もちろん、それで安心出来るわけではない。

彼が立ち止まって考える事が出来たのか、それも分からない。

結局、何も出来ない。

「さあな」

瞬はそう答えた。だが、心の中で密かに決心する。

彼がまた武器を振りかざせば、その時は戦うだけだ。

祐介には言わなかったが、瞬が戦った最大の理由は、紛れもなく
自分の為だった。

あの時もし逃げていたら、自分はきっと二度と起きられなかった
と、瞬はそう考えていた。あそこで逃げていたら、自分は死んでい
た。二度と自分の心を取り戻せなかった。

それがどうしてなのか、上手くは言えない。

捨てられない。一番近いのがその言葉だろうか。

瞬は不意に肌寒さを感じた。

どこかに行っていた視界が、瞬の瞳に戻ってくる。

もうすっかり春になって昼は暖かいが、朝晩はまだ寒い。春の裏
側に、冬がまだ残っている。

季節は急には変わらない。

社会も急には変わらない。

大きい物ほど、すっきりとはいかない。

あの男の心も、瞬の心も。

そこで瞬はふと気づいた。

「そういえば、なんでお前まで礼を言われたんだ？」

その質問に祐介は意表を突かれたようだった。

「あれ、お前知らないのか？」

「何をだ？」

「いや・・・別に秘密じゃないと思うんだけどな」

その言い方に瞬は引かなかった。というよりも、瞬に秘密を作るような人物はそう多くない。

「・・・葉月が何か関係あるのか？」

祐介は少し戸惑っていた。

「いや、まあ、本人が言っていない事を俺が言うのも悪いし。そんな大した話じゃないしな」

やけにわざとらしい。

「・・・祐介」

瞬の紅い瞳が、祐介の目を捉える。

葉月とは別の意味で、瞬の瞳にも結構な力があつた。

祐介が全て喋るのに、それほど時間はかからなかった。

瞬と祐介のいる農学部棟の建物。

その階段を並んで下りる、2人の女子高生がいた。

「何か言われた？」

その片方の、やや長身でショートヘアの少女、義江詩織が聞く。
答える少女は対照的に、長い艶やかな黒髪の、小柄な少女だった。
千村多恵は少し苦笑して言った。

「ううん。お礼だけ言って、逃げてきちゃったから」

「それだと、伊奈君はともかく、葉月ちゃんのお兄さんの方は、意味が分からなかったんじゃない？」

詩織はどうしても、瞬を荒瀬君と呼ぶのに抵抗があった。あまり好きになれないタイプだし、何を考えているのかよく分からない。そして、何より外見がイレギュラー過ぎる。君付けで呼ぶにはかけ離れた存在だった。だからといって、呼び捨てには出来ないし、あの人とかあいつとか呼ぶのも、あまり気持ちが良くない。結局、今のようないくどい言い方になる事が多い。

「うん」多恵は簡単にそう答えたが、後で付け足すようにこう言った。「でも、それでいいの」

「さっぱり分からないけど・・・どうして、彼にもお礼を言うの？」

「だって、助けてもらったから」

「多恵はそう言うけど」詩織は釈然としない。「誰かからそう聞いたの？」

「ううん」多恵は首を振る。「だけど、ただ、お礼を言わないといけないと思っただけだから。私もよく知らないけど、きっと荒瀬君が何かしてくれたんだと思う」

不可思議な話だった。

「・・・もしかして、何か夢でも見てた？」

「そうかも。でも、私、起きたら夢は忘れちゃうから」

多恵はそう言って、また控えめに笑った。

そう言われてしまうと詩織には何も分らない。だから、多恵を信じるしかない。

だが、詩織の印象としては、葉月には悪いが、荒瀬瞬が一連の事件の犯人だという説がもっともらしいと思っているくらいだった。彼が何か事件に関係あるような気はするが、人の為に動くようなタイプには見えない。だから、消去法的に、彼が犯人だという説しか残らなかった。

横を歩く多恵に目を向ける。詩織の心情を読みとったのか、多恵が自信なさげに言った。

「そんなに悪い人じゃないと思う。確かに、その・・・外見は怖いけど。でも、本当は優しい人じゃない？妹さんだって、すごくいい子なんでしょ？」

多恵は葉月と面識が無かった。だが、もちろん名前くらいは知っているはずだ。

「妹さんはね。でも、私は今でも、あの2人が兄妹だって信じられないんだけど。髪とか瞳の色も全然違うし、性格だって正反對だし」「私は会った事ないから知らないんだけど・・・葉月さんってどんな子なの？」

「凄くいい子。可愛いし、優しいし、礼儀正しいし。髪が目立つから結構通行人に見られるんだけど、全然気にしないの。でも、気取ってなくて、誰にでも気さくでよく笑うし。とにかくいい子なのは、私が保証する」

「へえ・・・私、葉月さんにもお礼しないといけないんだけど、会わせて貰えない？」

「それなら、今度うちの部に遊びに来るから、その時でいい？」

「あ、うん。あと・・・」多恵は少し考えてから言った。「渚さんにも会いたんだけどね」

詩織は口を固く結んだ。

渚はあの日、あの物置を最後に姿を消した。室内の声が消えてからしばらくして、詩織達はドアを開けて中に入ったが、そこには誰もいなかった。部屋の中を搜索したが何も見つからなかったし、窓が開いた形跡もなかった。それどころか、気づいたら玄関にあった靴もなかった。

まるで最初からそんな人はいなかったみたいだった。

翌日、詩織は葉月と一緒に渚のいたマンションを訪ねた。そのマンションの管理人も訪ねてみた。一応、近くの喫茶店等も探してみた。

だが、手がかりは何も無かった。

物置から見つけた、穴の空いた本が詩織の脳裏に蘇る。

その翌日、多恵は目覚めた。

詩織にしてみれば、事態を解決したのは渚であるという確信があった。あの不思議な銀髪の少女が何かしてくれたお陰で、多恵も他の人も助かったのだと思うっていた。

だが、それは詩織達以外には信じられない話になってしまった。

その本人がどこにもいないのだから。

その事が、どこか悔しい。

「・・・私は信じてるよ」

気付くと多恵は微笑んでいた。彼女らしい抑えめな笑み。

それを見て、詩織も少し笑顔になる。

「渚さんと・・・あと、詩織ちゃんが、私を起こしてくれたって」

「・・・私、あんまり役に立ってなかったけどね」

「ううん」

多恵は首を振る。そして、優しく言った。多恵の声はなんとなく丸くて温かい。

「渚さんとか、葉月さんとか、あと、荒瀬君も。たぶん、いろんな人が何かしてくれたと思う。でも、私を起こしてくれたのは、私が起きられたのは、詩織ちゃんのお陰だって、そう思うの」

多恵は精一杯の笑顔になった。

「だから、ありがとう」

その言葉に詩織は戸惑った。

確かにそう言われて嬉しかったが、それだけではない。何か心に残っていた物が無くなったような感覚。忘れていた物が、いや、忘れようとした物が、少し前まで確かに残っていた。

この一件で、詩織には思い知った事があった。それは、多恵の事を自分は何も知らないという事だった。多恵の過去の事、将来の事、読んでいる本の事、好きな写真の事。知っているのは、全部表面だけ。付き合いが短いから仕方ないといえば、それはそうなのかもしれない。だが、親友だと言っているだけで、自分は多恵の事を本当に大切にしているのか、自信が揺らいだ。

もつと言え、多恵は自分の事を本当に好きなのか、それがどうしても気になった。優しくて気遣いの出来る多恵は、本当は迷惑でも、遠慮して言えずにいるのかもしれない。自分が楽しいだけで、多恵はそうでもないのかもしれない。そう思えてしまった。

それでも、多恵が目覚めた時は、自分の事よりも嬉しかった。胸に残っていた何かは、今は確かにもう無い。

「私も、ありがとう」

微笑んでから、小さくそう呟く。

「え？」

多恵には聞き取れなかったようだ。

だけど、それでいいと、詩織は思った。

何より、しっかり言い直すと泣いてしまいそうだった。

「また倒れたら、次も絶対起こしてあげる」

詩織は多恵に笑顔でそう言った。なんとか、声は震えなかった。涙なんて、今は似合わない。

少し遅れて多恵も笑顔を返す。

「ありがとう」

2人はやがて、階段を下りきって一階に到着した。すぐ近くにあ

った出口から、建物の外に出る。そこはやたら木々の多い森みたいな場所だった。文系の2人がここまで来る事は滅多にないため、初めて見る物ばかりである。この大学は規模が規模だけに、知らない学部に行くだけで、新鮮で楽しめる事が多い。この農学部に至っては、植物が多い所では森や農園といった雰囲気なので、季節が季節なら森林浴に来る学生もいる。だが、余りに広すぎて道に迷う事もあるらしいので油断は禁物だった。

「来た道を帰った方がいいよね」

多恵がそう言って、近くにあった地図付きの案内板を示す。

「そうね」

詩織は頷く。大学で迷子なんて御免だった。

2人は案内板を見ながらあれこれ帰り道を相談する。詩織も多恵も地図があまり得意ではないので、正直見てもよく分からない。最悪の場合、携帯のGPSに頼る事になりそうだった。

多恵がふと気付いて言った。

「あ、近くに図書館があるって」

多恵は楽しそうだったが、詩織は少し呆れた。

「多恵。少しは本を読む量、減らしたら？」

「え、どうして？」

「だって、変な本を読んだから、あんなったわけだし」

その指摘に、多恵は困ったように笑う。

「そうだけど・・・でも、大丈夫。有名な人のだけ、読むようにするから」

詩織はそれでも不安だったが、多恵から本を奪うと、きっと生きていけないだろうと思った。そう言う中毒みたいだが、図書館で見たあの貸し出し履歴からすれば、その表現もあながち間違いではないのかもしれない。

ふと、多恵は不思議そうに言った。

「そういえば、少し気になったんだけど」

「何？」

「私、あの本を読んだから眠ってたんでしょ？」

「そうだと思うけど。でも、それがどうしてかは・・・」

渚がいないので分からない。

だが、多恵の言いたい事は違った。

「そうじゃなくて、どうして今だったのかなって」

「え？」

予想外の言葉だったが、すぐに意味が飲み込めた。そう言われれば確かにそうだ。

詩織は多恵を見つめる。

すると、多恵は小さく頷いた。それから、思い出すようにしながらゆっくりと口を開く。

「あんまりよく覚えてないんだけど・・・確か2ヶ月くらい前に、新刊のところに置いてあったのかな。とにかく、ちょっと読んでみて、変な本だなって思ったのだけはよく覚えてるの」

それから2ヶ月間、多恵には特に異常がなかった。3日前の朝になって、急に倒れるまでは何も起きなかった。

そこが少し不自然だった。

「それでもちょっと気になったから、借りて帰ったんだと思うけど、家で読んだ時の事はあんまり記憶になくて。なんとなく、読むのに時間がかかったような、そんな気はするんだけど。読みづらいというか・・・うーん」

多恵は思い出そうとしているようだが、上手くいかないようだった。

詩織は少しだけ、3日前の朝の、あの電話口の多恵の声を思い出した。あの時の呻き声に、今の最後の声が似ていたような気がした。嫌な予感がした。

「別にいいでしょ」

詩織の口から、その言葉が出ていた。少し声が大きくなっていた。多恵は少し驚いたらしい。それが表情に見て取れる。

詩織は意識して微笑んだ。

「もう終わった事だから、無理に思い出さなくていいの。無理してまた倒れたりしたら、元も子もないし。今はまだ病み上がりみたいなものなんだから、とにかく休んで、元気にならないと」

多恵は少し間をおいてから頷く。

「それに、結局、あの本の事は何も分からないし。橘先輩が調べてくれるって言うから、任せるのが一番でしょ」

「・・・橘先輩、大丈夫かな」

多恵は少し不安そうだ。実際に被害にあっているのだから、当然かもしれない。

「詳しくそう人に頼んでみるって、そう言ってたから大丈夫。それに、あの本、結局もう読めなくなっちゃったし」

あの物置にあった本は中央に大穴が開いていて、どのページも4隅の数文字しか読めない有様だった。もう本としては役に立たないだろう。

「・・・渚さんが物置で話してたのは、どんな事だったの？」

多恵の突然の質問に、詩織は意表を突かれた。

「どうしてそんな事聞くの？」

「だって・・・やっぱり気になるから」

「えっと、実はあんまり聞き取れなかったの。確かに声は聞こえたんだけど、何を言ってたのかはよく分からなくて」

これは本当の事だった。扉越しの声は判別できるぎりぎりの音量しかなく、聞き慣れた言葉や予想できる言葉ならすぐに認識できるから聞き取れたのだが、それ以外だと、聞こえても脳がうまく処理できないのか、言葉として認識出来なかった。後で、美咲と聞こえた言葉を示し合わせてみたのだが、結果はほとんど同じだった。

しかし、もちろん聞こえた言葉もあった。

サイトLやA。

だが、多恵には話さない事に決めていた。余計な事を言って変な影響があっても困る。

多恵の表情はやはり少し疑っている感じだった。割と多恵は、そ

ういう事に鋭い。

詩織はこちらから話して先手を打つ事にした。

「そんなに不安なの？」

多恵は首を振ったが、表情は少し不安げだった。

「ううん。でも、気になるでしょ？」

「大丈夫」

詩織は出来るだけ優しく微笑む。多恵や美咲よりはずっと下手だが、これが精一杯だった。

「言ったでしょ？ また何かあっても、私が絶対起こしてあげる」

多恵は少し迷っていた様子だったが、やがていつもの笑みを見せてくれた。

控えめだが、確かに優しい。そんな笑顔を。

「でも、無茶はしないでね」

詩織は怪訝な顔をする。

「何？ 無茶って」

「だって、女の子2人で、知らない人のマンションに入ったんでしょ？」

「それは・・・あれはでも、多恵の家に行く前だから」

「関係あるって分かってたら、尚更行ってたって事？」

そう言われると二の句が継げない。

そんな詩織に、多恵は笑って言った。

「絶対、無茶はしないでね」

「・・・はい」

詩織はそう言ってから、多恵と同じように笑った。

農学部のある林の一角。

周囲の木々が小さくざわめく。

それはまるで、母親達が仲良しの少女達を見守っている様に見える。

山岡亜由美は、煙草が吸いたくなかった。

だが、胸ポケットに手を入れて、そこで止まる。煙草はこの校医になる前にやめてしまっていた。それは、学生の健康を気にしたからというよりも、必要なくなったからという理由の方が大きい。研究者だった頃は、煙草が自分にとって必需品だった。あの頃、今の何十倍も脳が回転していた時には、その回転を維持するのが煙草の役目だった。その為に、多いときは一日何十本も吸っていたのだ。今はその代わりにコーヒーを飲んでいる。禁煙を始めた時に、何か口が寂しいと思って飲み始めたのがコーヒーだった。昔は嫌いだった黒い液体も、今はなくてはならない存在だ。あの頃の煙草とは逆に、たまに急回転を始める脳をクールダウンさせるのがその役目だった。

ポケットから手を出して、デスクの上のコーヒーカップを掴む。

一口飲んでから小さく息を吐いた。

妙な事になったと思う。

亜由美は、先ほどまで昔の同僚やかつての恩師と一緒にだった。一緒に食事して昔話をしたというわけではなく、呼び出されていたのだ。

数分で人を昏倒させる事ができるのか、意見が欲しい。ただし、相手に触れず、何も道具を使わないという条件で。

わざわざ自分と呼び寄せた理由が、簡単に言えばそれだった。

正直言って、迷惑な話だった。自分はもうかなり前に、研究者をやめている。そんな自分に意見を聞きに来るなんて、見当違いもいところだった。昔、少しくらい期待されたと言っても、今はもうただの校医でしかない。研究者としては、自分はもう時代遅れだろう。

だが、気になった。

同僚には気のない返事をしたものの、個人的には少し調べてみる気になった。

そこでまたややこしい事になったのだが・・・

その時、保健室に来客があった。

白衣姿で、長い黒髪を束ねた少女。

高校生の逢坂藍だった。

彼女の手には、近所の洋菓子店の紙袋が握られている。

「暇そうだ」

藍が部屋に入るなりそう言った。

亜由美は特にリアクションもせずにコーヒーを飲む。この少女は多少変わり者で、こういった皮肉をよく使う。敬語を使うところもあまり見たことがない。亜由美はその理由を知っていたが、だからといって注意する気はなかった。必要なら敬語くらい使えるはずだから、別に大きな問題ではない。

「逢坂」

「はい」

「どうだった？」

その質問に、藍は無反応だった。すたすたとこちらに歩いてくる。悪い知らせだと直感する。

「どうぞ」

藍は紙袋をデスクに置く。

山岡はそれを取り、中を見た。

中身は、白い表紙の一冊の本。だが、中央に大穴が空いている。

「これは？」

藍が説明する。

「これが事件に関係あるらしい」

「・・・他には？」

「いや、それだけ。橘先輩が言うには・・・だけどな」

「何か気づいたか？」

そう聞くと、藍は少しだけ表情を緩めた。

「何か隠しているのは分かった。だけど、先輩の義務というか、立場的な責任感からの秘密だろうから、そこは突っ込まなかった。聞いても悪いし、それに効率が悪い。必要なら、詩織か千村さんに聞く方が楽だ」

それだけ聞くと、本を取り出す。

大穴というのは誇張ではなく、真ん中からほとんどがくり抜かれていて、タイトルも何も分からない。背表紙にもタイトルはなかった。何ページかめくってみたが、隅の数文字が読めるだけで、もう本としての価値は無かった。

これだけでは手がかりだと言えない。

だが・・・

「ただの本だな」

感想としてはそれだけだった。ただの見た目を言ったわけではなく、ずっと考えていた末の結論だった。

これは普通の本だ。

「あり得ない？」

藍の質問に軽く頷く。そして補足した。

「本を読んだだけで昏睡するというのは、やはり考えにくい。もちろん、内容によってはストレスになる事もある。だが、例えば目の前で人が死んだり、非日常的な光景を目撃した場合と比較すれば、度合いは低い。伝聞情報だと具体的な描写はそれぞれが勝手に得るし、自由度も高い。心的負担が強すぎると思えば、本人が気付かずに改竄している場合だってある。心の防衛機能としてな。そういった小さな負担が積み重なって体に影響が出たのかもしれないが・・・それなら日頃のストレスとそう変わらないだろう」

「だが、橘先輩も詩織もこの本が関係あると確信している」

「詩織はともかく、橘がそう言うなら何か根拠があるんだろう。しかし、私としてはあり得ないとしか答えられないな。そもそも、そんな本が出回っていたら今頃大騒ぎだろう」

「それなら・・・」藍はそこで口元を上げる。「亜由美先生の考えは？」

亜由美はコーヒークップに口を付ける。

昔ほど瞬発力のない脳だが、そのかわり多くの物が見えるようになったと思う。ゆっくり歩くと、走っていた時には気付かなかった物が見えるように。或いは、これが大人になった証なのかもしれないが、だからといって、成長とか進化の証だとは思えなかった。立場が変わって、役割が変わった。それに適応して機能が変わったという、ただそれだけの事だろう。

「逢坂」

呼ばれた少女は、少し目を細めただけだった。それには構わず、こう続ける。

「こんな事を調べてどうする？」

「知りたいから。それしかない」

「どちらが知りたい？」

藍は答えなかった。真面目な顔でこちらを見ている。

亜由美は藍を見ないでコーヒーを飲む。少し間を置いてからこう言った。

「どうやったのか。そして、どうしてやったのか。手段か、或いは動機か。お前が今知ろうとしているのは前者だな。だが、普段の藍なら後者を調べるだろう？　こういうのは、お前がよく使う言い方ではない、イレギュラーって奴じゃないのか？」

「犯人が明確ではないから、仕方ない」

「だから、犯人を特定する。筋は通っているかもしれないが、それだけじゃないだろう？　いいから、正直に言え」

少しおかしいとは思っていた。藍は確かに好奇心旺盛だと思うが、その対象は人の心理とかその類のものだけに限られている。本を読んで人が昏睡したとすれば、確かに彼女の好奇心の守備範囲なのかもしれないが、亜由美はそこに少し懐疑的だった。

今の彼女は昔の自分と違う。

ただ知りたいからという理由で研究に明け暮れていた昔の自分と、普段の藍はよく似ていた。実際、彼女を見ていると亜由美は懐かしさを覚える程だ。真っ直ぐ前を見て、周りを気にせずひたすら走っている。そんな空気を彼女も持っていた。

だが、今の彼女は違った。確かに走っているが、何かに引つ張られているような、何かを気にして走っているような、そんな気がした。その結果、真っ直ぐ走れる道でも、そちらに進路が傾く。

今の彼女が走るのは、好奇心の為だけではない。他に考えられる動機と言えば、そう多くはなかった。

藍は何も言わない。黙っていても仕方ないので、亜由美はこちらから話すことにした。

「千村に会ったか？」

藍の身体が少し動く。それだけで十分分かった。

本を読んだはずの多恵に、藍が会ってないはずはない。だが、彼女はその事を一言も言わなかった。普通なら真っ先に報告しそうなもののな。

彼女に会って何かに気付いた。

亜由美は息を吐く。嘘が分かるというのも困りものだった。

「最初は千村の為に、それか詩織の為に調べていたんだろう？その時のアプローチはお前らしかったし、まだ控えめだった。だが、今は違うな？詩織に会ったからには、千村にも会ったはずだ。彼女に会った時、何かに気付いた。それが気になって仕方なくて、そうまで積極的になった。そうじゃないか？」

藍は表情を変えない。

だが、それは自白に等しいと亜由美は思う。彼女は人の心は得意でも、自分のことはまだ客観視出来ないようだった。その為、嘘が非常に分かり易い。

これ以上は言うこともないので黙っている事にする。彼女が自分で考えたとおりにすればいい。もし、このまま何も言わずに出て行ったとしても、それでいいと思う。今はもう彼女が1人で秘密を抱

え込んでいるわけではないから、少しは心理的負担が軽くなったはずだった。

しかし、藍は口を開いた。

「千村さんは嘘をついていた」

そこで藍は間を置く。亜由美も何も言わない。辛い話かもしれないが、話すかどうか、本人が決めることだ。

しばらくして、藍が言ったのはこの言葉だった。

「彼女は恐らく知っていた。どうして被害者が眠っていたのか、どうして目覚めたのか、その本が何なのか、その全てを。そして・・・」
「藍は口ごもったが、はっきりと言った。「誰が犯人なのか、恐らく知っていた。そして、それを隠していた。つまり・・・」

「そこまでいい」

亜由美の言葉に、藍は黙って、そして小さく頷く。

その先は言わなくても、伝わった。

犯行を全て知っていてそれを隠す。その場合に最も相応しい可能性。

最も考えたくない可能性。

「逢坂」

亜由美に名前を呼ばれた少女は、先回りしてこう言った。

「いや。調べるのは続ける」

「逢坂が無理しなくてもいい。私が調べる」

「大丈夫。それに、気になる事もある」

「なんだ？」

「千村さんに会った時に詩織も一緒だったんだが、その時詩織がこう言っていた。渚という名前の、長い銀髪の女性を探していると」

そういえば、昨日保健室に来ていた女子達がそんな話をしていたような気がする。大学内で見かけたとかそういう話だったが、女性というよりは少女という感じの話し方だった。

「その話の時、千村さんの様子が少し変だった」

「変にもいろいろあるな」

藍が思い出すようにしながら、慎重に言う。

「彼女は話を聞いているだけだったんだが、それなのに嘘をついているというか・・・いや、違うな。嘘をついているふりだけとか、とにかく挙動が変だった。私がやっと気付くくらいだから、普通は誰も気付かないくらいに僅かな変化だったが、間違いない」

「つまり、その渚という女性を知っていたという事か？」

「それは分らない。彼女がそう言った時にその反応だったら、そう思ったかもしれない。だが、問題はそこじゃない」

亜由美は沈黙で先を促す。

「私が千村さんと知り合ったのは詩織の紹介だ。だからまだ一年弱の付き合いだが、それでも彼女が嘘をつくところを何度か見ている。だが、その時の嘘が彼女にしては上手すぎた」

なんとなくだが、亜由美には分からない話ではなかった。

「千村さんは嘘が下手ではないと思う。それに、そういった技術は急に進歩したりもする。だから、急に上達しても変ではない。だが・・・あの時の嘘は、なんというか、彼女らしくなかった。変な言い方だが、彼女にしては年季が入っていた。さっきは上手すぎると言ったが、今にして思えば、千村さんとは嘘の種類みたいな物が違った気がする。別人の技術を借りてきたような、そんな印象だった」

亜由美は少し考えてから言った。

「逢坂は千村が嘘をついていたと言ったが、それはその後の事か？」

「そう。改めて考えると、その時の嘘もいつもの彼女とはタイプが違った」

多恵ではない誰かが、彼女の身体を借りて嘘をついている。

藍の話を素直に受け取るとそういう事だった。

なかなか突拍子もない話だと亜由美は思う。暗示や催眠といった手段なら、何か意図した行動をとらせる事も出来るが、それは精々誘導や扇動程度の話であって、かなり限定的である。他人の身体を乗っ取るのはもちろん、自分の技術や意識を共有させるというのも無理な話だった。

あり得ない。

その言葉に、亜由美は引っかかる。

本で人を昏睡させるのも、あり得ない。

妙な一致。妙な符号があるような気がした。

「・・・詩織や橘は違うんだな？」

不意な質問に藍は少し眉を上げたが、すぐににやりと笑う。

「問題ない。詩織もいつも通り分かり易かった」

「つまり、千村だけか」

「そう。だが、他は普通だったし、その嘘の違いというのも私の印象に過ぎない。普通の人は気付かないと思う。実際、詩織も気付いていなかった」

詩織はそれほど洞察力があるわけではないが、友人の事は気にかけているだろうから、本当に普通は気付けないような些細な事なのだろう。

だが、詩織も勘がいいからなと亜由美は思う。もしかしたら、何かの拍子で気付くかもしれない。詩織の母親も、たまに妙に勘のいい時があった。いつもぼわんとしているくせに、自分が嘘をついたり、気になる男子がいたりしたら、ずばり言い当てたものだった。その娘の詩織は、彼女とは正反対のサバサバした少女だが、その辺りの勘はしっかり遺伝しているようだった。

そして、友達思いなところも、である。

3日前の朝、自分の腕の中で泣いていた彼女を思い出す。

全く・・・

そういうのは母親の役目なのだが。

チェコだかスロバキアだか知らないが、帰ってきたら言ってやらないといけない。

だが、それまでは。

亜由美は少し微笑む。

約束したからな。

それに何より、親友の娘なのだ。

守ってやるさ。

亜由美は再び、紙袋の中の本に視線を移す。これが手がかりだという確信があるわけではない。だが、ここを調べてみたいという意志があった。研究者だった頃は、この衝動が全てだった。

そして、その感覚に従って間違っていた事は一度もない。

藍がそんな校医の姿を黙って見ている。

その眼光は普段とは違って鋭利で強い。確かにそれは、何か遠くの物を目指している、探求者の瞳だった。

事件後、初めての土曜日。

荒瀬瞬は家の物置を掃除していた。

物置とは言っても外見は普通の部屋であり、そこに普段使わない物を詰め込んでいるだけである。瞬の家は古さと広さだけは一人前以上という日本建築で、そういう意味では、こういう物置みたいな部屋が出来るのは当然だったのかもしれない。つまり、歴史があればあるほど、捨てられない物が増えていくのだ。それを置いておける場所があれば尚更である。

この物置も、言うなれば先祖の思い出が詰まった部屋と言えない事もない。

大量の埃を被っているから、そんなに綺麗な物でもないのだが。とりあえず、瞬は中の物を外に出す作業を行っていた。この部屋は中庭に面しているから、一旦中の物を全部庭に置いてから室内を掃除した方が効率がいい。広い庭のある家ならではの方法だが、そもそも狭い家だったらこんなに物を溜め込まないはずなので、便利なのか不便なのか微妙な所ではある。

瞬は両手一杯の荷物を抱えて庭に下ろす。そして、そこから室内を見た。

もう何度か往復したはずだが、まだ半分といったところだった。室内にはまだかなりの物が残っている。この調子で掃除してまた荷物を戻すとなると、一日仕事になりそうだった。

何故瞬がこんな所を掃除しているのか。

誰かに頼まれたわけではないし、特に必要があったわけでもない。掃除が好きなわけでも、ストレス発散のためでもない。正直言って、特に楽しいわけではない。

ただなんとなく掃除したかっただけだった。簡単に言えば、気まぐれである。

しかし、それだけとは言い切れない感情もあった。上手く言えないが、例の事件がきっかけなのは間違いない。

もしかしたら、たまに仏壇に手を合わせる時の心境と同じなのかもしれない。

少し息を整えてから、瞬はまた物置に入る。

手近な箱を取って中身を確認する。

箱の中身は様々である。古い着物や書道具。布団。絵画。百科事典。人形。その他いろいろ。価値の有無は分らないが、いずれも古い物ばかりだ。実用性という点ではほとんどが無価値だろう。本当に、ただの思い出の品である。

その思い出の主も、ほとんどがもうこの世にはいない。

ふと瞬の目に留まる物があつた。

それほど大きくはない色褪せた紙箱。靴が入るには大きすぎて、着物が入るには小さすぎる直方体の箱。

なんとなく予感がした。

瞬はそれを手に取る。記憶ではそんなに重くはないはずだ。

だが、すぐに分かった。かなり軽い。どう考えても空箱だった。

それでも、なんとなく中を見てみる。

空ではなかった。

瞬は唯一中に収まっていた物を手に取る。

それは写真だった。

かなり色褪せてしまっているが、かろうじて3人の人物が写っているのは分かる。どの人物も小学生か中学生くらいに見えるが、もちろん今はもうかなりの年齢だろう。背景に写っている建物もこの家の様に見えるが、明らかに周辺の様子が今と違う。随分昔の写真のようだった。

しばらく目を凝らして見ていると、瞬は気づいた。

並んで立つ子供達。その真ん中の少年は腰に木刀をぶら下げてい

る。

それだけで瞬には十分な手がかりだった。

刃筋を通せばなんでも切れる。

この土地は侍の血肉が作ったものだ。

男は強くなれ。

彼の言葉を、瞬は今でもよく覚えている。

あの爺さんは子供の頃から侍になると言っていて聞かなかった。祖母がそう言って話してくれた事があったが、どうやら誇張ではなかったらしい。

瞬は写真を裏返す。

そこには、写真を撮った日付と、一言こう書いてあった。

不撓不屈。

爺さんらしいな。瞬は誰にでもなく、小さく頷いた。

その爺さんというのは既に故人である。近所の剣術道場の師範だった人で、幼い頃の瞬はよくお世話になっていた。剣道や居合いの有段者でもあったらしく、何度か稽古しているところを見せてもらった事もある。もちろんそれだけではなく、いろんな言葉や教訓を話してくれた人でもあった。最期の瞬間まで、真っ直ぐで力強い、立派な人だったと瞬は思う。

今の自分があるのは、彼のお陰だ。

もちろん、爺さんだけではない。幼い頃の友達、海外で出会った人、同級生や先輩、先生、そして家族。皆の言葉が、存在があって、今の自分がある。

そこで瞬は気付いた。

自分が捨てられないもの。

この土地は侍の血肉が作った。それを聞いた時、自分はまだ幼稚園児だったから分からなかったが、今はその言葉の意味が分かるような気がした。

侍はその当時必要とされていたとはいえ、現代では危険な存在でしかない。帯刀しているのはもちろん、人殺しの技術を学んでいる

のだから。だが、それを当時の侍本人達はどう考えていたのか。人を斬る道具と、それを扱う術を持った自分を、どう捉えていたのか。そこにはやはり矛盾があると、瞬は思う。悪を裁くための毒。そう見えたとしても不思議ではない。人を本当に斬ったとしたら尚更だった。そういう自分をどうやって納得させたのだろうか。必要悪だから仕方ないと思ったのか。自分達が常に正しくあればいいと思ったのか。或いは何も感じない方がいいと思ったのか。周りの人達はそんな彼らをどう見ていたのか。

中にはこんな世の中は間違っていると思った人もいるだろう。

だから侍は消えた。それは確かに正しい。

だが、それだけではないと瞬は思う。

確かになくせるのならなくした方がいい。だが、すぐにはそうは出来ない場合もある。侍だってそんな物なくて済むのならそうしたはずだ。それが出来ない時、何か矛盾を受け入れなければならぬ時、当時の人は何を基準にしたのか。どこに線引きをしたのか。

モラル？正義？宗教？

どれもじっくり来ない。

だが、瞬は漠然とだが、それは今の人達が守っているものと同じだと思った。モラルや正義や宗教、それらが全て違う人でも、皆が揃って最後に指針にするような、もっと奥にある物。それは今も昔もずっと変わっていない。瞬は侍になりたいとは思わないが、それでもきつと同じ物を守っているとそう思った。

あの時自分が逃げたら、矛盾を受け入れてまで刀を握った人達に顔向け出来ないではないか。彼らが守ってくれたから、今の自分達がいるのだ。侍だけではない。歴史上にそういった人々が少なからずいたから、今も失われていないものがある。途中で抜けていたら、このリレーは続いていないのだから。

その人々はこの大地に眠っているのだ。

その上に自分は立っているのだと瞬は思った。今一緒に生きている人だけではない。今の自分があるのはそういった人達のお陰でも

ある。

だから、捨てられない。

この考えは捨てられなかった。これを捨てたら、それはもう自分ではないと瞬は思う。

その無い世界が、価値の無い世界なのと同じ様に。

だが、まだ確かにそれはある。

まだ終わっていない。

瞬は写真をもう一度裏返した。よく見ると、左側にいる少女は瞬の祖母に見える。その爺さんと瞬の祖母は古い家の近所同士だから、家ぐるみで付き合いがあったと言っていた。それで親しくしていたとしても不思議ではない。右側の少年には見覚えがなかった。

中央の少年は、今はもうこの世にいない。

だが、確かにこの世界のどこかに、そして瞬の中にも残っている。その言葉も生き方もしっかりと覚えている。だから瞬は逃げなかった。逃げないで戦えた。

ありがとう。

瞬は心の中でそう呟く。

その時、鋭い視線を感じたような気がした。

剣豪が鞘走る時のような、背を抜ける冷たい気配。

だが、それは瞬には懐かしい。

写真を見る。その中央に写る精悍な少年。

その眼差しも鋭い。

それは確かに記憶の中の老人と同じ物だった。

玄関が騒がしい。

瞬はそう思って、掃除の手を止める。掃除は思ったより早く進んで、もうすぐ終わるところだった。

騒がしいのは葉月の声だった。

別に近所迷惑というわけではないから放っておいてもいいのだが、瞬は少し気になったので見に行く事にした。他に家に誰もいないというわけではないが、瞬の両親も祖父母も仕事を持っている。面倒を見るというわけではないが、休みの日くらいは瞬が妹の相手をするべきだろう。

外履きに変えて庭を回り込んで行く事にする。玄関なら中に行くよりこちらの方が早い。

ここは区分するなら中庭という事になるが、荒瀬家の人間が庭と言ったら普通はこの事だった。今は春だがここには桜や梅といった木はないので、ほとんど季節感が無い。松が何本かと石や低木のみで出来ている質素な庭だった。だから、祐介はぱっとしない庭だと言っていたが、瞬はこういう庭も嫌いではなかった。それに、鑑賞するだけならいいが、世話をするという観点からすれば、これくらいの方が手間がかからない。

玄関に近づくにつれ、葉月の声が鮮明になる。かなり機嫌が良い。誰かと話しているようだった。

その相手も少女のようだった。落ち着いていて、なんとなく知的な声。

瞬は少し胸騒ぎがした。

やがて、かなり広い表玄関が視界に入る。そこに2人の少女がいた。

片方は言うまでもなく葉月である。

もう片方は瞬の知らない少女だった。

だが、見覚えならある。

ハーフっぽいと祐介が言っていたのを思い出す。確かに、日本人の平均から言えば、目鼻立ちがはつきりしているが、欧米人に比べると控えめだった。そして、透けるような瞳。真っ直ぐで柔らかな銀の長髪。どうやら、間違いなかった。

葉月はその少女を両手で抱きしめていた。なにやら嬉しそうな様子なのを見て、瞬は近づいて話しかけるか、それともそっとしておくか、少し悩む。楽しそうな雰囲気、水を差すのは悪い。最近少し葉月に元気がなかったのも尚更だった。

だか、すぐに葉月の方が瞬に気づいてこちらを向いた。そうなのは仕方ないので、瞬はそちらに向かって歩き出す。

「あ、お兄ちゃん！この人がね、渚さん」

葉月の言葉に瞬は軽く頷く。

「あれ、知ってるの？」

「祐介から聞いた」瞬は2人の近くで立ち止まってから答える。

「そうなの？え、じゃあ・・・」葉月は困り顔になる。

「別にいい。ちゃんと遅くなるって家に電話したんだろ？」

「でも・・・」

「友達と帰らなかったのも仕方ない。向こうだって都合がある」

「ううん」葉月は首を振った。「でもやっぱり、嘘ついてたから。」

「ごめんなさい」

「気にしてない。嘘はお互い様だ」

「そう、それ！」葉月は急に不満顔になる。「そういうのってやっぱり・・・」

「悪かった」瞬はそう言って頭を下げる。「これでお互い様だ」

まだ不満顔だった葉月だが、しばらくしてから仕方ないという感じで微笑む。

渚はよく理解できていないようだった。やや戸惑った表情をしている。

それもそうかと瞬は思ったが、とりあえず、葉月にこう聞いた。

「葉月。まだ離れないのか？」

まだ渚に抱きついたままの葉月は、笑顔で言った。

「だって、感謝の気持ちを伝えないと」

「十分伝わったと思う」瞬は渚を見る。

渚は少し困ったようにも見えるが、笑顔を返す。

「それに、今度は逃げられないようにしないといけないし」

「どうやら、そちらが主目的らしい。」

「・・・離れた方がいい」瞬が葉月を見て言った。少し目に力を入れる。

「え、でも」葉月はその気がないらしい。

「犬猫じゃないから、勝手に逃げたりはしない」

「いいの。また会えて嬉しいってそれだけなんだから。もうちょっとだけ」

葉月はそう言ってあちらを向いてしまう。

その声の端が揺れているのが瞬には分かった。まだあれから一週間も経っていないが、別れが突然だっただけに、思うところがあつたのかもしれない。

正直、困った。

その時、口を開いたのは渚だった。

「いいんです」

瞬が渚を見ると、彼女は微笑む。

すごく優しい笑みだと瞬は思った。見た目や声は少女だが、その笑みは大人じゃないと出来ないと思える。誰かに慈悲を与えるような、或いは何かを赦すような、そんな温かい表情。

やっぱりそうか。

瞬はその表情を見て、そう思った。

「あなたが葉月さんのお兄さんですよね？」

渚が聞く。

瞬は頷かなかった。

「あなたがサイトAか？」

その問いに、渚は少しだけだが目を見開いた。
やはり。

瞬にはその反応だけで十分だった。

祐介や葉月に渚についての話は聞いていた。大人っぽくて、落ち着いていて、綺麗な瞳と銀色の髪を持った少女。何か特別な事を知っていて、いつの間にかどこかへ消えてしまった少女。

そして、葉月はこうも言ったのだ。

きつと天使だったんだよ。

瞬にはもう1つ気になる事があった。

あの男が気にしていたサイトA。それが図書館にいた誰かの事かもしれないというのは仮説としてあった。もちろんたまたまかもしれないが、その人物を捜して図書館にいたという可能性は低くないと思った。そして、瞬があの男を見つけた時、そこに銀髪の少女もいたのだ。

彼女がサイトAなのかもしれない。

そう思ったものの、結局彼女がいなくなってしまったので確かめられなかった。少し気にはなったが、それならそれでもいいと思った。その少女が何であつたにしろ、他人の事を調べ回るのは気が引けたし、知ったところで、あまり重要な事だとは思えなかった。

だが、その少女は今ここにいます。

実際に会ってみると、その仮説はもっともらしいように思えた。

いつの間にか、葉月がこちらを見ている。少し驚いた表情だった。

「・・・私に会った？」渚が聞く。敬語ではなくなっていた。

「いや」変な質問だとは思ったが、瞬はすぐに答える。

「LかT？」

「会っていない」

「それなら、どうして？」

その真剣な表情に少し戸惑ったが、瞬は平然と答える。

「なんとなくというだけだが」

「サイトAという言葉は誰から聞いたの？」

「図書館にいたあの男だ。あと、サイトLというのも。Tは聞き覚えがないが」

もしかして、葉月が話していた金持ちの銀髪少女だろうか。彼女もサイトAを探していた。

「あの男性が私の事を話したの？」

「貴女の事というか、サイトLの為にサイトAを探していると、そう聞いた。だから、図書館にいた誰かの事じゃないかと思ったただだ」

渚はこちらを見つめたまま黙ってしまった。

そんなに重要な事なのか。そう思わずにはいられないほど、渚の表情は固い。そこが瞬には意外だったが、すぐに別の違和感にも気付いた。よく考えれば、親類以外で自分と同年代の女性とこんなに話した事はほとんどない。全くいないわけではないが、自分の瞳を見ても怖がらない女子は相当珍しい。女性とこれほど長時間見つめ合ったのは、最近では記憶にない。

だからといって、祐介の様に嬉しいわけでもなかったが。

葉月は渚に抱きついたまま不思議そうな顔をしていた。

「・・・それだけ？」

不意に渚が口に出した言葉がそれだった。まだ少し表情が固い。

「ああ」瞬は頷いた。

「そう・・・でも、そうよね」渚は小さく頷く。何かを勝手に納得したらしい。

「よく知らないが」瞬は一応言っておく事にした。「別に貴女がサイトAだからといって、特にどうこうしようとは思っていない。葉月から話を聞いていて、少しだけ気になったただけだ」

「でも、サイトLは知ってるんでしょう？」

「いや」瞬は軽く首を振る。

「もしかしてと思ったけど、あの本を読んでないの？」

「本？」

「あ、物置にあった、あの本ですか？」葉月が聞く。

「物置？」瞬が葉月に聞く。

「伊奈先輩と一緒に住んでる・・・たぶん、藤村さんだったと思うけど、その人の物置」

「ああ」瞬は思い出した。「穴があいてたっていうあれか」

「そうそう」葉月は頷く。

「見てないからなんとも言えないが・・・タイトルは？」

「えっと・・・」葉月は思い出そうとする。

「タイトルはいいの」渚がそう言った。「くだらない神話みたいな本を読まなかった？」

「神話か。悪いが俺はあまりそういうのが得意じゃない」

「そういうの？」渚が聞く。

「お兄ちゃんはファンタジーとか読まないんですよ」葉月が何故か楽しそうに言った。「最近まで日本で一番吸血鬼を知らない高校生だったんです」

「それはもういい」瞬が無表情で言った。「昔の話だ」

「とにかく」渚がそこで間を作る。瞬と葉月が彼女に注目した。「読んでないのね？」

「ああ」

「読んでないのに、サイトLを共有出来たって事？」

また分からない話だった。

「共有と言われても分からないが」

「どうやって、あの男と2人きりになったの？」渚がすぐに言い直す。

「それか・・・」聞かれても困った。知らないものを説明出来るわけがない。結局、瞬はこう答えた。「よく分からないな」

その返答に渚は驚くでもなく、ただ黙った。

瞬の顔をじっと見つめる。

何か探ろうとしているのか、渚は真剣な表情だが、それを見て瞬は困った。何もない腹を探られるのが一番困る。それが無駄な労力

だと教えてあげたいが、何もない事を証明するのは至難の業だった。仕方なく黙って見つめ合う。

やがて、何もない事が確認できたのか、渚は視線を逸らす。やっ
と解放されたと思った瞬だったが、渚はすぐにまたこちらの目を見
据えた。

まだ何かあるのか。

瞬がそう思っていると、渚は少し躊躇う様にしてから、こう言っ
た。

「あなた、何者なの？」

凄く縁のある質問だった。

主にこの容姿のせいだが、何度も何度もそう聞かれた。面白半分
に聞かれる事もあれば、彼女の様に真剣に聞かれる事もある。全部
合わせれば数え切れない程だった。この間も、あの男に何度か聞か
れた。

ほとんどの場合、答える義務はない。だが、そういえば今回は違
った。

「瞬」

「え？」

「葉月の兄で、荒瀬瞬。その節は妹がお世話になった。ありがとう」
そう言ってからお辞儀する。

もし会う事があったら言わなければならなかった。タイ
ミングが難しいが、言えるときに言っておくべきだろう。

瞬が顔を上げると、やはり渚は驚いていた。何故か自分がお礼を
言うと、相当意外性があるらしい。だが、もちろん、そんなものが
あっても全然嬉しくはない。

だが、伝わればそれでいい。最悪、伝わらなくてもよかった。

「私も」渚に抱きついたままで、葉月が言った。「渚さん、ありが
とう」

渚はまだ少し呆気にとられた様子で葉月を見る。

2人の顔はかなり近い。だが、葉月は動じることなくその視線を

笑顔で受け止めた。

伝わっただろうか。

「・・・私がサイトAだとして」

不意に渚がそう言った。葉月が少し首を傾げる。

瞬の方を向いてから、彼女は続きを口にした。

「それが、どういう意味か分かる？」

意味。

瞬はもちろん知らなかった。だが、もちろん予想はしていた。

葉月は渚が天使だったと言ったが、瞬は天使に会った事がないからよく分からなかった。役目を終えて帰ったとも言ったが、その辺りのルールもよく知らない。

だから、もっと現実的に考えていた。

渚が突然姿を消した理由。それは葉月達との関係が深まるのを回避する為ではないか。何故そんな事をするのかといえば、親しくなれば危害が及ぶ可能性があるから。

あの男はこう言っていた。サイトLがサイトAを手に入れると。

何か争いがあった場合、近くの人間を巻き込まないように。

優しくどこか大人びた少女だったと、葉月は言っていた。そんな人物だったら、そういう考えを持って実際に行動したとしてもおかしくはない。

瞬が答えずにいると、渚はこう言った。

「始まりって事」そう言ってから少し声を小さくする。「ここで消しておいた方が、安全は安全かもしれない」

消すという言葉が重かった。

渚が少し視線を落とす。

瞬と葉月は顔を見合わせた。お互いが考えている事はすぐに分かったが、瞬にはあまり気の利いた言葉が思い浮かばなかった。

しばらくして、葉月が渚の方を向いて言った。

「渚さん」

渚がそちらを向く。

「千村先輩がお礼を言いたって。だから会いに行きませんか？」

「・・・でも、私は何もしてないから」渚は小さく首を振る。

「そんな事いいんです。よく知らないけど、お兄ちゃんだってそう言ってるし」

「ああ」瞬は頷く。

「お兄さんは違うの。ちゃんと意味があることをしたんだから」

「だから、そんな事いいんです」葉月はそう言って微笑む。「詩織先輩も橘先輩も会いたがってます。明日でもいいから、会いに行きましょうよ」

「・・・会わない方がいいと思う」

そう言った渚の顔は少し暗かった。

「渚さん」その時の葉月の微笑みは、渚に負けなくらい大人っぽかった。「やっぱりまだ伝わってないじゃないですか」

「え？」渚が驚く。

「伝わるまで、絶対離しませんから」

渚はしばらく葉月の笑顔を唾然とした表情で見つめていた。しばらくして、そのままの表情で瞬の方を向く。

瞬は頷く事しか出来なかった。正直言って何の意味もない動きである。本当に気が利いてないと自分でも思ったが、仕方ないので葉月に任せるしかない。こういう時に葉月の方が自分の何十倍も力を持っているのは、経験則からも明らかだった。

渚は葉月の方に視線を戻す。

「葉月さん。私は別に良い人じゃないの。千村さんが目覚めたのは私とは全く関係ないし、あの本だって結局は私のせいなんだから。」

私に関わったら、きつといつか危ない目に遭うと思う」

「だから、そんな事いいんです」

「よくないでしょう？千村さんみたいに眠ったままになったり、もしかすると命を落とすかもしれないの。そんな事になったら・・・」

「そう言うと思ってました」

「え？」

「でも、そんなの嫌です。だって、もしここで私がそうしますって言ったら、渚さんはどうなりますか？どこに行っても、危険だから一緒にいられないって、ずっとそう言い続けるんじゃないですか？そんな事になったら、私、絶対後悔します」

「でも・・・」

「それに渚さんは良い人ですよ」

渚は返事をしなかった。黙って葉月をみつめている。

「私達の事、心配してくれてますよね。自分の事より心配してくれてます。そんなの、良い人に決まっています。まだそんなに話してないし、渚さんの事も全部は知らないけど、でも、それは分かります。だから、こんなに言ってるんですよ？私、渚さんの事が好きです。温かくて、優しくて、大人っぽい渚さんが大好きです。だから、そんな寂しい事は絶対に嫌です。消えるとか関わらない方がいいとか、そんな事言わないで下さい。危険でも、何も役に立てなくても、そんな事いいんです。ただ、大事な人だから不幸になって欲しくない。それだけなんです」

瞬は黙って2人を見つめていた。

自分だったら、ここまでストレートには言えない。思っている口には出せない。ましてや、1日にも満たない付き合いの人間を相手には尚更言えない。自分に自信がないからなのか、或いは薄情だからなのか、それは分からないが、ここまで言えない事だけは確かだった。

だが、葉月は言えてしまう。思った事、感じた事、瞬なら躊躇ってしまいう事でも、笑顔で言えてしまう。物怖じしないし、恥ずかしがったりもしない。迷うことはほとんどない、真っ直ぐな言葉。それはもちろん良い事ばかりではないが、それでも瞬は、それが彼女の掛け替えのない長所だと思っている。

果たして、今はどうだろうか。

渚はやや俯いている。葉月の両腕の中にいるせいもあってか、少し幼く見えた。

悩んでいる、或いは迷っているというのは誰でも分かる。そして、それだけ分かれば十分だった。それが最も重要な事なのだと、今の瞬はそう思っている。

「・・・渚って呼んで」

そう呟いてから、彼女は顔を上げた。

泣いていない。綺麗な笑顔だった。

「私の事、渚って呼んで。私も葉月って呼ぶから」

葉月は笑顔で頷いた。

伝わったようだ。瞬がそう思ったと同時に、葉月も渚から両腕を離す。2人はそのまま嬉しそうに視線を交わす。瞬は笑顔ではないが、悪い気はもちろんしなかった。

これでいい。

こうなると危険らしい。何か危ない目に遭うらしい。だが、それでもいいと瞬は思う。

守るだけだ。戦うだけである。妹とその友人を。

何故なら、瞬は兄なのだから。ただそれだけの事だった。

だが、それで十分だ。

瞬の右手に自然と力が籠もった。

「じゃあ、そろそろ帰るね」

渚の言葉に、葉月が頷く。

「うん・・・あ、そうだ。携帯の番号とアドレス、交換しておかないと」

「でも、私携帯持っていないんだけど」

「え、そうなの？」

「やっぱり、持っていないと変？」

「うーん、どうかな。学校の友達にも持っていない子はいるけど・・・あ」

葉月はそこで気付いたようだった。

実を言うと、瞬はかなり前から気付いていた。瞬の位置からはよく見えるのである。だが、言えるような雰囲気ではなかったし、それほど重要な事でもないので言わなかった。

「葉月」

男の声がした。だがもちろん、瞬の声ではない。葉月と渚から見、瞬の反対側からだった。そちらを向いた渚は、その人物を見て固まった。

大男だった。瞬は彼より大きい人物を、相撲取り以外で見た事がない。そして、相撲取りよりも明らかに筋肉が多い。筋肉が多いというか、筋肉の固まりだった。今も、着ているシャツとズボンがパンパンである。普通のスポーツ選手や格闘技の選手だとしても、果たしてここまで鍛える必要があるのかと思えるほどの、筋骨隆々を絵に描いたような大男である。

妙な間がたっぷりあってから、渚は葉月を見た。説明を求めているというのが、表情だけでもよく分かる。

葉月は真顔でこう言った。

「お父さんだけど・・・」

渚はその言葉が脳内で上手く処理できないらしい。しばらく葉月の顔を見つめた後、大男の方を見て、そして最後に何故か瞬を見た。まあ、それもそうかと瞬は思う。

祐介に、きつと片親がヒグマに違いないと言わしめるほど、瞬の父親は逞しい体をしている。そして、その父親と瞬の共通点といえば、男である事と、恐らく人類らしい事くらいだった。髪や瞳はもちろん、顔立ちも体つきも似ているとは言い難い。家族は顔立ちが少し似ていると言うが、雰囲気とかなんととか、精々そんなレベルだった。他には、強いていうなら、外見だけで怖がられるという共通点はあるが、瞬が女性に対して恐れられているのに対して、この大男はその迫力と威圧感で、専ら男性を畏怖させている。

いずれにしても、大抵の人は、これが父親だと言ってもまず信じていない。幼い頃父と海外に行った時など、何度空港で止められて確認されたか、数え切れない程だった。

「・・・友達か？」

父が葉月に聞く。低くて野太い声だった。

「うん。えつと・・・三枝松さん。三枝松渚さん」

「そうか」

そう言っただけ渚を見る。身長もかなり高いので、完全に見下ろす形になる。彫りが深くて、どことなく中東系の顔立ちだが、黒い瞳が綺麗なのがアクセントになっていた。今日は休みだからか少し無精髭が伸びていて、汗もかいているが、精悍さはいつも通りである。

また固まっている渚をしばらく観察してから、彼はこう言った。

「・・・よかったら、晩ご飯でも食べていきなさい」

父は基本的に優しい人だが、いつも恐喝しているように見えてしまうのが残念だった。

そのまま、開いている玄関をぐり抜ける。もちろん彼用のサイズに作られているわけではないので、いつも窮屈そうである。

父は家の中に消えていった。

どういうわけか、玄関前は嵐が去ったような空気になっていた。
主に渚がだったが。

「・・・食べていきなさいだって」

葉月の声に、渚は我に返ったらしい。

「・・・え？あ、うん」

「食べていく？」

「あ、ううん。そんなの悪いし」

「悪くないと思うけど。今日ってなんだっけ？」

葉月がこちらを向いたので、瞬は答える。

「天ぷらじゃないか？山菜を貰ったとか言ってたし」

「あ、そっか」葉月が渚に向き直る。「ふきのとうとか嫌い？」

「さあ・・・食べた事ないから」

「じゃあ、食べてみたら？お父さん、板前だから美味しいと思うよ」

「板前？」渚が聞き返す。言葉の意味を聞いたわけではなく、あの
大男の職業だと思えなかったのだろう。冗談で元K1王者と言った
ら、信用されるような男なのである。

「揚げるのは母さんだと思う」瞬は一応指摘した。

「そんなの別にいいの」葉月は口を尖らせる。「私だって揚げるけ
ど、でもお父さんの指導付きだから美味しいと思う。渚さん・・・
渚も揚げてみる？」

「え？」渚はその誘いが意外だったようだ。

「お父さんが休みの時は教えて貰うの。何気にお兄ちゃんが一番上
手だよね」

「そういえば」瞬は思い出した。「まだ掃除が途中だった」

「そうなの？あとどれくらい？」

「もう少しだと思う。間に合ったら手伝う」

「いいよいいよ。今日は渚がいるから」葉月は笑った。

「そうか」瞬は渚を見た。「悪いが、よかったら付き合ってやって
くれ」

「え、でも、迷惑じゃ・・・」渚は瞬と葉月を交互に見た。

「全然」葉月は笑顔で言った。

「ああ」瞬は相槌を打つ。「少なくとも母さんは喜ぶ」

「それに、天ぷらを揚げた事ないけど」

「じゃあ、もずくの相手でもいいし」葉月がそう提案した。

「もずくって？」渚は聞き返す。

「まあ、いいからいいから」そう言って葉月が渚の背中を押す。「みんなに紹介しないと」

そのまま2人は玄関に入っていく。

葉月は当然だが嬉しそうだ。元気が戻ったようで、瞬は少し安堵する。

対して、渚は少し戸惑っているように見える。だが、やはりそれだけではない。

なんとなく楽しそうだ。

それならいいと思う。少なくとも、前の彼女の表情よりはよっぽどいい。

瞬は物置に戻る為、元来た道を引き返す。

葉月も渚も自分で道を選んだ。もしかすると危険かもしれないと渚が言った、だけど2人が幸せだと思った道。2人ともそれを自分で決めた。そして、2人ともその道を歩くに相応しいと瞬は思う。だったら、そこを歩く2人を自分は守るだけである。

自分はまだ弱いが。

男は強くあれ、か。

その通りだと瞬は思う。だが、男でも女でも、強くても弱くても、する事は一緒だった。自分が女だったとしても、そして自分が弱いからといって、見て見ぬ振りは出来ない。

自分が2人のすぐ近くにいる以上は。

弱くても。似合わなくても。相応しくなくても。

瞬の紅い瞳は真っ直ぐ前を向いていた。

千村多恵は目を覚ました。

そうは言っても、自分の場合、すっきりとは目が覚めない。起きてすぐの頃は、視界が定まらない程朦朧としている。もちろん、気持ちいいわけではないが、もうだいぶ慣れてしまっていた。このままじっとしていれば、次第に全身に血液が巡るようになって、霧が晴れていくみたいに視界もはつきりする。体温も温かくなる。とにかく慌てない事だった。

何か物足りない。そうぼんやりと考えていると、多恵は気付いた。そういえば、詩織の電話がない。なんでだろうと思ったが、すぐに思い至る。今日は休日だからだった。親友のモーニングコールは平日だけで、それは分かり切っているのに、休日は決まって物足りない感じがする。

なんとなく詩織の事を考える。詩織は多恵と違って物凄く朝が強い。毎日早起きだし、毎日欠かさずランニングをしていると言っていた。あまりに自分とかけ離れたライフスタイルなので、羨ましい以前に、想像してもあまり実感がわかなかった。

一度くらい爽やかに目覚めてみたいとも思うが、それすらも想像するのが難しい。

すっきり目覚めるとはどういう感じなのだろう。

だんだん、視界がはつきりしてくる。

多恵はふと何かを忘れているような気がした。

なんだろう。

夢。

ふと浮かんだその言葉に、多恵はなんとなく引っかかった。

多恵は夢を覚えていた事が一度もなかった。朝起きたら忘れてしまうのだ。もしかしたら、そもそも夢を見ていないのかもしれない

と思う事もある。夢を見るのは比較的眠りが浅い時だというから、自分の眠りが深すぎるとすれば辻褃が合う。

だが、多恵はそれは嫌だと思った。

すっきり目覚められないのは、もう慣れてしまったからいい。そういう体質だからと思えば諦められる。

だけど、夢は見てみたいと思った。

夢というのは話を聞いていると楽しそうだと思う。意味が分からない話も多いし、怖い夢もあるらしいけれど、でも見てみたい。そして、そういう話を自分もしてみたい。今朝こういう夢を見たという話を詩織にしてみたい。その時の詩織の反応を見てみたかった。自分はこういう夢を見るのだろう。

さっきまで、もし見ていたとしたら、どんな夢だったのか。

思い出そうとしたが、やはり駄目だった。

仕方ない。

だいぶ身体が温まってきたので、多恵は身体を起こす。立ち眩みはしなかった。どうやら大丈夫そうだ。

少し大きく息を吐く。

その時、ふと気付いた。

そういえば・・・

この前の事件。自分が眠ったままになった事件。その時、詩織にこう言ったらしい。

L。

今は全く記憶にない。

だけど、もしかして、それは夢の記憶だったのだろうか。

そもそも、ひょっとしたら、夢を見たまま話していたのだろうか。いずれにしても、夢に関係あるのかもしれない。

どんな夢だったのか、少し気になった。

Lの夢。

想像もつかない。

多恵はLという文字が特別好きなわけではないし、どちらかとい

うと縁がなかった。敢えて言うならSとかMの方がまだ縁がある。服とかドリンクのサイズとかを選ぶときでも、Lは最初から選択肢にない。あくまで印象だが、英語のテストでもSやMの方が頻繁に書くような気がする。どちらかというとき影の薄い文字だった。

他に何か特別な事があっただろうか。

多恵はベッドの上で上体を起こしたまま、ぼんやりと考えていた。何も思い出せない。

だけど、確かに思い出せないという感じだった。何もないのとは違う。何かあったのに忘れているようなそんな感じだ。

気になって必死に記憶を探る。

その時。

急に視界がぼやける。

多恵は横に倒れ込んだ。

なんだろう。

くらくらする。

まだ身体を起こすのが早かったのだろうかと思ったが、それよりもベッドから落ちなくてよかったと思った。

しばらくこのまま横になっていよう。

何か考えていよう。

えっと・・・

ふと多恵は思い出した。

確か屋上だった。

そこで話しかけられて・・・

誰だっけ。

思ったよりも優しい人で、そして変な人。

何か言ってたような・・・

なんだろう。

思い出せない。

そうだ。

あの時も思い出せなかった。

それはちよつと、無理かも。

思い出せなかった事を思い出すなんて、変な話。

多恵は少し笑った。

その時、音がした。聞き慣れた音。

携帯の着信音。

多恵の意識があつという間にクリアになる。

そのあまりの早さに、多恵自身が驚いた。

とにかく、電話を・・・

多恵は起きあがって、枕元にあつた携帯を手取る。頭も身体も何も異常はなかった。

電話は詩織からだった。

多恵の表情は自然と綻ぶ。

その時には、もう忘れていた。

自分が何を思い出して、何故思い出そうとしたのか。何の夢を見て、そこに誰がいたのか。そして、その人物が何を言っていたのか。それを忘れていた事も忘れていた。

だが、忘れていただけなのだ。それだけだから、安心して忘れていられる。

例え大事な事でも、忘れていただけなら、後で思い出せる。

それが夢でも。

或いは、辛くて危険な記憶だったとしても。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8107x/>

26のアナザーサイト/sightA

2011年11月13日03時10分発行